
にゃんこ(?)に転生ですか？ よろしい、ならばネギま！に転生だ

ミケ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

にゃんこ(?)に転生ですか？ よろしい、ならばネギま！
に転生だ

【ZINEID】

Z0406Y

【作者名】

ミケ

【あらすじ】

死んだ（消滅） 幼女 ネギまに転生 化け猫無双の話です。
文才もこの先の展開もまったく無いのに、ノリと勢いで書いてしまった作品です。

初投稿です。あまり期待しないでください。

最近、更新が遅くなっています。週1～2の状態ですができる限り更新したいと思います。

第1話 ものじり、なりばテソフレだ（一）（前書き）

初投稿です。
駄文です。

見切り発車です。

文才皆無です。

ですが、後悔はしていない。キリッ

第一話 ものじこ、なりばトノフレだ(一)

田が覚めると、そこはたらいの中だった。

「（い）れば『なかなか良いたらい（木製）』だな」

「（・・・・・）」

「（・・・・）」

「（ふわ）」

そろそろ現実を見ようか（お前にたらい（木製）の何がわかるんだ
？といつしつ）（ませなしで）

「（え）（いつなつたー）」

いや、焦るんじやない。

まず今の状況を整理して、冷静に対応するんだー！

Q 「俺の名前は？」

A 「ただ今名無しです

Q 「年齢は？」

A 「一応転生直後だから〇歳のはず

Q 「今の状態は？」

A 「どうからでも見ても仔猫です

Q 「とりあえず何故仔猫?

A 「…少し心当たりがありますが今はどうでも良いです

Q 今の状況は?

A 「たらい（木製）の上の『やんこ』状態で川を流れています

Q 「泳げますか?

A 「仔猫なので溺れます

Q 「この状況で冷静になりますか?

A 「無理です 誰か助けて下さい

Q 「誰のせいですか?

A 「確実にあいつのせいです（怒）

Q 「今、一番やりたいことは?

A 「この状況から抜け出してあいつの〇・Ｈ・Ａ・Ｎ・Ａ・Ｓ・Ｈ・Ｉした
いです

まあ何故こんなことになつたか考えてみるか、つかつす気が付いて
はいるんだが・・・・・

それは遡ること数時間前

「知らない天井だ」

なぜか言わなければいけない気がした。後悔はしていない！

「アリサゼビーだ？」

上を見ると

ビームでも続く白い空間

下を見ると

ビームでも続く白い空間

前を見ると

ビームでも続く白い空間

右を見ると

土下座している幼女（セーラーの金髪）

左を見ると

ビームでも続く白い空間

後ろを見ると

どじまでも続く白い空間

「・・・・・」

上を見ると

どじまでも続く白い空間

下を見ると

どじまでも続く白い空間

前を見ると

どじまでも続く白い空間

右を見ると

ものひとつなく、トト座してこの幼女（ふるふる震えてる）

左を見ると

どじまでも続く白い空間

後ろを見ると

どじまでも続く白い空間

「・・・・・・・・・」

上を見ると

どじまでも続く白い空間

下を見ると

ジーラもでも続く白い空間

前を見ると

どうでも続く白い空間

右を見ると

でも、ここにいるのは、おじいちゃんの孫娘（上田麗子）が、おじいちゃんを見てる

左を見ると

後ろを見る

ヒルガモの生態

「（）」これはアレなのかつ！？アレしかないのかつ！？）

今俺の目の前には、
、
、
、
、
、

1 真っ白な空間

2 テンプレ幼女による土下座

「この一つの状況から導き出される答えは

「やめしゃべ、なうば轉生だー！」

「ふうえつ？！（ビクッ！）う、うええええええんんんんんんんんんん！？！（いきなりの大声に驚き、涙を流して逃げる幼女）

「

ピンポン

幼女を落ち着かせるまでお待ちください

第一話 もうじこ、なりばトノフレだ(一) (後書き)

回収に編集つて・・・
「めぐなさいーーー！」

第零話 よりこそ、なりば死に際だ（前書き）

今回は、短いです。

第零話 よりじい、ならば死に際だ

さりに遡ること数時間前

俺、桐谷悠樹きりやゆうきは悩んでいた。それは、今週末の義妹の誕生日プレゼントを買つたためだ。

俺の家族は、父、義母、義妹、俺、の四人家族だ。

母親は体が弱かつたため、俺が3歳のときに病氣で亡くなつた。

そして、俺が小学校に入学したころ父親が今の義母と再婚した。

義母には俺と一つ違かいの「香織かおり」という娘がいた。だが、再婚して間もなく両親の仕事が忙しくなり、香織の面倒は俺がみると多くなつていつた。

自慢じゃないが香織はかわいい。きれいな黒髪、白い肌、可愛らしい瞳、ピンク色の唇。（イメージとしては某友人が少なめそな人の集まりの戦国武将の名前の女の子を黒髪にした感じ）

そして、幼いころいつも自分の後を付いてきて楽しそうに笑う義妹のことを本当の妹のように可愛がってきた。

そんな大切な妹のために、バイトの給料一ヶ月分（今月は5万）を

持つてプレゼントを買いに来たわけだが

「（——良い物が見つからない——）」

どれだけ探しても『これだつ……』というものが見つからぬため学校が終わつてから一時間ほど雑貨屋やアクセサリーショップを彷徨つていた。

「（やるやうかえらなきやいけないか）」

日が傾き始めそろそろ帰ろうかななどと考えながらアクセサリー店を出て歩いていると、ふと近くにあつた雑貨店が目を引いた。

ガラス越しに見えたものに目線が止まる

「（おおつーこれはなかなかいいな）」

自分で『これだつ……』という感覚があり、迷わずそれを手に取つた。

いい物を買ったとご機嫌な帰り道

財布の中身がほぼ無くなり明日の昼飯をどうしようかと考えながら歩いていると、少し先に香織の姿が見えたので買ったアクセサリーを隠した後、驚かせてやろうと後ろからゆっくり近づいてポンッと両肩に触れた瞬間

意識が白に覆われた

第零話 よりじい、なりば死に際だ（後書き）

今日中にもう一話いきたいです

同日に改定中

第2話 ょうじい、なりばトノフレだ(2)（前書き）

幼女の話し方え

完成度が低いミケを許してください

第2話 ょるじい、ならばテンプレだ（2）

少し熱くなつてしい幼女を怯えさせてしまった。

その後、幼女を落ち着かせるのが大変だつた。

落ち着かせるために頭を撫でたらものすゞく懐かれた。（金色の髪の間に猫の耳が見えた）

とても可愛かつたのでもつと撫でテクを披露したらものすゞじことになつた。（想像にお任せしますb y 作者）

ピンポーン 幼女が落ち着いたので説明してもうつています。

「簡単にまとめると、

- 1 幼女は神様である
- 2 私生活や仕事のストレスから酒を飲みまくつて酔っ払つた（神様はエターナルロリータです）
- 3 そのまま寝てしまい風邪引いた
- 4 それでも仕事はやつてくる
- 5 がんばつたが、失敗した
- 6 僕の存在が消滅
- 7 魂回収 + 土下座
- 8 説明中 今ここ
といふわけだな

幼「は、はいそなんですか／＼。クチュンッ！
もどそうとしたけど手遅れでどうにもならなくてえクチュンッ！

それであなたあ・・・桐谷^{きりや}悠樹^{ゆうじゅ}といつ存在を消してしまいましたあ
クチュンッ！」

お前のせいいか思ひと怒りが沸いてくるが、これだけ申し訳なくされ
ると怒ることもできない。

そして雰囲^{ムカシ}気が妹に似ている。

俺はまだ高一で、まだまだたくさんやりたいことがあった。
俺は彼女も欲しかったし、マンガやラノベの新刊も読んでいないし
大切な義妹の誕生日プレゼントも渡せていない。

「存在が消滅つて言つのはどんなん意味なんだ？」

幼「あなたがいたと事実がなくなつてえ、いなかつたことになりま
すう、ほんとうにごめんなさい」（涙）クチュンッ！

「――― そつか」

「（死んで悲しまれるよりは存在が消えてしまったことが救いなの
かもしけないな）」

幼「あのう、考え事しているといふ申し訳ないのであります、今後の

「」じでお話があるのですが。クチュンッ！」

すっかり忘れられた神様（幼）

幼「ん～？なにか馬鹿にされたような気がしますけど、今はいいです。クチュンッ！たぶん判つているとは思いますが、元のセカイの輪廻の輪から排除されてしまったあなたは元のセカイに戻ることはできないのでえ

1 別のセカイにトリップ

2 別のセカイに転生

3 ちょっと強引に神格化して部下に／＼（ポツ）

4 （絶対にさせませんが）消滅

の4つから選んでもらいます。クチュンッ！」

ふむ、4は勿論なし、3は大変そだから嫌、2か1だな。
とゆづか3はどうやるんだ？

「3はどうやるんだ？」

「――それはあ／＼／簡単ですけど言ひにくいのです……
実際にやりますかあ／＼／

かみさまのターン

かみせせ（せじょくじゅ）のビーハーがたてにわれている。
むつせはてこわいのせせをかんじた。いつかはまづぐんだーー！

むつせのターン

むつせせじりいんにはなしをもどした。

むつせはてこわった！

「どんな世界に行くんだ？」

これは大切なことだ。心構えがあるかないかではだいぶ違う。決して逃げたわけではないんだつー！

- 幼「むう、やんねんですぅ（ボソッ）。なら、1か2ですねえ。クチコンツー逝つてもらうセカイは私が管理しているセカイになりますからあ
 - 1・弾の リア
 - 2・魔法先生ネギま！
 - 3・スクール・オブ・ザ・ツド
 - 4・P S Y R N
- の4つのセカイのどれかですねえ。クチコンツー！」

はーアウトオオオオオオオオオオー！！！

普通の世界でいいのにヤヴァイフラグがいつぱいだああああーーー（特に3は悪意しか感じられない）

「3と4はなしで、あんなに危ない世界には逝きたくない…となると1か2だが、ネギまのほうが好きだからネギまに転生させてくれ」

アンチするかは気分と立場しだいだな

幼「ネギまのセカイですねえ。クチュンッ！転生すると元の名前は忘れてします。本当は記憶も消えるんですけどおサービスです。それと特別に名前をふれませんとします（最初のプレゼントが名前／＼）あとは、お詫びにいくつか願い事を叶えますから何がいいですかあ？クチュンッ！ちょっと無茶なことでもいいですよ／＼」

「（ゾクツ）・・・なら、家族が幸せに暮らせるようにしてくれ。あと義妹に俺が買ったプレゼントを渡してくれ。あとは氣と魔力を無限にして、身体はできるだけハイスペックにしてくれ」

幼「能力とかはいいんですかあ？いろいろ付けますよう？クチュンツ！」

これはもつ決めである

「そりだな。あらゆる効果を付与した魔道具を無から創造できる能
力『魔具創造』の能力をくれないか」

幼「いいですよ～いろいろいじって死がないよういろいろ強化
しておきます。クチュンッ！もうこいんですかあ？クチュンッ！」

「ああ、なら送ってくれ」

「ん、なんだ？」

幼「わかりましたあ、でもその前におねがいしていいですかあ？ク
チュンッ！」

幼「実は私には名前がないんです。クチュンッ！あなたに付けて
もらいたいんですけどお良いですかあ？／＼／クチュンッ！」

「それぐらいなら、くらでもいいぞ
んてどうだ？」

「そりだなあ、アルスな

アルス「アルスですか／＼ではあなたには
と言つ名前を送りましょう。クチュンッ！私から送られる名前な
ので私という神との縁が深くなりますよつう。それではいつてらつ
しゃい。死んだら私のところに来る様にしましたけど（ボソッ）」

「えつ、な」――

彼の身体が光りだして一瞬の後消えた

アルス「じゃあ、サクサク書き換えましょう。クチュンッ！」

アルス（幼女）は書類になにかを書き込み始めた

アルス「なんだか気分が良いですねえ、クチュンッ！ふわふわし
ますう、クチュンッ！」

だがアルス（風邪）は気づかない。自分が思っていた以上に風邪が
酷かつたことに。

だから、あんな悲劇が起こつてしまい慌てていろいろ付け加えたの
はまた別の話。

第2話 よろしい、ならばテンプレだ（2）（後書き）

神様（幼女）の名前はギリシャ神話の月の女神アルテミスからとりました。
同日改定

主人公設定 + アルスの失敗（前書き）

やつと主人公設定

後悔は、していないつ！キリッ

主人公設定 + アルスの失敗

主人公設定

旧名 桐谷悠樹（きりや ゆうき）

新名

性別 男

年齢 0歳（16歳）

種族 ???

容姿 人V E R 十人中八人がかつこいいと言つ容姿（BLACK CATのトレイン＝ハートネット） 肉体変化によつて20歳頃まで変更可能

猫V E R 黒猫

性格 優しい 無口だが心の中ではしっかり反応している 少し気まぐれ シスコン 鈍感

能力値（F a t e風）「」は猫時

筋力 A - 「B -」

耐久 C + 「C -」

敏捷 A 「S -」

魔力 E X

気 E X

幸運 S （アルスの加護）

能力

名称 魔具創造（アイテムメーカー）

効果 好きな魔道具を造り出せる。創造や使用には多くの魔力や気を使うが両方ともE Xなので気にせず使えるが、一回の使用にこの

かの最大魔力の30%近く必要である。（魔道具によつて変化）

名称 神からの贈り物（ギフト）
効果 いろいろな能力を神様が（勝手に）贈つた
名前をもつたことも関係しており、さまざまな効果が得られる。

名称 肉体変化（にくたいへんか）
効果 神からの贈り物。アルスの「年老いた姿は見たくない」と言うわがままから付与された能力

名称 猫化（ねこか）
効果 神からの贈り物。アルスの「ねこ耳でおそろい／／／」と言うわがままから付与された能力
完全な猫化から人の状態にねこ耳、尻尾、猫の手足などに変化することができる

名称 完成（ジ・エンド）
効果 神からの贈り物。めだかな物語のアレと同じ能力
etc

性格	ドジ	少し黒い	甘えたがり
名前	アルス		
性別	女		
年齢	エターナルローラ		
容姿	金髪、猫耳、尻尾付き	ちっこくてかわいい	
実は	月を司る神様		

能力値 (Fate風)

筋力	神様だもん
耐久	神様だもん
敏捷	神様だもん
魔力	神様だもん
気	神様だもん
幸運	神様だもん

能力	名称	神様だもん
能力	戦うときには諦めろ	

ナーニーれ理不尽 b y 「徹夜明けのハイテンションでやつちやつた」と語る容疑者

神が存在する場所と人間が存在する場所では時間の流れが異なる。神は大量の仕事をゆっくりとした時間の流れの中できなしていく。(それでも仕事が多くてストレスが溜まるが)

アルスSIDE

アルス「あれえ？ れはじゅうじとじょお？（汗）」

そのため、それに気づいたときは風邪が治つてありますぐに自分が失敗したことに気がついた。

アルス「決して撫でられたのが気持ちよかつたとかあ、自分の好きなタイプだったとか考えていたわけじゃ ain't ain't ないんですからねえ～。勘違いしないでくださいよ～～」

決してシンデレラでもビーナスもないため、神は彼のために書類に手を加え彼に手紙を送った。

アルス SHIDEN D

主人公設定 + アルスの失敗（後書き）

名前とアーティファクトが未定な件について
申し訳なく思っています。
ヒロインどうしよう（汗）
アンケートをとりたい、、、

第3話 よりじい、ならば確認だ（前書き）

どうにか名前は決まりましたが
アーティファクト、ヒロインと問題は山積みです。
こんな粗末なものでいいならどうぞ。

第3話 よりじい、ならば確認だ

SIDE

我輩は仔猫である。名前はまだない。

違うんです。言つてみたかっただけなんです。ほんの出来心と徹夜明けのテンションのせいなのです。

だからモノを投げつけないでください。ほんとにゴメンナサイ。調子に乗りました、スマスマセンデシタ。

・・・・・電波を受信していたみたいですね。もう大丈夫です。進めましょう。

さて未だに流れ続けている私ですが何もできないので、この『なかなか良いたらい（木製）』のなかでゆっくりくつろいでいました。だってどれだけ強くても禄に制御できない仔猫ですよ？身動きが取れません。しかもこの『なかなか良いたらい（木製）』のサイズは

仔猫三分のといったところでしょうか、ものすごくつづりますし落ち着きます。一人猫鍋状態です。

口調が少し変わっている気もしますが転生の影響でしょう。そこまで気にしません。それより此処がどこかと何故こうなったかが気になります。

そこでふと何か違和感を感じ（転生してから感覚が鋭くなつたようで）、「なかなか良いたら」の底を見ると

文字が浮き出ていました。ちゃんと文字が消えるのか心配です。

「こんなにちはあ、アルスです。少し失敗しましたあ ごめんなさいです。

ナーチを間違えたかというと種族です。本当は人間としていつでもらう予定でしたが、私がいろいろ弄つたのでセカイに人として認識されなくてエラーが出てしまい今の状態（私と同じ猫状態）と言えわけなんです。

修正はしたのでもう大丈夫ですからあ思つ存分生きてください。

私はここで待つてますよ（行っちゃうかもしだせんが）。あとお、そこは並列セカイなので原作ブレイクしてもかまいませんから。今は大戦の十年前のイギリスの田舎ですから。それにい十年間も修行する時間がありますからがんばってくださいねえ

それではあ、能力情報、種族名（私がつけましたあ）、あなたの名前（これも私がつけましたよ）、そのほかのいろいろな情報を送りますからねえ、普通なら廃人確定ですが安心してください決して痛くしませんし廃人なんてなりませんからあ。

まあ少しチクリとするかもしれませんがあ、それくらいは大丈夫ですよねえ じやあいきますよう

数秒後、頭の中に異物が入り込むような感覚があり、鈍い痛みの後に一気にたくさんの情報が入り込んできた。

だがそれも数秒で終わり、まだ違和感と気持ち悪いが今の状況を理解した。

まずは自分の名前のこと。これは、神様からもらった名前のほうで自分の名前は自分で思い出すことができません。そして、私が神様から貰った名前は『リゲル』そして種族は・・・『古猫』? よくわかりませんが単純に靈格の高い猫つまり猫族の上位種でしょう。その靈格はかの龍樹や真祖の吸血鬼と同格かそれ以上らしいです・・・

何だからヤツちまつた感がすごいですね。しかもこれ不老不死じゃないですか?
少し試してみましょうか・・・

少しやりすぎちゃつたりゲルです。なにぶん初めてだつたものです
から加減が難しく、魔力と気が放出してしまい、それが混ざり合い。
・・・・

周りが爆発しました。そのおかげで、岸まで着きましたが周りはぼ
ろぼろです。

ん？私ですか？すぐに回復しましたよ。もうすでに人外ですからこ
の程度じゃ痛くも痒くもありませんね。ですが、冷静に考えればわ
かることなので少し焦り過ぎてしまつていたようです。

そんなことよりすごいのがこの『なかなか良いたらい（木製）』で
す。傷ひとつついていません！この『なかなか良いたらい（木製）』
は実に良いパートナーになりそうです。

さて、陸にも付けたので早速能力の確認をしましょう。まずは、人
型になれるかどうかですね。

身体に流れる力を徐々に人の形に変化させていく、そして力の濃度
を上げていき最後に身体を力に重ねるようにイメージすると一瞬の
発光の後に、元の自分を成長させたような感じになりました。

少し身長が伸びてますね175cmくらいでしょうか。まあ、それ
はとりあえず後でいいです。まずは周りの修復の魔具を造らないと
いけません。

創造したものはただのバット（木製）。能力のイメージは某天ちゃんが使っているアレです。なんだかこれを持つとフルスイングしちゃうになりますね。

では、気を取り直して元の状態にもどれと念じながら魔力をこめ、手首を使って軽くまわします。

「あの独特的フレーズが流れる」

うん、どうにかなるものですね、ただのバットに周囲のものの時間を巻戻すという概念を貼り付けたようなものなので、魔力消費が半端じゃありませんがどうにか使えます。

でもこれは完成度が低いですね。無駄が多くすぎて能力を引き出しきれません。なのですぐに破棄しました（大量の魔力を流し込めば耐え切れずに塵になるんです）

いろいろ試して慣れていくために修行しないといけませんね、ならばアレ（・・）を造つてみましょうか。

そうです！修行と言つたらダイオラマ魔法球です！…今回造つたのは1時間を5日にする物です。超強力です。魔力が無限にあるからこそできる荒業です。この中で魔道具製作を極めてあの計画を実行するのです！

エターナルロリータ保護計画をーー！

つと、人がこっちに向かつて来ているようですね。早く此処を離れましょうか。

第3話 よりじい、ならば確認だ（後書き）

後書き

すぐにわかると思いますが、造る物は力シオペアですね。

無限の魔力と $10年 \times 365日 \times 24時間 \times 5日 = 438000日$

1200年ありますからどうにかなりますよね（汗）

修行の基本は、魔力と気の効率化です。

完成があればすぐにできると思いますので

次回はキングクリムゾンします。

最後にヒロインとアーティファクト案を募集します。

誰か、意見をください

第4話 よろじい、ならば計画準備だ（前書き）

修行回です。とはいっても完成があるのでサクサクいきます。
描写はありませんが近いうちに入れる予定です。

駄文なので修正が入るかもしれませんととりあえず投稿です。

戦闘

第4話 よりじい、なれば計画準備だ

リゲルSHIDE

まずは、エターナルロリータ保護計画の説明をしよう。

この計画は時間跳躍の魔道具を造りエヴァが吸血鬼化した直後に保護し、自衛できる程度の魔法を教えようと言う計画である。

この計画は魔法の師であり恩人という立場につけ、正義の魔法使いからエヴァ自身を護ることができるというすばらしい計画だ「どういきやがつた！」・・・すばらう「まだ近くにいるはずだぞ捜すんだ！」・・・計画である「みつけたぞっ！」・・・・（グスツ）

「やじこーるぞー！捕まえろー！」

「何だこの猫は？魔獣なのか？」

「これだけ魔力を持った猫なんてこの世界にいるはずないだろー！」

「おいっーそつこにいつたぞー！」

「任せろー！」

「ハアハア・・・もふもふ・・・ふわふわ・・・ジユルリ

ただ今、正義の魔法使いに追われております。そして最後のやつが怖い（ガクブル）何か大切なものを失いそうな気がする。少し危機感（貞操の）を覚えながら猫特有の動きで回避し続ける。さて、何故こんな事になつたのかといつと・・・

服を着ていないため猫になつて逃走

魔力が少しもれてて見つかる

正義の魔法使いたちが魔力を持つた猫＝魔獣＝悪と判断して問答無用で捕獲しようとしてくる

逃走中 今ここ

という訳で追われているのです。

「おいっ！ ちゃんと捕まえろ！」

「お前こそしつかり追い込めよ！」

「お前らバカだな」

「何だとっ！」

「魔法使えばいいだけだろうがつ！『風の精霊』11人。縛鎖となつて敵を獲れえろ！ 魔法の射手・戒めの風矢』

やつと魔法を使つてきました。今すぐこでも逃げる事はできませんが
がチャンスですから見ておきくべきです。

「チツーはずしたか。」

「じつかり狙えよ。」

「（フツ）下手だな

「なんだとつ。」

「なんだ？ 戦るのか？」

「本当の魔法の使い方を見せてやる。」

「上等だ戦つてやる。じやねえか。」

「（フツ）格の違いを思つて知るが良い。」

魔具で認識阻害と人払いの結界を張り、魔法発動媒体として短めの

その後、見つからぬように隠れながら正義の魔法使いの魔法を見て「魔法の射手」などの魔法を完成させました。その後正義の魔法使いの皆さんには仲間割れでぼろぼろになりながら帰つて行きました。
そして私はといふと・・・

・・・・・

「『魔法の射手 速弾・氷の17矢』」

ドドーン！

杖を造りだして魔法の練習中です。^{魔法}魔法を覚えなくても魔具を使えばいいのだけなのですが、使える手札が多いに越したことはありませんし、エヴァに教えるつもりならば自分がその魔法を理解しないければなりません。なので実際に使ってみているわけなのですが、少し問題があります・・・

「使える魔法が少ないですね。」

その問題とは、視た魔法が圧倒的に少ないとのことです。さすがに正義の魔法使いさん達も仲間割れでは強力な呪文を使ってはいませんでした（使えなかつただけかもしませんが）。
視たは完成のおかげで十全以上に使いこなすことができるのですが、見ていない魔法はどうしようもありません。

ですから今使える魔法は

- 1 魔法の射手
- 2 武装解除
- 3 治療
- 4 認識阻害
- 5 障壁

の5つしかありません。なので今の私の攻撃方法は魔法の射手だけなのです。教えることもできませんし魔法だけでは自分の身も守れません。（魔力で「ゴリ押しすれば話は別ですが）

ですから今は魔法の修行に専念します。計画を後回しです…まずは魔法世界に行ってみましょ…うか・・・・・・

キングクリムゾン!!

あれから3年が経ちました

私は魔具をいくつか使って魔法世界に渡り、様々な魔法を見てきました。あれからやつたことといえば

旅費を稼ぐために剣闘大会に参加して対戦相手の技を本人以上に使いこなしプライドをへし折ったり、とある国の魔法庫に侵入したりとあらゆる魔法書を読破したり、紛争地帯に近い村を巡り治療して

回つたり、紛争で身寄りのいない孤児達を村に連れてきたり、そこを襲撃してきた（自称）正義の魔法使いを殲滅したりしてました。最初は殲滅することに抵抗がありましたが、奴らがやっている犯罪の数々を知つてからは情け容赦なく一人も残さず処分しました。あいつらは嫌いです！

おかげで正義の魔法使いからは『黒の抹殺者』、『死を運ぶ黒猫』、『無音の掃除屋』、『あいつ速すぎて攻撃あたらねえ』と呼ばれ、紛争地帯の村では『癒し手』、『もふもふ様』と呼ばれていた。（この頃ネコ派が圧倒的に増えた）

十分なほど技を磨いた私は、計画を実行ために魔具を造り始めた・・・

第4話 ものじこ、なりば計画準備だ（後書き）

どうだったでしょ？

あまり文才がないので雑な話ですみません。

少しでも楽しんでもらえたら幸いです。

次回、エヴァとの邂逅です。

第5話 よろしい、ならば計画実行だ（1）（前書き）

読み直しては改定を続けています。

一話に付き数回は改定しているといつ衝撃の事実・・・
はあ・・・

エヴァの過去を書いてみましたがオリジナルです。
グロいです。苦手な人にはお勧めできません。
シリーズも入っています。

第5話 よりじい、ならば計画実行だ（1）

リゲルSIDE

ふうやつと完成しました。これこそ私が造った時間跳躍魔具、その名も『ベテルギウス』。これは使用者の魔力を大量に吸い取りますが、簡単に時間や場所を指定できるという素晴らしいものです。・・・えつ？ でもエヴァンジエリンのいる場所が分からぬから駄目だろ？ と言いましたか？

心配には及びません。こんなこともあろうかと造つておいたのがこの古めかしい「長杖」。その名も『導きの長杖』といい、その効果は某便利な未来のロボット猫のとある道具の数倍以上の効果です。これで大体の方向がわかるのでその方向へ行けばいいだけです。我ながら素晴らしいものを造つたと自負しています。

これで安心して計画を実行できます。一応切り札も造つておいたのでもし戦闘になつても負けるはずがありません。それでは、

『ベテルギウス待機状態』
時間指定「600年前」
ウントダウン)
す

スタンバイ
タイムセット
設定開始
設定終了
待機状態解除
ベテルギウス始動しま

プログラミングスター ポイントセット
プログラミングスタート
スタンバイリース

それでは目的を果たしにいきましょうか・・・・・・

エヴァンジロンド

私はここで死ぬのだと思った。体のいたる所に傷があり、血が付いている。今は亡きアイツにかけられた呪いでこの体になつてからは傷がすぐに治るのだが、この一週間休む間もなく襲撃してくる人たちによつて身も心も限界だ。

目の前には光のようなものを飛ばして攻撃してくる杖を持ったたくさんの人たちがいる。私は逃げようとするが体が全く動かない。そして私は近づいてくる光の束を見ながら目を閉じた・・・・・

十数年前

私はとある国の辺境伯の娘だった。両親と我が家につかえている執事やメイドさんたちと一緒に幸せに暮らしていた。毎日が楽しくて、優しい人たちに囲まれて私は幼いながらに自分が幸せなのだと感じていた。だが、私の10歳の誕生日にすべてが変わった。

その日はみんな舞踏会の準備に忙しくて私は一人ぼっちだった。私の誕生会の準備の為なのだとこともわかつていて、我儘を言って私の為に準備してくれている人たちや心から祝福してくれる人たちに迷惑をかけたくなかつた私は自分の部屋ベットの上でお人形遊びをしていた。

そして、遊んでいるうちにいつのまにか寝てしまつたみたいで、起きたらもう外が暗くなつていた。もう舞踏会が始まつていてもおかしくない時間なのに誰も呼びに来ていなことを不思議に思いながら私は急いで部屋を出た。

既に、舞踏会が行われているはずだから急いで大広間に向かつた。使用の人たちとすれ違わないことに少し不安を感じながら大広間の扉に手をかける。扉が厚くて聞こえないが、中は少し騒がしいようだ。多分私が未だに来ていないことのせいなのだと思います。新しい気持ちでいっぱいになりながら扉を開けたと同時に中から叫び声が聞こえた。

そこには地獄が広がつていた

「いやあああああああ-----」

「痛いっ！痛いよっ！」

「誰か助けてくれ！まだじにだぐない」

「あしつ！わだじのあしがないの！！」

「・・・・・・・・・・・・」

そこには、血まみれになつた人、足のない人、内臓が出ている人、すでに息絶えた人たちがいた。

私は一瞬で何が起こつているかわからなくなり何もしゃべることができなかつた。だから一人のヒトが近づいて来ることに気がつかなかつた。

「（）きげんようお嬢さん。君が今夜の主役かい？」

話しかけられた瞬間、私の周りの時間が止まった氣がした。すぐそこには全身黒い服を着た若い紳士のような恰好をした人がいる。一目見ただけで気づく強烈な違和感、原因は一両手に持つている血まみれのナイフ。

それは、この惨状を起こしたのは自分であると宣言していることと同義である。私の体が震えだす。生まれて初めて感じる死の恐怖が体を支配する。逃げたいと思うが逃げられないことは確実だ、なぜならすでに私の目の前に彼はいるのだから。

「余興は気に入ってくれたかい？少しでも楽しんでくれたなら満足だよ。」

私は彼の言っていることが理解できなかつた。この惨状を余興といった彼のことも理解できるはずがなかつた。

「ハガニア…はやく逃げるんだ！」

「はやくその男から離れなさい！」

そこに両親の声が聞こえた。無事であったことを喜びながらそちらに向くが、次の瞬間つ！

「今は僕が彼女と話しているんだ。邪魔しないでくれないかい？」

ズシュツ！

嫌な音が聞こえたと同時に、胸からナイフの柄を生やした両親が仰向けに倒れた。

「あつ、えつ？」

目の前の光景が理解できない。両親の胸から血がどんどん出していく、うめき声をあげている。このままでは両親が死んでしまうという事実に理解が追い付かない。

「ここんなまつたく面白い田舎に立ち寄つたら、こここの領主の娘が誕生会を開くと言つたから見に来たのさ。馬車を襲つて入つてきたのはいいけど、主役がいなかつたから適当に話を合わせながらその辺の豚と話してたけど自慢ばかりで面白くないし、かといって雌豚どもは臭い香水の匂いをさせながら色々使って来るからつい苛々して殺しちゃつた？」

でもそのおかげで君の素敵な表情も見れたからあいつらにも感謝しないといけないね。それはさておき、キヨウはキミの誕生日だねだから君に素敵なプレゼントをあげよう。これは僕がいつか不老不死になるための研究してきたことによつてできたモノ。不完全だけど不老不死と強大なチカラを与え、その身を闇に落とす『呪い』。

それの実験台第一号の称号を君にあげよう」

彼が何かを唱え始めるが、私はそれを聞いてはいない。目の前の両親を見続ける。

「汝にそのチカラを『えん。
呪いを・・・」

突然目の前が真っ黒になる。そして体の中のナニカが変わつていき熱いものが注がれる感覚して身を裂かれるような激痛が走る。やつと痛みが去り目が見えるようになると目の前には両親を傷つけ、大切な人たちを殺したヤツがいた。その瞬間、私は感じるがままにチカラを振るう

私の右手が彼の胸に突き刺さる。

「『」ふつ！なんだこの力は！？吸血鬼にしただけのはずなのに！こんな力があるはずがない！こんなことはあり得ない！僕が死ぬなんてことあるはず…………！」

ヤツは声にならない叫び声を出しながら燃え始めた。その炎は黒く、周りに燃え広がってゆくが私は急いで両親の元に駆け寄る。

「ハハハハハ...かあれハハ...」

両親を呼びながら肩を揺らす・・・だが両親はすでに息を引き取つていた。

その夜、一人の少女の慟哭が燃える屋敷の中に響き渡つた。

エヴァンジエリン・SHIDE

いつまでたつても痛みがこないことに気がつく。目を開けて確認しようとすると、頭上から声が聞こえてきた。

「ふう、いきなり危ないですね。大丈夫ですか可愛らしいお嬢さん？」

そこには、黒い髪をした男の人が立っていた。その人を見た瞬間、「トクンッ」と胸が高鳴った気がした・・・

第5話 よろしい、ならば計画実行だ（1）（後書き）

更新がきついです。

内容は変えませんが後で改定します。

評価、感想、ヒロイン、アーティファクト案待ってます！！

第6話 よりじい、ならば計画実行だ（2）（前書き）

明日は休みだからストックを貯めておきたいです。
2話更新できたらいいな・・・

第6話 よりじい、ならば計画実行だ（2）

リゲル SIDE

ベテルギウスを使って時間跳躍した私が一番初めに見たものは数人の魔法使いから放たれたであろうたくさんの『魔法の射手』でした。たつた三年でしたが密度の濃い生活（逆恨みされてよく襲撃されました）をしてきた私は一瞬で気持ちを切り替え、すぐさま周囲を確認し、私の魔法発動媒体である指輪をつけます。目の前には複数の魔法使い達があり、『魔法の射手』を放っています。その狙いの先には小さな金髪の少女が傷だらけで倒れています。私はすぐさま無詠唱で『多重超高密度魔法反転障壁』を少女の周りに張りめぐらせます。

これは3年間の修行期間時に創り出したオリジナルスペルのうちの1つで多重高密度魔法障壁に大量の魔力を流し密度を底上げし、障壁内で循環させることで外部からの魔法を強引に吸収し障壁に編みこんである反射魔法カウンターと增幅魔法ブーストによってその魔法を倍返しにするという極悪な障壁です。いつもは攻撃を受け流すように超高密度魔法障壁を薄く張るだけですが、何故か使う魔法を間違えてしましました。

けつ決してわざとなんかじゃありませんよその小さな少女がエヴァンジェリンだとすぐに気づいたからなんてことは決してありません。

「ふう、いきなり危ないですね。大丈夫ですか可愛らしいお嬢さん？」

周囲は木々に囲まれており氣絶した魔法使いの集団たち以外には誰も居なさうなのでそこにいる少女に声をかけます。

その姿はまさに満身創痍で、私は彼女が口を開く間も与えず彼女を抱き上げすぐさま周囲を魔法で探り、見つかりにくいであろう場所に向かいます。

「えっ！あのっそのっ・・・キュウ／＼／

彼女は少し慌てたようなしぐさをした後何故か氣絶してしまいました。こんな状態ですからきつと疲れていたのだと思い、彼女が休めるよう準備を始めます。まずは周囲に認識阻害と人払いの結界を張り（もう魔具を使わなくても簡単に結界が使えるようになります）ダイオラマ魔法球を取り出します。周囲に索敵の魔法をかけた後、少女と一緒に魔法球に入ります。

さて、彼女の目が覚めたらまずは説明しなければいけませんね・・・

ふと、田がさめる。

自分はベットに寝かれていた。身体を起して傷の具合を確かめるともう完全に治っていた。自分は何故こんなところで寝ているのだろうかを考える。あの変な集団に襲われてからの記憶がはつきりしない

ノンノン

「うーー。」

すぐさま起き上がり周囲を確認してすぐ身動き出せるように身構える。すると、黒髪の十代後半ぐらいのかっこいい男の人人が料理を持って入ってくる。

「調子はどうですか？ ほとんど治っていましたが傷は治療せて貰いましたけど、どうかおかしいと感じるとおはりませんか？」

しばらくの間、声が出ない。その様子を見て男の人は慌てた様子で

「どうかおかしいところがあつたんですね？ すぐに見せてくださいー。」

と言つてきた。しばらく放心していた私だが、倒れる直前のことを

思い出し顔が熱くなつている」とを自覚しながら肝心なことを聞く。

「助けてくれたのか?」

少し警戒しながらこの数年で身につけた少し威圧するような口調で彼に問う。

「そうですよ。まずはこれを食べてください。お腹が空いでいるでしょう? 本当は服も用意したかったのですが、文物の服なんて持っているわけがないので・・・」

その言葉に警戒を少し強める。なぜ見ず知らずの自分にこんなに優しくしてくれているのか判らない上に傷が治るところを見られたのだ。しかもそれを気味悪がるわけでも無く私に話しかけてくる。本来ならすぐに逃げ出すところだが此処は彼の家のように、私はこのことは全くわからないし何処に逃げればいいかもわからない。そして一番の理由は逃げたとしても逃げることはできないからだ。どんな方法を使ったのかは知らないが私を追つてきた人たちを一瞬で倒してしまうほどの人なのだから、私が逃げ切れるわけがない。だから私は彼から少しでも情報を聞き出そうと彼に話しかける。

「リリはどこだ?」

「私の所有している別荘ですよ。ああ、自己紹介を忘れていました。私の名前はリゲルといいます。化け物どつし仲良くしてもらえた嬉しいです。真祖の吸血鬼エヴァンジョン?」

一気に警戒を最大にして彼の動きから目を離さない。少しでも油断しないように、彼が油断した瞬間に全力で逃げられるようにしつつ、気になることを言った彼に問う。

「確かに私は吸血鬼だ。だが真祖とはどうゆう意味だ？そして何故名前を知っている！」

「そのままの意味ですよ。あなたは真祖の吸血鬼、ハイディライトウォーカーですよ。でなければ吸血鬼がこの日差しの中で十分に動けるわけが無いでしょう？何故名前を知っているのかというとあなたを探していたからですよ。」

たしかに、この身体になつた頃は大変だったが今はもう大丈夫だ。この男は本当のことを行つているのだと判断して少しだけ警戒を緩める。だが、まだ聞きたいことはある。質問には答えてくれるようだからじっくり聞いてみるとしよう・・・・・

リゲルSIDE

あれから彼女はあらゆることを聞いてきた。できる限りのことは答えたが、「何故私のことを知っているのか」と「お前が化け物というのはどういう意味だ」という質問には嘘を答えた。この二つの質問

は今答えるべきではないと判断したからだ。そして質問の嵐が終わ
つた後、彼女は少しばかり警戒を解いてくれたのか先ほどのよ
うな口調ではなく見た目相応の口調で

「助けてくれてありがとう。あと、食事もありがとうございます。」

と言ひて、私が作ってきた料理を食べ始めた。そして彼女が食べ終わる時間を考えながら紅茶を入れる。

「ほいどうぞ。食後のお茶です。」

「あつありがとう／＼／＼

でも何故だか先ほどから彼女は目を合わせてくれません。何故でし
ょう?

「おおのの川」

「はい、なんですか？」

そんなことを考へてゐると彼女が話しかけてくれました。

「よかつたらなんんですけど、わつ私のことを・・そのつ・・えつエヴァって呼んでくれませんか？／＼／

え「あはなみだめ + うわめづかこであこしゅうでよぶよつよつを
ゆつしてきた

ゆ「あはなせじがほうかこしそつだ。」「つかはぱまつぐんだーー

りげるのターン

りげるはすぐやまよつをゆうをのんだ。

りげるはえ「あ のえがおをかくとくした！

その後私は彼女をエヴァと呼び、エヴァは私のことをリゲルと呼ぶ
ことが決まりました。

「（）ほんつ、それではエヴァに大切な話があります。これから話す
ことは（）の世界の最大の秘密のひとつであり今後エヴァが生きてい
く上で必ず関わることになるものの話です。聞いてくれますか？」

「うん。それはさつきの人たちのこと？」

「そうです。彼らが使っていたモノの正体は魔法でそれを使う彼らは魔法使いです。そして私も彼らと同じ魔法使いです。ですが私はエヴァの味方ですから安心してください。ここまでいいですか？それでは説明を続けますね。まずは、魔法のことを説明します。そもそも魔法というものは・・・・・・・・

そして私はエヴァに魔法のこと、魔法世界のこと、既にエヴァが魔法世界で賞金首になつていてるだらうことを説明した。

「そして何故私があの「エヴァ！」・・・エヴァを探していましたかと言つと、エヴァが身を護れるだけの力をつけさせるためです。私も化け物ですから、力の無い化け物がどうなるかは簡単に想像が付きます。先に言つておきますがこれは強制ではありませんし、私に護つて欲しいと言つならそれでもいいのですがいつまでも護り続けると言つことには無理があります。なので私は、魔法を教えたいと思っています。エヴァはどうしたいですか？」

エヴァは少し考えるような仕草を見せた後まっすぐに私の目を見て

「私に魔法を教えてください。」

と言つてくれました。だから私は、まず魔法の危険性と本質を教えていきました・・・・・

「エヴァはどうしたいですか？」

そう聞かれたとき私は迷った。新しい力、大きな力を手に入れると言つことは利点もあれば欠点もある。これは自分自身が体験してきたことだからいやと言うほどわかる。力をつければ今の敵には勝つことはできるかもしねいが、より多くの強い敵を呼び寄せることがある。それに比べて強い彼に護つてもらえるという案はとても魅力的だつた。彼は強いから負けることは無いと思うし、最低でも逃げ切ることぐらいはできると思つ。そして、彼と一緒にいられる。だがそこで私は重要なことに気が付く。私が彼の足を引っ張つてそのせいで、彼が私を庇つて怪我をしてしまうかもしれない。

そんなことは耐えられない！護つてもらつて、こんなに優しくしてくれている彼に迷惑をかけ続けるなんてことはしたくない！それにいつまでも荷物のままじゃ彼と対等にいられない。そう思った私は新たな決意を胸に彼の瞳をまっすぐに見つめる。

「私に魔法を教えてください。」

絶対に強くなるんだ という決意を胸に彼の話を聞く。今はまだ届かなくてもいつか彼の隣に堂々と立つていられるように、立つている女ひとが自分であるために。そしてこの気持ちをいつか彼に・・・・

第6話 よりじい、ならば計画実行だ（2）（後書き）

リゲル（主人公）は決してロリコンではありません。エヴァは一応合法口りです。だから今はまだ手は出していませんがもし出したとしても大丈夫なんです！もし駄目でも可愛すぎるエヴァが悪いんです！そうに違いがありません！

第7話 よろしい、ならば計画実行だ（3）（前書き）

お詫び

遅れました

投稿する直前全てが消えてしましました。

思い出して書いてみました。

短いです。本当に申し訳ない

第7話 よりじい、ならば計画実行だ（3）

リゲル SIDE

エヴァと会つてから数年経ちました。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック『氷の精霊21頭。集い來たりて敵を切り裂け！ 魔法の射手・連弾・氷の21矢』！」

「その程度じゃ掠りもしませんよ？」

私は今、エヴァと1日に1回の模擬戦をしているところです。これはエヴァに戦闘経験を積ませる為であると同時に、私が修行の成果を見極めこれから何処を鍛えるのかを見極めるためでもあります。エヴァに戦い方を教えるに当たって、私は魔法だけでなく体術も同じように教えてきました。なぜなら魔法が使えない場所もありますし、魔法発動媒体をとられたりその他の使えない状態に陥ったときに身体ひとつである程度戦えないと困ると言つ自分の経験から、両方を教えることにしました。

「戦闘中に考え」となんて余裕だな？ハア！」

そう言いながら、エヴァは蹴りからの突きを放つてきます。私はそ

れをかわし、捌きます。

「そんなことないですよ？最近は少し危ない時も増えてきましたし技も魔法も上達していますよ。」

エヴァと修行し始めてから魔法球を使用していたので実質50年ほど経っています。もう既に私が今まで戦ってきた人たちが束になつても片手で叩きのめすことができるほど彼女は強くなつたと思います。

その間にも、エヴァを狙つた襲撃は絶えることはありませんでした。なのでその人たちはエヴァの経験の糧になつてもらいました。その時エヴァに、殺すつもりで向かつてきたものの恐ろしさを知つてもらいました。そして相手を殺すということも経験してもらいました。でないと私がいなくなつたときにつぐに殺されてしまうかもしれません。それほどにまで殺す覚悟の有無は勝敗に関わつてくるのです。

でも50年ほどそんな生活をしていたせいでしょうか？最近エヴァの口調が威圧的になつてきました。もしかすると反抗期でしょうか？そつならとても寂しいです。

「ツ！（模擬戦中にそんな顔をするなーーー）・・・ふ、フンッ！いくぞ！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！『来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹雪け常夜の氷雪　闇の吹雪』！」

蹴りをかわした直後にエヴァが魔法を放つてきますが、虚空瞬動で

かわします。そして即座に魔法を放ちます。

「まだ修行が足りませんよ？」 紅き焰 「

「チイ！」 氷櫛 「…」

エヴァは魔法をつかって防ぎますが、一瞬私のことを見失った隙にエヴァに手刀を突きつけ、模擬戦の終了を宣言します。

「はい、では此処までです。大分強くなつてきましたね。」

「私の攻撃は掠りもしない癖して良くそんなことが言えるな？」

でもエヴァは本当に強くなりました。本人はあまり自覚していないようですが、もう十分に最強レベルに到達しています。後エヴァに足りないものは経験だけです。もう私が教えられることはほとんどありません。

だから、そろそろお別れです。

「どうしたんだ？大丈夫か？」

少し考え込んでいたみたいですね。表情に出でてしまったのかエヴァ

が心配してくれます。口調は変わつても優しいところは変わらないので嬉しいです。

「いえ少し今後の修行ことを考えていました。で、そのことなのですが、テストをしたいと思います。」

「テストか？今日は何をするんだ？」

今までテス^トは時々やつっていました。ビニビニの盗賊団を倒せだとか、龍を一匹倒して来いとかですが。いつのまにか毎回ご褒美を上げると言つルールができてしましましたがそれは別にいいでしょう。

このテス^トが終わつたら全てを話して私は元の時代に帰ります。だから最後に弟子の成長を見ておきたいのです。最初は理不尽な力に屈して欲しくないと思つて鍛えていました、ですが今では家族も当然です。離れるのは悲しいですが、それも彼女の糧になるでしょう。もともとそのつもりだったはずです。

「明後日メガロメセンブリアで行われる剣闘大会に参加して優勝してくれる」それがテス^トの内容です。これは一人で行つてもらいます。私はここで待つていてますから、しつかり優勝してきてくださいね？」

「案外簡単だな？てつきり龍の巣でも壊して来いとでも言われるかと思つたぞ？」

「そんなことはしませんよ、龍がかわいそうですし。エヴァも簡単にお金が稼げるのでもちらのほうがいいでしょう?じゃあ、晩御飯にしますから、お風呂に入ってきてください。」

「テストの後の『褒美を楽しみにしてるぞ?あと、晩御飯は肉の気分だ。』

「はいはい、わかりました。今日はローストビーフにでもしましうか?」

今日またいつもより腕によりをかけて作りましょう。

エヴァンジロンドード

私は食事の後ベットに潜り込んで考え事をしていた。少し彼の様子

があかしかつた気がするからだ。ほんの少しだけど実際にそう感じたのだ。この50年間、いつも一人で過ごしてきたからこそ気づくことができた本の小さな違和感だが、何故か気になつて仕方が無い。そんなことを考えていると

ガチヤ

部屋の扉を開けて彼が入つて来る。

「今日もですか？自分の部屋があるんですねからそこで寝ねばいいでしょ？」

「別にいいだろう／＼／私が勝ち取った権利だ！それにリゲルもい
いと言つただろう？」

「あれはそう言わなかつたらエガアが泣きやうだつたからでしょ？あれはするいです。」

「リゲルも何でもいいといつたくせに嫌だと云ひかねないか！」

「別に好きな人が居る訳でも、誰かに好かれている訳でもないでしょ
うから別にいいですよ。」

流石に少し頭に入れる。多分コイツは私のことを妹の様にしか見ていないのだろう。よく考えればわかることだ。こうやって私が何を言つてもすぐに言い返してくれる。

でも私はそんなところでは満足できない。妹なんかじゃなくて、私は・
・

「ヒュア、ボーッとしてないでもう少し詰めて下さい。流石に少し狭いですよ。」

「・・・はあ」

時々心が折れそうになる。まあ、こんなのだから他の虫が付く心配が無いのだが、このままじゃいつまで経つても妹のまま・・・・。そのうち誰かがこの朴念仁の魅力に気づいてしまうかも知れない。そしていつかその誰かと結ばれて、私を描いてしまったかもしない。そんなことは耐えられない。

だから今度のテストのご褒美はもう決めてある。このテストが終わったら、この気持ちを伝えてその答えを貰うんだ！

第7話 よりじい、ならば計画実行だ（3）（後書き）

本当は一話投稿する予定でしたが、時間の問題と一回消えてしまつたことによる精神的ダメージで1話だけになりました。
次回はお別れです。

第8話 よりこい、なればまた会つ口まで（前書き）

一日かけて修正案を出し、なんだかんだしてたら……書けちや
つた……

無理やり感が大きいですかね？

いくぞ読者!!!!（作者に対する）優しさの貯蔵は十分か？（

今日は fate の映画も見てました）

第8話 よりじい、ならばまた会つ口まで

リゲルSIDE

翌朝エヴァがメガロメセンブリアに旅立つた後、ゆっくりと準備を始めた。今住んでいる場所はメガロのはずれにある山奥のログハウスであるから、エヴァが戻ってくるのは早くても明日の朝だ。まず私は手紙を書くための魔具の準備をした。

この魔具はビデオカメラのようなもので撮った映像を空中に投影するものである。

そこにエヴァへのメッセージと彼女の為に造った幾つかの魔具を残して私は再びベテルギウスを使つた。

「さよなら。また600年後に会いましょう。」

エヴァンジロジンSIDE

私は朝は早くに家を出てメガロメセンブリアに行きさつとテストをこなし、優勝賞金を持つて彼の待つ家に急いで帰つた。そして家に着いたのが、翌朝の四時じろだつたことから相当早く帰つてきたことがわかる。

この時間なら彼も寝ているだろ? だからベットに潜りこんで一緒に寝よう? と思い彼の部屋に入る・・・・・

でもそこに彼の姿は無く、ベットの上には「この魔具に魔力を流せ」と書かれた紙といくつかの魔具が残されていた。

そうして私は手紙に書かれていたように丸い宝石のような魔具に魔力を流した。

そしてこれがあの時感じたほんの少しの違和感の正体だったのだと気づくのには、とても遅すぎた・・・

「エヴァ、おかえりなさい。そしてごめんなさい。」

映し出された彼からの第一声はおかえりなさいと謝罪だった。

そして映し出された彼から聞かされたのは、自分は未来から来たこと、いつかまた会えるはずだと言つことだった。

これだけでも、十分おかしくなつてしまいそうなことだったがそれにはまだ続きがあった。

それは私という存在の根幹を揺るがすほどのことだった。

彼が話したのは、吸血鬼化と私にかけられた魔法についてだった。まず私は完全に吸血鬼になつていて、もう人間に戻ることはできないと言つこと、これはもう覚悟していたし彼が未来から来たことと不老不死であるから後から考えると良かつたともいえるのかもしない。

だがもうひとつは違つた。彼は私の記憶が偽者だと言うのだ。そして彼はここにある魔具の内の一つはそれを解くための物であることをその使い方を教えてくれた。

そして私はそれに魔力を流す。魔具は彼以外が使うことを想定されていないため、他人が使うには大量の魔力が必要になる。手が震

えてるのがわかるが、より強く魔具を握り締めて押さえつける。

私はこの数年で身体も心も強くなつた。だから彼はこのことを教えてくれたのだと思う。

私はそんなことを考えつつ魔力が根こそぎ削られていく虚脱感を感じながらそれを起動させた・・・・・

私はとある国の皇女で、ジージの領主の城に預けられ何不自由なく暮らしていた。

そのころの私はまだ人間だった。

だが私は10歳の誕生日の朝、日が覚めた時にはすでにこの体だった。

そして私はあらゆるもの憎み、神を呪いながら私をこんな姿にしたあの男へ復讐を果たし城を出た・・・・・

私は全てを思い出した。そして自分の記憶が偽りだったことがわかり混乱している中考える。

おかしいのだ、1つだけわからないことがある。私は復讐を果たした後、すぐに城を出たはずだ。

そしてそのまま時が過ぎて彼と出会つた。

ならこの魔法は何時かけられた？城を出たときか？それとも彼に会うまでの間にかけられたのか？彼がかけたというのは無いと思う

彼なら最初からそんなことをしなくていいからしそんなことはやらない」という確信がある。

なら誰が何の目的で？

解らない」とだらけで、彼も居なくなつて、彼に会ひには何百年と待たなきやいけなくて・・・

翌朝の日の出まで少女の声にならない慟哭は山に響き渡った。

いた。

そして翌日、山奥のほろぼろになつたログハウスの中の、今はもう所有者の居ないベットの上で目を真つ赤に腫らして泣き疲れて眠る少女の姿があつた。

第8話 よりこい、ならばまた会つ口まで（後書き）

こんな感じでどうでしょ？

どうにか修正できたとは思つんですけれど……

感想お願ひします！そしてアンケートにご協力お願ひします。

アンケート報告

ハーレムあり10ハーレムなし3

ヒロイン

マナ3、月映2、このか4、五月1、テオドラ3、裕奈1、のどか3、月詠1、茶々丸4、千雨1、くーふえ1、アスナ4、アキラ2、さよ1、刹那3

アーティファクト

猫っぽい奴（化かす形？もしくは猫科ライオン、チーター、トラとか）

黒猫関係（ハーディス？もしくは夜一？）

エヴァの魔具

映像投影型魔具

記憶封印解除用魔具

e t c……

大戦期時のステータス（前書き）

次回から大戦期にはいるかも・・・
その前に現時点のステータス

大戦期時のステータス

名前	リゲル・マクダウェル	(こうした方が何かと便利だつた為)
性別	男	
年齢	53歳	(ダイオラマを含めて)
種族	古猫	
容姿	人V E R	十人中八人がかつこいいと言つ容姿 (BLACK CATのトレイン=ハートネット) 肉体変化によつて5~20歳頃まで変更可能
性格	優しい	無口だが心の中ではしつかり反応している 少し気まぐれ シスコン 鈍感 基本は丁寧語ではなす
	正義の魔法使いは嫌い	

能力値(Fa te風)「」は猫時、

筋力	S+	「A+」
耐久	S+	「S」
敏捷	S+	「EX」
魔力	EX	
気	EX	
幸運	S	(アルスの加護)

能力

名称 魔具創造 (アイテムメーカー)

効果 好きな魔道具を造り出せる。創造や使用には多くの魔力や気を使うが両方ともEXなので気にせず使えるが、一回の使用にこのかの最大魔力の30%近く必要である。(魔道具によつて変化)

名称 自己流体術
効果 自己流で覚えた体術。完成を使ってあらゆる体術のいい所を抽出してある。

名称 武器使い
効果 あらゆる武器を使いこなす（完成による。）

名称 家事万能
効果 エヴァとの生活で覚えた。完成により全てにおいて超一流。

名称 気配探知
効果 エヴァとの生活で覚えた。半径30キロメートル圏内の全てが手に取るようにわかる。

名称 並列思考
効果 エヴァとの模擬戦中に覚えた。完成により、いくらでも並列思考ができる。

名称 無詠唱

効果 魔法を詠唱なしで使える。詠唱時と比べても威力は落ちない。

名称 神からの贈り物（ギフト）

効果 いろいろな能力を神様が（勝手に）贈った

名前をもらつたことも関係しており、さまざま効果が得られる。

名称 肉体変化（にくたいへんか）

効果 神からの贈り物。アルスの「年老いた姿は見たくない」と言うわがままから付与された能力

名称 猫化（ねこか）
効果 神からの贈り物。アルスの「ねこ耳でおそい／／／」と言
うわがままから付与された能力
完全な猫化から人の状態にねこ耳、尻尾、猫の手足などに変
化することができる

名称 完成（ジ・エンド）

効果 神からの贈り物。めだかな物語のアレと同じ能力

名称 不老不死

効果 寿命で死ぬことが無くなる。驚異的な回復能力を有する。

e t c.....

アーティファクト（まだパクティオーしてない）

名称 ????

効果 ????

名前	エヴァンジエリン・A・K・マクダウェル
性別	女
年齢	700歳以上
種族	真祖の吸血鬼 (ダイオラマを含めて)

容姿 書かなくてもわかるでしょう?
性格 書かなくてもわかるでしょう?

能力値（F a t e風）

筋力 A	
耐久 C	+
敏捷 A	+
魔力 A	++
気 ?	
幸運 B	

能力

名称 真祖の吸血鬼（不老不死）

効果 弱点を克服した吸血鬼であり吸血鬼の最高峰。寿命で死ぬことが無くなり驚異的な回復能力を有する。だが肉体の成長も止まるので、エターナルロリーータになってしまった。

名称 リゲル流体術

効果 リゲル直伝の体術。並みの魔法使いならいくらい束になつて襲い掛かってきても片手で倒すことができる。

名称 閻の魔法

効果 リゲルと別れてから生み出したオリジナルスペル。魔法を自身の体に取り込む事で全ての能力を強化する。

名称 合氣鉄扇術

効果 チンチクリンなオッサンに習つた体術。

名称 人形使い
効果 人形を操ることに長けている。これに伴い糸術も使いこなせる。

名称 氷属性無詠唱
効果 氷属性のみ魔法を詠唱なしで使える。詠唱時と比べても威力は落ちない。

e t c
.....

保有魔具

映像投影型魔具

記憶封印解除用魔具

e t c
.....

アーティファクト（まだパクティオーしていない）

名称 ???
効果 ???

大戦期時のステータス（後書き）

今日中にもう一話いけるかなあ？
かぜで寝込んでるから厳しいかも？

第9話 よりじい、ならば旅立ちだ（前書き）

感想お願いしますーそしてアンケートにご協力お願いします。

アンケート報告

ハーレムあり11 ハーレムなし3

ヒロイン

マナ4、月映2、このか4、五月1、テオドラ3、裕奈1、のどか3、月詠1、茶々丸5、千雨1、くーふえ1、アスナ4、アキラ2、さよ1、刹那3、千鶴1

アーティファクト

猫っぽい奴（化かす形？もしくは猫科ライオン、チーター、トラとか）

黒猫関係（ハーディス？もしくは夜一？）

アーティファクトはハーディス（魔改造ver）で決まりかなあ？まあ、魔具つかえば他に考へてるのもどうにかなるかな？

ヒロインは茶々丸、マナ、このか、アスナあたりで決まりかなあ？でも、このちやんはせつちやんとペアで考へないとだから・・・

まだまだ募集してます！

第9話 よりじい、ならば旅立ちだ

エヴァンジエリンSHIDE

彼が居なくなつてからもう600年以上たつた。今思い返すとあのときの私は酷かつた。あの後の数年間、頭の中にはいつも彼の顔が浮かんでいて、立ち直ることができなくて、襲撃してきた魔法使いはいつも皆殺しにしてきた。殺さなければ私が殺されてしまうだろうしな。

その後は殺さなければ生きられない時代もあつたし殺さずにする數十年もあつた。南洋の孤島に居を構えて人と交わらずに彼から教わつた技と自分の力を磨き続けていた頃もあつた。（この時に闇の魔法と人形使い開発した）

その頃は既に私も落ち着いていて、むしろ彼にまた会う時までに自分を磨き続けて彼をぶん殴つてやるんだ！と意気込んでいた。

そんなことをしていたらもうこんなにも経つていた。だけど彼は見つからない。十年ほど前から、私は自分の技を磨きつつ彼の捜索も始めているが、全く成果が無い。

いつかまた会えるといった彼の言葉を信じて探し続けてきた私は、連合の辺境のとある街に立ち寄っていた。

「おいつ、聞いたかよ？メガロの拳闘大会で優勝候補だつた＊＊＊＊＊が、やられたんだつてよ！」

「マジかよ！最近ラカンさんが出てないから今回はあいつが優勝候補筆頭だつたんじやねえのか？誰にやられたんだ？」

「それがよお最近出てきた奴でさあ、その戦いがえげつないんだよ。相手の技をそつくりそのまま返すんだ。普通なら物まねなんてして勝てるわけ無いだろ？でもそいつ、おんなんじ技使つてんのに使つてた本人よりも強えんだよ！」

「そいつなら俺も知つてるぞ。優勝賞金そつくりそのまま紛争地帯近くの村に配つて回つてるんだつてさ。そこら辺じやあ『癒し手』つて呼ばれて、けが人を無償で治してるらしいぞ？何かたちの悪い魔法使いには追われて、賞金もついてるらしいんだけどそちらへんの村じやあ神様扱いで宗教までできてるんだと。」

「魔法使いの間じや『黒の抹殺者』^{ダークレイヤー}、『死を運ぶ黒猫』^{ヘルキャット}、『無音の掃除屋』^{シードレス}、『あいつ速すぎて攻撃あたらねえ』^{ヒートレス}つて呼ばれてるつて聞いたぜ？」

「物好きな奴の居るもんだなあ？俺ならその金で遊びまくつてやる

けどな！」

「俺たちなんかとは格が違うんだじゃねえか？」

「「「そりゃあ～ちげえねえ！～！」」

大口を開けてガハハハと大笑いしながら男たちが隣を通り抜けていく。私はいちばん手前にいた男の手をつかむ。

「何だい？お嬢ちゃん？何か俺に用事でもあるのかい？」

人当たりのよさそうな笑顔を私に向けながら、私に話しかけてくる。この男は善良な人だつたのだろう、悪事に手を汚さなかつたのだろう、こんな小さい少女にも優しくすることができるのだから。ただ不運だつたのは、彼女にいちばん近い位置に彼がいたこと、たつたそれだけのことだろう。

「すまないがその話、チョットクワシクキカセテモラエナイカナア
？」

その日の夕方、とある裏路地で身体を震わせている男たちが発見された。

後日、男たちは震えながらこう語つた。

「あれは魔王よりもむつともつと恐ろしい笑顔^{もの}だった」と・・・
その内の一人が、新しい扉を開けてしまったのはまた別の話。（決して語らないよ！「振りじやなくてマジで」）

そして彼女の人形は彼らにこう言つた

「サイナンダッタナア、ケケケッ！」

リゲル SIDE E

「ふ〜、やつぱり白毛は落ち着きますねえ〜。」

本当はほとんど経つてないが数十年ぶりにこの時代に帰ってきた私は、近くの村にある私の家のうちの一つでゆっくりしていた。なぜ家のうちの一つといったのかと言うと、各村を巡って治療していた私は、一箇所にとどまり続けるというのはどうしても難しかった。そのことを知った各村の人たちが治療しやすいようにという意味と

お礼を兼ねて私に造つてくれたのがこれらの治療場兼家である。

今は紛争も落ち着いていて、けが人も出でていない。孤児院のお金もまだ十分に渡してあるから急いですることは何も無い。それに近くには魔法使いらしき気配もない為、ゆっくりくつろぐ事ができていた。もし何かあつても各村にいる自警団の人たちには、非常用の通信装置も渡してあるし、それが壊れたりしたらすぐに判るようにしてあるから安心だ。

「そろそろですかね？」

そしてわたしは今、此処を出ようと考へている。ここはもう十分やつていける。近くの村同士が協力し合っているし、私の活動に賛同してくれている「正義の魔法使い」ではない魔法使いたちもあわせて數十人ほど各街村にいる。

そう考えた私は、ここいら一帯を彼らに任せ旅に出ようと思つ。エヴァも探さなきやいけないし、ナギたちにも合流するつもりだ。オスティア崩落による被害もどうにかして食い止めるつもりだし、魔法世界自体の崩壊に対する準備もしなくてはいけない。ここに留まり続いているわけにはいけないのだ。

「さて、まずはみんなに話をなくては・・・

私は各村に繋がる通信機を使って話したいことがあるとこいつを伝え、集会場がある村の中心へと向かつた・・・・

近くの村の代表が集まり、遠くの村の代表は通信機越しで集会の準備が終わった後、私は今後のことについて話していった。

勿論始めは引き止められたが、私の決意が固いと判るとすぐにわかつてくれた。

いつかはこうなるだろ?と覚悟していただろうし、何時までも自立しないわけにもいかないこともわかつていたんだと思う。皆に「今までありがとうございました」と感謝を伝えその場は少し湿っぽくなつたが、その後は街ぐるみで夜遅くまで宴会をした。

翌日にはもう村に彼の姿は無かった。

こうして彼は住み慣れた村を離れ、戦争の渦の中心へ向かっていった・・・

数日後・・・・・

彼が旅に出て一時的に少し寂しくなっていた村は、活気を取り戻しつつあった。

そこに、ここいらでは見慣れないかわいらしい少女が訪ねてきた。

「此處に『癒し手』^{ヒーラー} はいるか！？」

村を訪れて早々、数日前に出て行った青年のことを尋ねてくる少女の真意を測りかねた村人たちは、彼女に詳しく話を聞き始めた・・・

そして判つたのは、彼女は長寿種で彼の弟子兼妹のような者であるということと、数年前から彼を探して一人で旅をしていたということだった。

村人たちは彼女に「大変だつただろう」とか、「一人で大丈夫だつたかい？」などの労いの言葉をかけた。そしてとても言い辛そうに彼が数日前にこの村を去り、旅に出たことを伝えた。

ショックを受けるだろうと思つてどんな言葉をかけようかと悩んでいた村人たちに彼女は

「氣にするな！やつと手がかりを掴んだんだ！絶対に見つけてやる！首を洗つて待つていろよリゲル！一発殴るだけでは許さんからな？フツハハハハハ――――――！」

と答え村人を大いに引かせたと共に、彼は彼女に何をしたのだろう

という疑問を抱かせた後、上機嫌で村を去つていったとさ・・・・・

第9話 よろこび、ならば旅立ちだ（後書き）

こんな感じでやりますか？

感想、アンケート募集中です！

第10話 よりしげ、なりば・・・なつ何だお前はーこれは私のじゅうた がふく

サブタイトルが幼女によつて占領されたため、作者は逃亡しました。
・・・

11／08改定

流石にはじめてを奪われるのは無いだろうと思いつながりしなしにしました。

第10話 ようじい、なひば・・・なつ何だお前はーこれは私のじいじーがふ

リゲルSHIDE

村を出てから、1週間経ちました。私は『導きの長杖』を使いながら薬味父（まだ12・13歳頃）を探しています。とは言つても大戦が始まるまでにはまだ時間がありますから、通りがかつた村々で病人を治療しながら向かっています。

そんなことをしているうちに旅に出て1週間目の夜を迎えた。周りには村は無いようなので今日は野宿です。まあ野宿といつても魔具『ログハウス』を使っているので安い宿よりは質は大分いいですし、常時魔法使い専用の人払い兼認識阻害魔法を使っているので襲われる心配もありません。（エヴァがリゲルを見つけられない要因）

その後、晩御飯を食べてお風呂に入つて寝たわけです。

此処までは何の問題も無かつたんですけど・・・

「（もぞもぞ、ずりづり）はあは・・・寝顔お・・・ガマンし

なことあ・・・（すりすり）・・こんなはずじゃあ・・・

早朝、私の意識はゆっくり覚醒していきます。これはエヴァとの生活の中で身についたもので一年を通して4～5時頃には目が覚めます。すぐに目が覚める訳ではないので、このときの私は大抵無防備です。少しうるさいだけじゃあ全く起きません。そう、例えば殺気や悪意、身の危険等を感じなければ・・・

「・・・はあはあ・・・もうう・・・はあはあ・・・ガマンがあ・・・
ハアハア・・・・デキナイコオ（ジユルリ）」

ゾクッ！

それを感じた瞬間に私は私の上に乗っていたモノを突き飛ばし、ベットから飛び起きてソレから離れます。動悸が治まらず嫌な汗が止まりません。今まで戦ってきた歴戦の剣闘士達全員から殺氣を向かれてもこんなに動搖することは無いと思います。ソレほどにまで恐ろしかったんです。

私に向けられたこの強烈なまでの劣情が・・・

「ハアハアハア・・・・エモノオハアハア・・・・オモチカエリイ・・・
・ハアハア」

私の索敵魔法を難なく潜り抜け、尚且つ気づかれずにマウントポジ

ショーンを取る・・・

こんなことができるのアーティシティません。

本来なら直ぐにでも殴りかかるところですが今のアーティスチは捕食者です。戦いを挑んだら確實に負けます。

そして哀れな獲物は食べられて（性的な意味で）お持ち帰り（神界で監禁生活）されるでしょう。

私は『生きたい』といつも一心で無意識に氣と魔力を融合させ、咸卦法を使用していました！

今まで使う必要も無かつた上に見たこともなかつたのですが、此処に来て生存本能が呼び覚まされたのか、最大出力（無限の魔力と氣）状態で咸卦法を維持しながらヤツと対峙しています。

勝つことは考へていません！今するべきことはヤツの弱点を探しそこを突くことでショック療法的に正氣を取り戻さることです！

「モオガマンデキナナイ〜〜〜！オモチカエリイ〜〜〜！〜〜〜！」

ヤツは既に臨戦態勢をとっている！そして捕食者は襲い掛かつた來た！！！！

ほしょくしゃ（よつじょ）のひづきー

せっしゃくしゃ（くそたこ）せつせぬがれりかどれなこせんのせせわ
でちかづいた。

つかぬせっしゃいぬとかうだれぬひめひにせんせんせつめた。

これなつせりたこせりぬこだーー

つかぬせにさるためにもがいたーだが、よつまづかくへつゝめり
たーー

せっしゃくしゃ（よひじゅ）せよつおひねくへやくせこか、もひる
うふんした。
こきがえくさんあいくなつてくねー
せしむ、かねをじゅじゅにかけたてくねー。

つかぬせかくしゆかくれにせつかりともがいたー
だがにせりれないーー

せっしゃくしゃ（だめがみ）せやひじりへらぶつたー
どくさんかおがちかづこくへるーー

つかぬせらひしゆかがいたーーー

・・・・・ だが

もハ・・・・・ ハア! れない・・・

ほしょくしゃ (こかず) のくちびるとつぱるのくちびるがかさなつ
た! -!

りづるのくちのなかがしめつたなまたたかいものにじゅうつんさ
れる

りづるのくちのまえがまつへりになつた・・・

「ア――――ツ――」

(見せらねによッ! -! -)

りげるはふあーすときすをつばわれた！りげるはせかんじきすもつ
ばわれた！

つかるせよへとおーじせこり（？）したーかみのじゅうしゃになつた！

つ立るはかにやくしゃが一（せんいろ）をてにいた！

こういにより、たましいのかぐがあがり、かみになつた—じんりょくをてにいた！

かみになつたことで、しゅぞくが『にねー』
かした！

じょうじてんかいがたあーていふあくと『じんじきのすず』をてに
いた！（くろねこのとれいんのぐびもとせんしょい）

ぱへで、おーにゆつ、みひじよからじんつよべがわよいわわをいわれ
る」とになつた!

じんりなくひより、まぐわうもひ まじんぐわうもひ こじんかし
た!

ねこかいのたましいやつぞうができるようになった！

ねこたこのせこぶつをしゃべりだれるよいになつた！ねこたこのせこ
ぶつかひかまわれるよいになつた！

「よくかみせじょつかひだつた！――

りぢぬせじょつかひだつた！――

かみはじぶんのじでかしたことときがついた！――

(つ) 「フンッ！・・・・・シクシクシク」

(幼) 「ガーーーン！・・・・・サラサラサラ（砂になつてこく）」

(り) 「シクシクシ・・・・・すうすうすう（泣疲眠）」

(幼) 「チラッチラッ・・・・・ズーーン！（罪悪感）」

(り) 「すうすうすう・・・・」

(幼) 「ズーーーーーーー（血口嫌悪）」

アルスSIDE

やつてしまひましたあ・・・・・襲つてしまひましたあ・・・・・

仕事がやつと片付いてえ、やつと休みが取れてえ、やつつと！彼に会つことができた反動+寝顔のせいなんですう・・・・・

悪いのはわかつてます。でも・・・・・ハウ／＼／＼・・・・・

・ハツ！

彼が寝てから起きて止めるといつまで土下座し続けてえ、彼が起きてからは一万の言葉を使って謝り続けてどうにか許してもらえた。

無理やりはダメですう、神様でも御法度ですう。最上級神から「直ぐに来るよつてーー」とお呼びがかかってます。・・・

減給 + 謹慎は確定ですねえ・・・・・・・

* * * * *

この後、神界で行われた会議で彼女が

「でも、はじめてはわたしがほしかったんですねー。」

といつ発言をしたため、いくら彼女が準最上級神と言えど反省の色が薄く誰もフォローできず

減給、謹慎に加え、100年間の無償神界奉仕（あらゆる雑務を押し付けられる）が決定した。

「なつ何か大切なものが奪われた気がするぞーー！」

「ケケケツ！ナニイツテルンダ御主人？トウトウボケタ力？」

「……………ぐすつ」

第10話 よひじい、なひば・・・なつ何だお前はーこれは私のじいじー がふ

パクティイオーのいい仕方の案が浮かばずにこんなになってしまった……

アーティファクト案を投稿していくださった方々、ありがとうございました。今後の展開も考え、このような形にさせてもらいましたが案の幾つかは少し改造して作中で使用させていただくつもりです。

アンケート報告

ハーレムにします。

ヒロインは

決定

茶々丸、マナ、アスナ、このか、刹那

未定

テオドラ、のどか、千雨

刹那は決定するか迷いましたけど、このちゃんとセットといつて決定しました。

テオドラは微妙なラインです。明日新作を投稿するまでに3票以上入れてくれというメッセージが届いた場合入れます。

第1-1話 ようじー、なりば再会だ（前書き）

前回、流石に初めてを奪われるのは駄目だらうと思つて、セカンドま
でにしました。

そこは駄目ですよね。勢いで書いてしまい後悔氣味・・・
お詫びで今日は2話更新予定！――

皆さんの「」欄に答えてテオ様ヒロイン化しました！――

ヒロインは

エヴァ、茶々丸、マナ、アスナ、このか、刹那、テオドラ、千雨
の中からになります。この作品の方向性によつて出す出さないと変
わるかもしれませんのが最大限努力したいです！――

第11話 ようじい、なれば再会だ

リゲルSIDE

先日、大切なものを奪われたりゲルです。寝起きを襲撃され、全く抵抗もできずに一方的に蹂躪されて心に大きな傷ができました。

でも、貞操は護りきました。（つえ？前回奪われたろって？前書きを読んでください。）

油断してたわけではないんです。確かに強くなってきた実感はありましたので普通の状態ならいい勝負だつたでしょ。

でもあれは格が違うんです。暴走状態は手がつけられないんです。某金ピカ王も真っ青なぐらい力の差を見せ付けられました。

・・・・死んだらアイツの所に行くんですね・・・・絶対に死なないようにしましょう！不死なのでそう簡単には死には・・つて神様になつたんですから余計死ななくなりましたよね。安心ですね。神様相手にしてもいい勝負できますよね！神様になつたから少しは強くなっていますよね？（実際に強化されています。全てにおいて数段階以上）

けつ決して現実から目を逸らしているわけじゃありませんからねっ！あいつならまた来そうなんて思つてませんからねっ！（当分出す予定はありませんがまた出てくるでしょうね？ b y 作者）

何かすごく嫌な予感がします。ヤツとはまた大切なものを賭けて戦うことになりますね・・・・

なので今日からの目標はアイツに襲われても負けないくらいの強さを身に付けることです！光の速度を超えて見せますよ！主に逃げ切るために！！

さて、奪われてしまったのはしょうがないですし、あの後ものっすぐ誤つてもらつた（あれ、なんかデジヤビュ？）から、流石に許さないところちが悪いことしてるみたいになるんです。本当はこっちが100%被害者なのにな！・・・幼女・・・恐ろしい子っ！

そんな私の心の傷を癒すために久々に登場する『なかなか良いたらい（木製+神力で強化済み）』！この中に猫状態（何だか毛並みが大分良くなってる）で入つて、近くの小川をドンブラコと流れています。

なかなか落ち着くんですよ？これ。流れが強くなればなかなか寝寝にはいい感じなんです。このあたりの地理は理解しているので、このまま流れていっても全く問題ありません。薬味（父）もこの川の下流のほうにいるみたいですし・・・・・

くるくる回転しながら流れる『なかなか良いたらい（木製+神力で強化済み）』の縁にあごを乗せて景色を眺めながら川を下つていきます。普通なら田が廻るでしょうけど、そんなこと私には関係ありません。のんびりと目に映るものを眺め続けます。軽く鼻歌も歌つて『機嫌です。

山、川原、川、川原、林、川原、川、川原、山・・・・・・・・・
山、川原、川、川原、エヴァ、林、川原、川、川原、山、川原、川、
川原、エヴァ、林、川原、川、川原、山・・・

んん？見慣れた顔があつたような？

・ 山、川原、川、川原、エヴァ?、林、川原、川、川原、山……

いましたね、しかもこつちすゞく見ていますね。そんなに川を流れていぐ『なかなか良いたらい（木製+神力で強化済み）EN猫』が珍しいのでしょうか？……

珍しいですよね～。そうですね～。といつかあれ、見ていろといふり睨んでもせん？もしかしてバレテマス？

「おい、そこの猫！」

話しかけてきましたよー。さてどうしましょー？なんかこのまま正体言つと殴られる気がするんですよねえ、主に彼女の右手の具合から考えるに。まあ、反応しないと酷そうですからとりあえず鳴いときましょー。

「ミヤア～オ？」

少し首をかしげるのが大事ですね。猫のときは大抵これで乗り切つてきました！駄目なら逃げれば良いだけですしね。

「御主人。ナンデネコナンカニハナシカケテンド?」

「黙れチャチャゼロ。チツただの猫か。まあいい。」

そういうてエヴァは私の上まで飛んできて、『なかなか良いたらい（木製+神力で強化済み）』『ニン猫』を回収して川原に置きました。少しチャチャゼロが空氣みたいですが今は気にしません。

「ふむ、なかなかいい毛並みをしてるな？少し触らせぬ。」

そういうてエヴァは私を抱き上げる。まあ、触らせたら話してくれるだろ？と思つて私は為すがままになっていたのですがこれがいませんでした。エヴァが私を抱き上げた瞬間口を一ヤリと歪ませて、そのまま私を川に放り投げてきたんです！ソレも思いつきり！全く警戒もしてなかつたのでそのまま私は川の中へ

「ミギヤアアア～～～！！！」

いきなりの事で上下がわからなくなつた私は少し溺れてしまい、急いで人型に戻ります。服は常時展開型のアーティファクトである『金色の鈴』に記憶してあるものを魔神具としてそのまま身体の表面に作り出します。

「やまあみろリゲル！いきなり出て行った上に長年私を放置した罰だーまだこの程度では許さんがなー！」

川は人型になれば浅いので、私は落ち着いて上半身を起こします。

「そのことは謝りますが、気づいていない振りをして川に投げ込むなんてひどくないですか？！」

「お前のほうがよっぽど酷いだろうがーーきなり一人になつてしかも最低な置き土産置いてつたくせに良くそんなことが言えるなあ？」

「それは『メンナサイ。でもちゃんとメッセージは残しましたし、その中でも十分誠意を込めて謝罪したつもりなのですが・・・』その程度のことです！――」ツ――」

「その程度のことで許せるはずが無いだらうーお前がいなくなつてからの600年間私がどんな思いで生きてきたと思つてるんだーさつ寂しくて仕方なかつたんだぞー／＼／＼

泣きそうになりながら必死に怒鳴つてくるエヴァを見ます。この顔で言われた時はいつも私の負けです。心の底ではエヴァを甘やかしてゐるんです。しうがないんです、家族なんですから。血の繋がつていらない家族ですからまた別の言い方になるのかもしませんがね。

「いいカリゲル！今後は600年分私の言つこと聞けよ！まだ貰つ

てない」）褒美もあるんだからなー！／＼／＼

「はいはい、判りましたよお姫様。何なじと」命令を。」

少しエヴァをからかう様にワザと畏まつた言い方をして、片膝を付いてエヴァの手を取つて手の甲に軽くキスをしてみます。エヴァの顔が赤くなつたから少しは効果があつたのでしょう。

「ええい、茶化すな！お前は私を甘えさせてくれれば良いんだ！それ以外のことはするなー！」

「畏まりました。お姫様。では、いらっしゃぐ。」

そういうつて即座に魔神具で『ログハウス』を造り、エヴァと一緒に入つていつた。その日はこの600年の月日を埋めるように彼女の話を聞きながら甘えさせ続けました。勿論、エヴァの座る場所は私の膝の上でしたよ？

第1-1話 よりしき、なれば再会だ（後書き）

もつとエヴァを『トレさせたい！――！

いいでしょうか？

砂糖と蜂蜜ふつ掛けまくりますよ？いい人は返事ください！

感想待つてます！

第1-2話 ようじい、なりゅ「お前らー俺の仲間になれー(ー)」

サブタイトル「・・・シクシク

作「元気出せよ、こんなこと気にすんなよ」

サブ「ガキにも、幼女にも邪魔されるなんて・・・俺、この仕事向いてないのかな?」

作「そんなことねえよ!俺がこの仕事をせられるのはサブさんしかいねえよ!」

サブ「・・・作者! (ブワツ!)」

作者「サブさん! (抱きつ!)」

何やってんだる?!

前話訂正

エギル リギル リゲル

・・・・ミスは一回で直さないといけないよね!まさかの主人公の名前ミス。これご指摘、ありがとうございました。そして、ゴメンナサイ

第12話 ようじい、ならひ「お前らー俺の仲間になれー」(1) ···

エヴァンジロINSIDE

突然だが、今の私はとつても幸せだ。本当に突然だったが、言ったくて仕方なかつたんだ！

600年ぶりにリゲルと再開して、まあその時いろいろやつたがその後は···その···あれば···堪能した···

チャチャゼロの機能を一時停止して「ヒデエゾ御主人。」···
ゴホン、ちょっと寝てもらつてから思いつつつきり！甘えた！
リゲルの膝の上に座つて、頭を撫でてもらいながら頭を彼の胸に擦り付けながら600年間何をしてたかを話した。できるだけ長い間こうしてたかつたからチョット付け加えたところもあつたがな！／＼

その後はお風呂に入つて（一緒に入ろうと言つたら却下された···
・何故だ！！いいじゃないか別に！埋め合わせぐらいしてくれても！はつ！これをご褒美にすれば「エヴァ？どうかしましたか？」···
・いや、なんでもない。（まだその時じゃないんだ）」

声に出てたか、まあ全部聞き取れていなかつただろうから大丈夫だろう。

で、一緒にに入れなかつたがお風呂に入つてご飯を食べて（久しづりのリゲルのご飯は絶品だつた！）、一緒にベットで寝た！
もちろん正面から抱きついた状態でだつ！！後ろからも捨てがたい

がやはり顔が見える正面の方が断然いいと思んだ、確かに後ろからはいい！どれだけ匂いを嗅いでもばれないし、背中だからこそ好い所はたくさんある。

だがしかし！正面からのほう

「エヴァ、さつきから変ですよ？小声でぶつぶつ言つてますし？」
・・・いやなんでもないんだ、ただ幸せをかみ締めてただけだから
気にするな！//／

「？・・セウですか？よく判りませんけどエヴァが幸せならいいです。（二口ッ）」

ボタボタボタッ（鼻から溢れ出す紅い愛情）

「エヴァ、鼻血が出てますよ！最近疲れてたんじゃ ありませんか？私が対魔法使い用の魔法を使つてたせいですかね？」

隣で歩いているリゲルが私の鼻にハンカチを当てながら心配してくれる。一人旅の時には無かつたことだから新鮮だ。・・・それに嬉しいし・・・

「少し疲れているみたいですし、二口で少し休んでいきましょう。（二口ッ）」

そう言いながら私を（お姫様抱っこで）抱きかかえてくる。

・・・・・まあそのなんだ、あれだな、長い間会えなかつた反動（？）見たいな奴だな、その内慣れるだろう。お姫様抱っこされるのは久しぶりだな・・・・・

ボタボタボタボタボタボタッ！！（先ほどより大量に溢れ出す紅い愛情）

愛情

「エヴァ！大丈夫ですか！エヴァ！エヴァ！エヴァ！」
「これは仕方ないと思うんだ……」

つ！－これが私の進むべき未来・・・！

・・・・・これなら・・・・・ウへへく・・・・・そんなことまで／＼／＼・
・・ハツ！

ゴホンッ！

どうにか落ち着いた私は、リゲル（黒猫ＶＥＲ）を抱きしめながら川下へと進んでいる。

・・・・何故リゲルが猫になつてゐるのかつて?そんなことは簡単だ

もうすごいんだぞ！つやつやで、ふわふわで、もふもふで、ふかふかで、ふにふにで、可愛いんだ！この魔性の魅力にやられてしまつた私は、600年ぶりの『ご褒美』として「好きなときに猫状態になつても、りづ権利」を貰いソレを実行した！

はあはあはあ・・・・ふう

昔考えていた『アーティスト』とは違つけど、今はこれでいいと思つたん

だ。リゲルと一緒にこなしができ、それだけで今は十分だと思つたんだ。

だから、IJの『IJ優美』は今度に取つておひつと想つんだ。

そして私は彼の毛並みに顔を埋めてもふもふしながら川原を下流に向かつて行く。さつと今の私の顔は今まで生きてきた中で一番の笑顔なんだと思ひ。

その頃のとある猫のTODE

「ふにゃあ～～～！／＼（ア）はいめえ～～～！／＼」

残念つ……

第1-2話 みうじい、なりぢ「お前らー俺の仲間になれー」(1)・・・・・

今回はエヴァオンラインでした。

だ、だつて砂糖マシマシで頼むつて要望があつたんだもん！
後悔はしない！！

感想待つてます！

こつして欲しいつて言ひ意見もあればドンダソビビツギー。

総合PV 150,694アクセス
総合ユニーク 21,586人
皆さんありがとうございますー！！

第1-3話 めいこ、ながな「お前りー俺の仲間になれー」(2) (前編)

作「今日はしつかり連携取れたな。」

ナギ「前回は悪かったな、サブさん。」

サブ「気にすんな、若い時にほんがらこの元気がなきゃこけねえよ」

ナギ「サブさん・・・あんたいい奴だなー俺のなかで『いや、止めときな』何でだよー!」

サブ「俺はお前らみたく若くねえのぞ、こんなににかまつてねえでもっと人を笑顔にさせることをしな」

ナギ&作「『サブさん・・・』」

サブ「じゃあな坊主ども、立派になんな。あばよ・・・」

ナギ&作「『サブさん――ん――!』」

またまた向をやつてんだろ?・トウカサブセマジダントイ

第1-3話 より少し、なりば「お前りー俺の仲間になれー」(2)

リゲルSHIDE

ここにちは、リゲルです。今私達の田の前には今回の旅の目的である薬味（父）がいます。ついでに若き田の巫女好き剣士もいますね。

「お前強いな！俺の仲間になれ！」

皆ささいきなり過ぎて意味がわからぬと思いますから、とりあえ
ず回想です・・・

数時間前

「やつらの姿はなんだつたんだ？」

私は今エヴァの腕の中にいます。何故こうなったのかといつと

とエヴァに聞かれて、ついとつた

「私の正体は猫の神様なんですよ～」

と本当にことを教えてしまったからです。その後はいろいろ追求されました。もちろん最初は黙秘しようとしましたよ・・・でもエヴァが・・・

「・・・おしえてくれないのか？／＼（涙目 + 上田遣い + ほんのり頬が赤い）」

と聞いてきて無意識に身体が反応してしまったようで、気づいたときには全てを話して後でエヴァの頭を撫でていました。

全てと言つても『転生したことや、神様と知り合いなことや、ある程度未来がわかることや（流石にそのときの私も此処がファンタジーの世界に良く似た世界とは言わなかつたようです。）、私のこと（能力のことも含む）』などを話していました。

全てとは言わなくても大体のことは話してしまつますね・・・まあ良いんですけどね、エヴァになら話してもいいかな？と思つてましたし。

そんな感じでそのまま質問され続けていたのですが、エヴァが急に

「ナハニエゼバ、『ノーベル賞』まだ貰つてなかつたよな？」

と言つてきたので

「ナハニですね。今回は何がいいですか？お詫びも含めて多少無理な
ことでもいいですよ？」

私がそう言つたら、エヴァは壁をながら悩み始めました。

「（昔は『リゲルに気持ちを伝えてその答えを貰う』つもりだった
けど、今考えるとこれは違うんじゃないのか？こんな願いで本当に良
かったのか？…………違つた。こんな強制することなんて
私はしたくないつ一なら何にする…………つー…これだつー…）

「

エヴァが勢い良く顔を上げたので「決まりましたか？」と問つと、
エヴァは頷きました。なので

「何がいいですか？」

ともつ一度聞きなおすと

「『私の好きなときに猫の姿になつてもうりつて、好きなこととしていい権利』が欲しいいつ！」

その結果今は・・・・・・・・・・
すゞくモフられてます。抱きつかれて、頬擦りされて、体中撫でられて・・・・これは気持ちいいかも・・・ふにやあ・・・・ふにや？（あれ？）・・・・うにやにやつー？（そこはつー！）・・・・ふにやああ～～～！／＼（そこはにやめえ～～～！／＼）

猫状態のリゲルは尻尾が弱点です。エヴァにいきなり尻尾を思いつきり弄られて腰碎け状態になつてピクピクしています。

エヴァの畠の前で猫の状態になつたことはこれまでなかつたので、こんなにエヴァが猫が好きだつたなんて思つていませんでした。（エヴァはけつして猫が大好きという訳じゃありません。猫の状態のリゲルが好きなのです。 b y 作者）

まさかいきなり尻尾を触つてくるなんて・・・・今度からはあまり触らせないようにしましよう・・・・・
その前に身体を洗いたいですね。

エヴァは腰碎け状態のリゲルを見て溢れ出す紅い愛情が噴出して

しました

仕方なくエヴァと川で身体を洗い流していると、

「GYRAAAAAAA...」
A...!...!

空から轟音と巨大な翼を羽ばたかせる様な音が聞こえました。嫌な予感を感じながら上を向くと案の定巨大な黒竜が空高くからこちらに向かってきます。血の匂いを嗅ぎ付けて襲ってきたようですね。あんな声を出したら、辺りにいる魔法使い達が集まつてしまいますね。これ以上声を出されて『正義の魔法使い』が集まつてきたらとても面倒ですからさっさと片付けたいところです。

ちょうどいいですから、エヴァの成長を見せてもらいましょう。

「エヴァ、あれ倒してください。できるだけ早くですよ？あれからどれほど強くなつたか見せてください。」

エヴァはにやりと口を歪めて

「今日の食事は期待してるからな？」

そう言つて虚空瞬動を使い、黒竜に向かつて行きました。

「これが私の修行の成果だ！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック

『契約に従い、我に従え、氷の女王。来れ、といしのやみ、え
いえんのひょうが』

おお、氷属性の高等呪文ですか！威力も昔とは比べ物にならないく
らい上がっていますね？一瞬で黒竜が氷付けになりました。上出来
ですね？今日はエヴァの好きなモノをたくさん作りましょう。

「これで終わりだ！」全ての命ある者に等しき死を。其は、安らぎ
也。おわるせかい』

凍り付けにされた黒竜は跡形もなく粉碎されました。弟子の予想以
上の成長を見れてとても嬉しいですね。思いつきり褒めてあげよう
と思つてエヴァに近づきます。

その時！

「お前強いな！俺の仲間になれ！」

と言つわけですね。

ナギ・・・・このタイミングで現れますか・・・流石は薬味（父）ですね。薬味のあの性格はやはり遺伝だったのですね？納得しました。彼の後ろにいる巫女好き剣士は此方を鋭い目付きで睨んできます。流石は最強の剣士ですね。魔の気配はわかりますか。まあ私は魔ではなく神ですけどね？

「ナギ、待つてください。彼女たちは人ではありません。」

「何言つてんだ詠春？猫が人なわけないだろ？が。」

「違いますよナギ。その少女もその猫も魂の格、生物としての格が人より高いのですよ。巧妙に隠されていますが、魔を滅する神明流剣士である私の目は誤魔化せません。」

予想以上に巫女好き剣士は鋭いようですね。少し評価を上方修正しちゃましょっ。

「いいじゃねえか、旅の仲間はたくさんいた方が楽しいだろ？で、どうなんだ？仲間にならねえか？それと俺と勝負しろ！」

「にゃにゃああ～～？（エヴァ、何だか面白そうですから仲間になつてもいいですか？彼らとの旅は退屈しませんよ？）」

「（勝負するかは別として、リゲルがそういうのなら別に私は構わんが？）

「（なら、決定ですね。）いいでしょ、少年。私の名前はリゲル・マクダウェルです。此方の可愛らしい少女はエヴァンジエルン・A・K・マクダウェルとします。私たちは人ではありませんし賞金もかかっていますが、それでもいいならあなたの方と一緒に旅をしてもいいです。」

ナギは「オッシャー！仲間ゲットだ！」と喜んでいますが、巫女好き剣士は可哀想な位顔が青くなっています。私たちは有名ですからどこかで聞いたことがあるのでしょうか？

さあ、この後どうなりますかね？

第13話 よりしい、なりば「お前らー俺の仲間になれー」(2) 「(後書き)

ナギと詠春に出会った！

さあ、やつたと大戦突入したいです。

ヒロインのアーティファクト（エヴァ、マナ、このか、茶々丸、アスナ、刹那、テオドラ、千鶴の8人）募集中です！

読んでくださった皆さんありがとうございました！

第1-4話 ゆりこ、なりがん闘争になつてやめ（記録）

今日から、毎日投稿は一時中断するかも。
ネタをしつかり練つて2日～3日ペースで上げていける
になるかも。

第14話 めひじい、なりが仲間になつてやれ!

前回の確認

「お前強いな！俺の仲間になれ！」

最悪のタイミングで（エヴァに）現れた薬味（父）と鋭い目付きで此方を睨む巫女好き剣士。

巫女好き剣士はリゲルとエヴァが人ではないことを指摘するもの

「何言つてんだ詠春？猫が人なわけないだろ？が。」

とナギに言われたことにより少し傷つく。だがめげずに一人が異常だと言つことを訴えるが

「いいじゃねえか、旅の仲間はたくさんいた方が楽しいだろ？で、どうなんだ？仲間にならねえか？それと俺と勝負しろ！」

と囁つ一言で流されてしまつ。

一方、一人は『何だか面白そうだから』と言つリゲルの言葉により、共に旅することを了承し、彼らに自分達の素性を明かす。

「いいでしょ、少年。私の名前はリゲル・マクダウェルです。此方の可愛らしい少女はエヴァンジエル・A・K・マクダウェルとおっしゃいます。私たちは人ではありませんし賞金もかかっていますが、それでもいいならあなたの方と一緒に旅をしてもいいです。」

ナギは「オッシャー！仲間ゲットだ！」と喜んでいるものの、巫女好き剣士は可哀想な位顔が青くなっている。

この後どうなる？

「オッシャー！仲間ゲットだ！」

ナギが能天気に叫んでいますが、そんなことは気にしていられません。ナギに考え直すように言つこともできません。

私達の目の前にいるのは

『ダーク・クレイマー黒の抹殺者』、『死を運ぶ黒猫』、『ヘルキャット無音の掃除屋』の異名を持つ500万ドルの賞金首リゲル

『ダーク・エヴァンジェル闇の福音』、『ドーリー・マスター人形使い』、『マガ・ノスフェラトゥ不死の魔法使い』、『あじきおとずれ悪しき音信』、『かいんのしと禍音の使徒』、『わらべすがたのやみのまおう童姿の闇の魔王』と呼ばれ、魔法世界で「なまげのような扱い」を受けている600万ドルの賞金首エヴァン・ジェリン・A・K・マクダウェル

リゲルは昔、とある国の魔法庫に侵入しありとあらゆる魔法書（禁書を含む）を『無断で』読破した為、その時の王の反感を買い、侵入されたことは公表されなかつたものの（沽券に関わるため）多額の賞金をかけられた。（たどりもうその時の王は亡くなつた為、何故こんなに賞金が高いのかは國の上層部と本人ぐらいしか知らない。）そして、賞金目当てに向かつて来る魔法使いを撃退してたらいつの間にかこんな額になつていた。

今の私たちでは敵うわけがない様な化け物です。ある程度の実力を持つものならば、その姿を見ただけでそのことがわかるでしょう。（ナギは敵意がない事と悪い奴ではない事を直感で見抜いています）

その化け物が何故か一人で行動していることも驚きですが、「リゲル」と言つ名前しか知られていなかつた賞金首の名にエヴァンジェリンと同じ「マクダウェル」が入つていることは只ならぬ関係と言

い」とです。この事はこの業界に激震を巻くのでしょうか。

そんな化け物達がナギの一方的な提案に対しても『旅に同行しても良い』と言っているのですから何か裏があるのかと疑うのは当たり前です。

そんなことをしても彼女達にメリットがないことも、その気ならば既に私たちは死んでいるところがわかつても警戒しないわけにはいきません。

もしもの時に、少しでも私たちが生き残る可能性を高めるために・・

ですが、それが杞憂だったのだと語るのにまだ時間はかかりませんでした。

「俺はナギ・スプリングフィールドだーこれからよろしくなー。」

「ええ、よろしくお願ひしますね？それで、そちらの方のお名前は何といつのですか？」

「つーーあ、青山詠春と申します、リゲル殿、エヴァンジエリン殿。

」

「フンッ！そんなに畏まれたら堅苦しいわー！そりだよな、リゲル。」

・・・・・・・何故エヴァンジエリン殿はリゲル殿をなで続けてい
るのでしょ？（詠春警戒度 70%）

「その通りですよ、詠春さん。それまで堅苦しい呼び方をしないで
ください。」

「しかたねえんだよ、前から直せつつても全然直さないんだよな。
堅苦しくてこっちが嫌になるぜ。」

「全くだ。こんな口調の奴と喋つても面白くないな。」

「それは大変ですねえ。私もこんな口調ですけど、嫌なら直しましょつか？」

「いや、別に直さなくてもいいんじゃねえか？リゲルは何故か堅苦しい感じはしねえからな。」

「リゲルとアイツでは比べる価値もないぞ？」

「そうですか、それならこのまま喋らせてもらいますね？あと、エヴァは言こすぎですよ。」

・・・・・・・・・本当に、これがあの有名な賞金首達なのでしょうか？・・・・・リゲル殿は出会つて間もないにも関わらずナギと親しげに話しますし、エヴァンジエリン殿はエヴァンジエリン殿で先ほどと変わらずリゲル殿を撫で続けてますね。そしてリゲル殿はそれを気にすることなくナギと話し続けています。（詠春警戒度 20%）

「言こすぎだと？そんなことある筈がないだろ？あんな奴をリゲルと比べる事自体がおかしいんだ。見ろこの艶々の毛並みを！素晴らしい触り心地な上に、なんだか好い香りがするんだぞ！（エヴァの錯覚です）見ろこの丸い瞳を！キラキラ・・・・・・・・・・・・

・・・・・・田の前にいるのは600万ドルの賞金首ではありません。ただの彼氏自慢している彼女です。そしてその彼氏は彼女の

腕の中でされるがままになります・・・・彼氏と言つても今はどう見ても猫ですが・・・・といひで彼らはカップルなんでしょうか？

ですがそんな風には見えませんね。エヴァンジエリン殿の片思いといひでありますか？（詠春警戒度0%）

私はエヴァンジエリン殿の彼氏（？）血櫻を聞き流しながら『これは警戒する必要がないな』と悟りました。・・・・といひで何故か私の悪口ばかり言われてませんか？

「聞いてるのか！」「ハイツ！－！」なら良い、でだな、リゲルの良い所はまだいっぱいあってな、その中でも一番なのは抱き心地でな、これは・・・・・・・・・・・・

エヴァの『リゲルの良い所』の話はリゲルが止めるまで続いた・・・・
この時詠春は『紅き翼^{アラルブリ}で一番気苦労が絶えない男』としての第一歩を踏み出したのだった。

第1-4話 ようじい、なりば仲間になつてやれり（後書き）

ヒロインのアーティファクト募集集中です！！！！

エヴァ、マナ、このか、茶々丸、アスナ、刹那、テオドラ、千雨の
8人です。

特にエヴァとアスナをお願いします！

第15話 ようしい、既に保護済みだ（前書き）

今日は長いです。
駄文ですがどうぞ。

ヒロインのアーティファクト募集集中です！！！！
エヴァ、マナ、このか、茶々丸、アスナ、刹那、テオドラ、千雨の
8人です。

特にエヴァとアスナをお願いします！

第15話 ようじい、既に保護済みだ

リゲル SIDE

ナギたちと出会ってから、7年経ちました。最近戦争が始まると噂になっています。

今は、皆で鍋料理を食べています。

思い返せばこの7年・・・色々なことがありました。

『紅き翼』^{アラルブル}として活動を始めたり、ナギがいつの間にかいなくなっていて、帰ってきたと思ったら「新しい仲間見つけたぜ！！」と言つて、傍らにはロリコン^{アルビレオ・イマ}が二口二口しながらエヴァを見つめていたり、詠春の愚痴（ナギに対する）を聞いたり、エヴァに撫でられたり、エヴァを撫で返したり、またナギがいなくなつたと思ったたら「魔法の師匠見つけたぜ！！」と言って、傍らにはフイリウス・ゼクトがいたり、エヴァが「イジられたのが悔しい！」と涙目で頼んできたのでロリコンをボコボコにしたり、エヴァに抱きつかれたり、それを見たロリコンにエヴァがからかわれたり、今度はエヴァがボコボコにしたり、ナギがいつの間にか魔法使いと戦っているのを止めたり（武力で）していました。

一番印象に残っているのはアスナちゃんと出会ったことですね。彼女は今、私の造った魔神具の中で生活しています。私が生み出し

た猫たち（超魔スペック）と一緒にです……問題になつてい理由は能力まで一緒に偽物を身代わりにしているからです……

アスナちゃんと初めて出会つたのは、『紅き翼』としてオステイアの紛争に介入・援護していた時でした……

「せ 精靈砲全弾消失！」

「消失！？王都の魔法障壁ではないのか！？まさか……！」

「広域魔力減衰現象を確認！減衰速度増加中……間違いありません！」『黄昏の姫御子』です！！

「くつ、遅かったか。」

「ちッ……気に入らねえぜ！」

「全くです。」

この時は、エヴァは違う地域での活動をしていたので（直前まで「リゲルと一緒にいい！…」と言われて他のメンバーから生温かい視線が向けられました…）私、ナギ、詠春、アル（この頃はまだゼクトはありませんでした）の4人で紛争地帯に乗り込んで行きました。

「『たそがれのひめみこ黄昏の姫御子』…………何だつてそんなもん…？」

「歴史と伝統だけが売りの小国に他に手はないでしょう。」

「だが王族だらうー？まだ小さな女の子だつて話も聞くぜ。」

「冷静になりなさい、ナギ。熱くなるだけじゃ人は救えませんよ。」

「だけどヨリゲル……」

「戦争ですかうね（だからな）」

「向こうの眞の目的もおそれく…それに少女の年齢も私同様見
た目どおりとは…・・・・・」

(アルは外見上は20代に見えますが、見た目よりもの年齢ではあります)
りません)

「くそつー。」

「見えてきましたよ、ナギ・・・つー。」

〔防御結界・・・うわあーー〕

ドンッー！

「大丈夫でしたか？」

「そんなガキまでかつぎ出すこたねえ。後は俺たちに任せときな。」

「お・・お前たちは・・・『^{アラルブツ}紅き翼』・・・『黒の・・・^{アラルブツ}千の呪文の・・・』

「そう！ナギスプリングフィールド！そしてリゲル・マクダウエル！またの名をサウザンドマスターとブラックレイザー！！！」

「自分で言つたよ」「イツ・・・・」

「私のことまで紹介してくれましたか？」苦勞様です、ナギ。」

「フフフ・・ノリノリですね。」

ズンツ・・ズズン・・

ザツ（詠春）

ス・・・（アル）

フウ・・・（リゲル）

「えーと・・・『一百重千重と重なりて走れよ稻妻（ヘカトンタナ
キス・カイキーリアス・アストラブサトー）・・・』行くぜオラア
ツ！！『千の雷！！！！』」

「『極大・雷光剣』！！！」

「これが私の全力全壊ですッ！（本当は一割と出してませんが）
スター イトツツツ！・・ブレイカ――――――――――――――！」

「・・・・・フフフフ（ボキュ　ドキュ　バキュ　ズキュ　ガキュ
ゴキュウ）」

「安心しな俺たちが全て終わらせてやる」

〔な・・・・しかし・・・〕

「私たちなら大丈夫だ。『自称最強の魔法使い』もいことだしな。

」

「あんちゅ！」見ながら呪文唱えていますけどね。」

「あーあーるせーよ。だから魔法学校中退だつて言つてんだり？」

「そこまでにしてくださいよ？彼女が見ています・・・こんなのはお嬢さん？お名前を伺つてもよろしいですか？」

無感情な瞳でこちらを見ている彼女に胸が痛みます・・・

「ナ・・マヒ・・・・・？」

その片言な喋り方で話す彼女の瞳を見ながら彼女の口元の血をハンカチで拭います。そして私は決めました・・・・彼女を救おうと・・

「アスナ・・・アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア。」

「アスナちゃんですか？いい名前ですね。・・・・・魔神具発動・・『猫は全てを停止させる』（ボソッ）」

チリンツ

私の首元の常時展開型アーティファクト『金色の鈴』が鳴ります・・

・

そして、セカイは色を失い、全てが停止します。

ここで魔神具の説明をしましょう。魔神具とは、魔力と氣と共に神力を使用することでその能力をセカイに干渉できるほどに強化したものです。

今回の『猫は全てを停止させる』^{クロノス}は形を固定させなくても『金色の鈴』を媒介にすることにより即時発動が可能です。そしてこれはセカイの時間を止める魔神具です。私と私が触れたもの以外の時間は全て止まります。ただし、長時間の発動はできません。30分ほどが限界です。

「少し失礼しますよ？・・・魔神具発動『99%』」

そして私は魔神具『99%』をアスナちゃんに使用します。これは魂以外の全てを完全に本人と同じ魔神人形を作成する魔神具です。とはいっても魂は入つてませんし、今までの行動パターンを記憶から読み込んで本人がするであろう行動を予測し、実行するだけです。しかもこれは私とリンクしているので今人形がどう過ごしているのかわかりますし、任意で破壊することができます。これで『完全なテレケイア世界』にさらわれても大丈夫です。

「これでいいですね。あとは・・・魔神具発動『全て猫だらけの理』
ヤバロソ
想郷』」

まさかここでこれが役に立つと思ってませんでした。この魔神具は任意の異空間を創造する能力で、この中には私が魂から生み出した猫たち（廃スペック+耳と尻尾が付くが人にもなれる）が300人ほど暮らしている。中には東京一つ分の自然豊かな空間が広がっています。

でも、何故か女の人（全員美女（美猫？））しか生み出せません？多分またアソツの所為でしょう・・・

中から出てきた猫たちに、「この子を預かってくれ、すぐに会いに行く。」と伝えて、猫たちにアスナちゃんを預けて空間を閉じ、『クロノス 猫は全てを停止させる』の発動を停止させる。

少し誘拐っぽい気もしますが、気にしません。オステイアにいる方がよほど犯罪っぽいですからね。

これが終わったら、予定がいっぱいですね。エヴァを慰めたり、アスナちゃんに説明したり、アスナちゃんの心を取り戻したりと本当にいっぱいです。・・・

まあ、私は後悔しないようにするだけですけどね？

こうして私はアスナちゃんと出会いました。戦闘後、直ぐに『全て猫だらけの理想郷^(ニヤバロン)』に行き、まず謝罪から入り今の状況の説明、何故私がこうしたか、ここが嫌ならば直ぐに元の場所に戻ることを説明しました。

ですが、やはり今のアスナちゃんでは正常な判断ができませんし、意味もわからなかつたようなので（当たり前ですよね）時間を遡れることを説明して（年は取らないようにクスリ漬けだったようなので大丈夫ですね・・・・大丈夫じゃありませんし余計あそこに返したくなくなりましたが）その日は分身体をおいて帰りました。

こうして数年が過ぎアスナちゃんも心を少しずつ取り戻していく、
大分自分の意見を話せるようになりました。そして自分の意思で「
アソコには戻りたくない」と言つてくれました。

ですが同時に問題も発生しました。1つ目がエヴァにバレた事です。

何故エヴァにバレたのかといつと・・・・・

「・・・おいリゲル・・・何だか最近お前から同じ女の匂いがするんだが・・・ドウコウコトカオシエテクレナイカ?」

時間があるときは分身体と交代してたりしていたので、人よりの鋭いエヴァにはバレてしましました。・・・・・あの時はとても怖かつたです・・・・・

正座をさせられながら本当のことを話し、実際に『全て猫だらけの
ニヤバロン
理想郷』に連れて行き、アスナちゃんにも会つてもらいました。

そこでも一つ目の問題です。最近のアスナちゃんは私によく抱きついできます。よく手をつないだり、私の上に座つたりもします。・・・・・お分かりの通り、エヴァと行動パターンが同じなのです。

そういうことなので必然的に場所の取り合いが始まるわけです。流石に子供なのでエヴァは魔法を使いませんから（使っても無効化でしょうし）、肉弾戦になるわけです。といっても顔の抓り合いな

ですが・・・

これにより二人の相手をより一層することになり、とても大変なのです・・・・・フウ・・・・

アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア SIDE

ワタシハ、アタリヲミマワス・・・・・サツキマデセンジヨウニイ
タノニイマハチガウバショニイル・・・・・

アタリヲミマワスト、マワリニハジュウジンガイテ、ココノセツメ
イヲシテクレタ・・・・・

ヨクワカラナイケド『リゲル』トイウヒトガワタシヲコロニツレテ
キタラシイ・・・・

アノトキワタシニナマエヲキイタオトコノヒト

ナゼカワカラナイケド、ソノナマエヲオモイウカベルトムネガアタ
タカクナツタキガシタ・・・・・

時は流れん・・・・・・・・

ワタシは少しずつだがココロを取り戻せているラシイ。ラシイとい
うのはリゲルがソウ言つただけで自分テハあまり分からぬカラダ。

最近ワタシは『エヴァ』というオナジくらいのオンナの子とよぐり
ゲルをめぐつて戦つてイル。

ワタシはリゲルといふと何故かムネが温かくナル。ソシテ、エヴァ
がリゲルの近くにイルのを見るとムネがイタクナル・・・・

ドウシステムネがイタイの?つて猫のミンナに聞いても、笑つてばか
りでオシエてくれナイ・・・ミンナ揃つて

「リゲル様とアスナ様のことですから・・・これ以上は言えませ
ん」

と言つていつも笑つてイル・・・・・・・イツカココロを取り戻せ

タラわかるのカナ？

デモこれだけは言エル・・・

エヴァンジエリン SIDE

私は今、とても気分が悪い！！あの小娘のせいだっ！！！あいつのせいで私だけの特権がいくつも奪われた！！

撫でてもらうのも、抱きつくのも、一緒に寝るのも、猫の状態を撫でるのも、匂いを嗅ぐのも・・・全部！！

リゲルから女の匂いがし始めたことに気づいて（リゲルは巧妙に隠していた為、バレるのに時間がかかった）直ぐに追及し、あの小娘と出会った。

あの小娘と目があった瞬間「こいつ（コイツ）は敵だ！！！」と
いう共通認識が出来上がった。

そのあとは簡単だ。会うたびに喧嘩し、目が合えば睨み合い、片方がリゲル抱きつけば妨害し、自分が抱きつく。

だからアイツは、私の敵だ！！絶対に認めんぞ！！そして・・・

「 小娘ヒガサにだけは（ダケは）、負けられん（負けラレナイ）――！」

」

第15話 ようしい、既に保護済みだ（後書き）

アスナフラグが立ちました！！

無理やりな感じもしますから、あとで手を加えるかもしれないです・

・・・

第1-6話 めりこ、なり田舎将軍だ（前書き）

今回より心から少し読みにくくなっています。

お詫びを付けてください。

第16話 ようじい、なりば鍋将軍だ

SIDE

「ターゲット対象はこの3人の男それに……この少年、少女の2人に、猫1匹だ。」

「フン・・・なんだただのガキ2人じゃねえか・・・・・それと、何で猫なんだ？」

「油断していると痛い目を見るぞ。オステイア回復作戦の失敗の主因はこいつらだ。すでに精銳で組織された討伐隊も送ったが悉く返り討ちだよ。君が望むなら部下もつけよう、正規兵ではなく傭兵・賞金稼ぎになってしまふが・・・・・」

「いらぬーよ・・・・・一人で充分だぜ、任せときな・・・・で、何で猫なんだ？」

「それはな・・・・そいつがあの有名な『死を運ぶ黒猫』だからだよ。」

リゲルSHDE

「んつふつふ〜〜、ここが旧世界は日本の鍋料理つて奴かあ。じや、早速肉を〜〜」

「あつナギおまつ・・・何、肉先に入れてるんだよー。」

「トカゲに肉でも皿いのかのう〜。」

「流石にトカゲの肉でも美味しいのかは判りませんね。」

「（ムグムグ）ほらリゲル、肉だぞ。あーんしゅ。」

「あーん（むぐゴックン）。ありがとうエヴァ。でも食べにくいので戻つて『駄目だ。』・・・肉だけじゃなくて野菜も一緒に食べてくださいね。」

「いいじゃねえか、旨いもんから先でよ。ホラホラ（ひょいひょい）

「

「バツバカ！火の通る時間差おいつものがあつてだな、まずは野菜を入れて・・・あーちょつーー！」

「あーうひせーうひせー『ギミー』しゃん！」

「フフ・・・詠春、知つてますよ。日本では貴方のよつた者を『鍋將軍』・・・と呼び置わすそ�ですね。（ズガーンーーー）」

「ナベ・シロー・グンーー（ペシヤーンーーー）」

「つ・・・強セハジやな。」

「わかつたよ・・・詠春、俺の負けだ。今田からお前が『鍋將軍』だ。」

「全て任す。好きにするが良い。」

「んー・・・嬉しくないなー。」

「…………まあ、本当は『鍋奉行』ですけどね？」

「そりいえばリゲルの出身も日本だつたな？」

「そりですよ。とはいっても大分昔の話ですけどね。」

「おおー何じゃこのソース。うまいぞ？」

「ホントだうめえー?」

「これが日本の誇るお醤油ですよ。」

「それに大根おろしですね。」

「これがしょうゆかつー！スゲヨ！うめえーー！」

「ナギ。お前は日本に来た時、寿司食つたろ。」

「姫子ちゃんこも食わしてやったこへりこの皿をだな。」

「姫子ちゃん・・・？ああ、オステイアの姫御子の」といっせな。

「まあ・・・戦が終われば、彼女を自由にできる機会もはあるやも・・・です。」

「まあ、既に私が救い出していて、鍋どひのか寿司もてんぷらも食べたいことがあるんですけどね？」

「私も一緒に食べたぞ？でも私はリゲルと2人きりで食べたかったがな？」

「へーそーなのかー。」

「「「はーあー？」」「

「ど、どつゆうことですか、リゲル！？姫御子が浚われたなんてことは知らないのですが？」

「数年前からあの姫御子は偽者ですよ、アル。会った時にそつくりの神魔人形を置いて、本物は私の造った魔具の中で私の知り合い達と一緒に生活してますよ。完璧に隠蔽してたのですが1年ぐらい前にエヴァにはバレてしましましたけど。あつ一応秘密ですよ？」

「でかしたぞリゲル！でもよくそんなことできたなあ？？？？まあ、リゲルならできるのか？？？」

「いつか大変なことを起こすと思つていましたけど、そんな大事を！」

「別にいいじゃないですか詠春。あちらのいた方が酷いですよ？」

「そういう問題じゃありませんよ！－－一国の姫を誘拐するなんて・・・」

「いいじゃないですか、別に。それに能力まで99%本物そつくりな人形も置いてありますし・・・別に良いですよね？アル？（反対するようなら会わせてあげませんよ？）」

「・・・ふう、仕方ないですね。冷静に考えれば、リゲルの元のほうが比べるまでもなく良いですね。（絶対に会わせてください、約束ですよリゲル。）」

「後は詠春だけですよ・・・ああ偽者の方が心配ですね。大丈夫ですよ？あちらの様子は私も把握しますし、いざとなれば超ド級の爆弾に早や代わりです。」

「ち、ちなみにどれくらいの威力なのじや？」

「そうですね・・・半径500M以内の物体は消滅しますよ？爆風は広がらない代わりに効果圏内の物体は完全破壊です。障壁を張つても、障壁^{ロストメモリー}と破壊するので防御不可能です。」

「そりゃお前がこの中で一番バグだつたな・・・この状態のリゲルに何を言つても無駄だぞ。」

「流石エヴァです、私のことをよくわかつてます。また今度皆で会いに行きましょうか？・・・ですがこのままだと今後に影響が出そうですから・・・皆さん忘れてください」「「「「はつ？」」「「魔神具発動『忘却』」「

「その戦だが……やはりどうにも不自然に思えてならん。」

「何が？」

「……」いる4人の中から（エヴァは今更ですかね）アスナちゃんの話の記憶を消しました。『忘却』^{ロストメモリー}は記憶操作の魔神具で、今回は私の発言から『忘却』^{ロストメモリー}を発動するまでの記憶を消しました。影響が出て取り返しの付かない失敗をする訳にもいきませんし……うつかり今回は喋ってしまいましたけど、今後は自分の発言にも注意しましょう。

「何もかもだよ。お前が言い出したんだらつが、」の鳥頭・・・ッ！（ドガツパシパシパシッ）

突然、大剣が鍋に向かつて飛んできました。詠春以外はそれに反応して飛び散る鍋の具材を空中で取ります。エヴァは自分の分と私の分として大量の肉と野菜を確保しました。そしてまたあーんをしてきます。本当は自分で食べたいんですけどね・・・

そして筋肉ダルマ（ラカン）が姿を現しました。

「何じゃ？あのバカは？」

「帝国のつて訳じやなさそーだな？」

「ヒュア、やりますか？軽い運動には持つて来いですよ？」

「いやいい。今は鍋食べたい・・・ほらリゲル、あーん。」

「あーん（むぐゴックン）。猫だと頬が伸びませんから食べにくいのですが・・・「フ・・・フフフフ・・・」詠春・・・避けられなかつたのですね。」

「フ・・・食べ物を粗末にする者は・・・」

「どーしたー来ねーのかあーー？来ねーならしつちから・・・
「斬る！」いッ（キンッ）・・・おほ？」

「お？詠春の攻撃凌いでるぜ？」

「あの大男やりますよ、見たことがあります。ちよつと南で話題になつた剣闘士ですよ。」

「ホイー丁あがり。」

「ほう、詠春がやられたぞ。」（もぐもぐ）

「エヴァ。野菜も食べてくださいね？」

「んむ、わかつた。ちなみに今回のあーんのお礼は今夜は一緒に寝ることだからな。」

「人に戻させてくれれば・・・一緒に寝ることだからなッ！・・・」
しかたないですね。おや、やはりナギが行きましたか。」

「てめえ、うまいだすなよー！」

* * * * * * * * * 13 時間にもおよぶ戦闘中 * * * * * * * * *

「フ・・・・フフ・・・やるじやねえか小僧（ハアハア）」

「あんたこそな（ハアハア）」

「うん、むう・・・フフフ／＼（スリスリ）」

エヴァは鍋を食べ終えると同時に私を抱いて寝始めました。（防音
結界を張つて、飛んでくる魔法や氣や瓦礫は障壁で弾きました）

「エヴァ、終わつましたよ。起きてください、抱きつかれたままじ
や辛いです・・・仕方ないですね。詠春はナギを頼みます。（パ
ツ）」

私は人型に戻り、エヴァを抱きかかえます。

「ああ、わかつている。」

「リベンジすんぞ！必ず決着・・・つけてやる・・・ぜえつ！」

「おおーーいつでも・・・ここや筋肉ダルマ。戦争やつてるよつ
気が晴れらあな！」

「こんな」と言つてますが両者共にプルプル身体を震わせています。
これが喧嘩するほど仲が良いという奴ですね・・・・

数ヵ月後・・・・

「おうナギ！もう飲めねえのか？ガハハハハ！」

「バカいうんじゃねえ！まだまだいけるぜ！－ハハハハハ！」

何故か知りませんがいつの間にかラカンが仲間になつてました。

この頃戦争は激化の一途を辿っています。

そして帝国によるまさかの大規模転移魔法の実戦投入により連合の首元『グレート＝ブリッジ』がついに陥落しました。

そこでアルギュレーの辺境に追いやられていた我々『紅き翼』は前線復帰を果したのです。

アラルブラ

第16話 よりしい、ならば鍋将軍だ（後書き）

こんな感じでどうでしょ？つか？感想お待ちしています。

ヒロインのアーティファクト募集集中です！！！！

エヴァ、マナ、このか、茶々丸、アスナ、刹那、テオドラ、千雨の
8人です。

特にエヴァとアスナをお願いします！

第17話 ようじい、なまけ屋協力者だ（前書き）

ヒロインのアーティファクト募集中です！！！！

エヴァ、マナ、このか、茶々丸、アスナ、刹那、テオドラ、千雨の
8人です。

今回も前回に続いて会話中心ですから少し読みにくくなっています。

お気を付けください。

第17話 ようじい、なまば協力者だ

リゲルSIDE

我々『紅き翼^{アラルフラ}』は前線に復帰するなり、あらゆる戦場で活躍し、瞬く間に劣勢を覆しました。その中でも最大の激戦となつた『グレートブリッジ奪還作戦』での活躍は後世に語り継がれるほどのものでした。

この決戦により戦況は逆転し、敵軍を攻め戻し帝国領内に侵攻しました。

この頃から、ナギや他のメンバーのファンクラブもでき始めました。ただ、私のファンクラブだけは異質です。魔法世界の猫族の大半が加入しており出会つたびに崇められます。まあ、猫の神様みたいなものですから理解はできますが、納得はできません。もはや宗教のようになつてしまつたファンクラブって何ですか？ファンクラブの名前は『黒猫^{ブラックキャット}』と言います……このクラブの創始者はエヴァアでした……会員ナンバー0番で役職は名誉会長……

「フン！後悔もないし、辞める気もないからなー！」（エヴァ）はファンクラブができたと聞いてそれを即座に潰し、自分が新しい創始者になることで色々とコントロールしてます。）

・・・はあ・・・そんなことより

最近事件が発覚しました。アスナちゃんが『全て猫だらけの理想郷』^{（イヤバロン）}の中で猫達から稽古をつけてもらっていたらしいのです。そして私が気づいた時には、既に『咸卦法』を使いながらの模擬戦に入っていました。何故発覚したのかと言つと

「 ～～～ ～～～～」

「おや、ミナ（猫の名前）何か良い事でもありましたか？」

「あつ御主人！いや～最近アスニーヤ様がどんどん強くなつてきて、その成長が嬉しいんですニーヤ。」

「よくわかりませんが、アスナちゃんの成長は嬉しい限りですね。で、何が強くなつたのですか？」

「勿論戦闘ですニーヤ！最近では『咸卦法』も自在に使いこニーヤせるよう二ニヤつてきて・・・ウニーヤ？このこと御主人には秘密だつたかニーヤ？」

「ほう・・・私に知らせもせず勝手に戦闘訓練ですか・・・ちやんと言いましたよねえ？勝手に変な事教えないように、もし何かするならそれにちゃんと報告するようにと・・・」

「そ、ソニー！ヤ！」と叫びてたか一「ヤア?????（汗）」

「今すぐ全員此処に集めなさい、説教してあげます！！今日は寝かせませんから覚悟しなさい！！！！後で罰も考へないといけませんね？」

あの猫達は無駄に廃スペックですし、妙なところで張り切つてしま
う癖がありましたから今回もまた無駄な連帯感を發揮して私にばバ
れない様にしながら修行してたようです・・・しかも1年以上前
から・・・・

あの子達は単独で準最強クラスのスペックはありますからね・・・
・全員で協力して本気で隠蔽してきたのでしょうか・・・

勿論お仕置きとしてマタタビ一週間禁止の刑を言い渡し問答無用で全てのマタタビを回収しました。

「そんにや殺生にや！」とか「アスニヤ様が自分から教えて欲しい
つて言つたんですニヤ！」とか「皆で相談して御主人を驚かせたか
つただけなんだニヤ～～！」とか言つていましたが今回は許しませ
ん。駄目なものは駄目としつかり教えておかないとけませんから
ね。

その後、実力行使に出た猫達を（流石に一週間マタタビ抜きは耐えられないみたいで）全て沈黙させた後（後書き参照）、アスナちゃんにも話を聞きに行きました。アスナちゃんいわく

「ワタシ、エヴァに負けたくナイから。」

「リゲルより強くナツテ、護つてあげル。」

だ、そうです。初めて自分から「やりたい」と言つてくれたことですから、保護者の立場から言つと最後の歯嬉しかったですし、勿論やらせてあげたいです。

ですが・・・・・でも・・・・・いやしかし・・・・やはり・・・・

いろいろ考えた結果、今後は私立会いの下訓練すると云つことと、他にやりたいことがあつたら直ぐに相談する事になりました。

そんなこんなで色々ありましたがその後はガトウさんとタカミチ君「ガズモエンテレケイ」と出会つたり、戦争の黒幕である「完全なる世界」の存在が発覚したりしました。

そして今は、ガトウ（呼び捨てで良いと言われました）に呼び出たところです。まあ何故呼び出されたのか知っていますけどね。

「何だよガトウ、わざわざ本国首都まで呼び出してさ。」

「会つて欲しい人がいる。協力者だ。」

「協力者？」

「そうだ。」

「あなたは・・・マクギル元老院議員！」

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ、ウェスペルタティア王国・・・アリカ王女」

「・・・・・」

「ん（ナギの奴見とれてんな）・・・おう姫様。俺は『千の刃の男』こと、ジャック・ラカンだ。」

「気安く話しかけるな下衆が！」

「お初にお目にかかります、王女様。私は『紅き翼』の一員、リゲル・マクダウェルと申します。此方にいるのは弟子のエヴァンジエル・A・K・マクダウェルです。私には性がなかったのですが、弟子であるエヴァンジエルの性を貰い、マクダウェルと名乗らせていただいております。」協力感謝します。」

「うむ、よろしく頼む。…………」1つ訊ねるが、本当にお主は人なのじやな？今は何処からどう見ても猫にしか見えぬが。」

「では、後ほどお見せしますね。」

「うむ、頼む。では…………」

*****数時間後*****

「ワハハハハ！上手いことやつやがってこのガキヤー！」

「ああ！？何の話だ！？」

「とほけんじやねーよー。お姫様トイチャイチャキヤイキヤイおしゃべりしてたうーがつー。」

「してねつつの！何がイチヤイチヤだ！そんなんことならリゲルも姫さんと喋ってたじやねーか！」

「私のあれはナギのとは大分意味合いが違いますからね？」

「なーに言つてんだよ俺なんか・・・」「気安く話しかけるな下衆が
!」だぜ~~~~~?ありやイイ女だぜ。一本芯の通つたな?」

「そうですね。田から強い意志を感じられましたからね。」

「ほへ、リゲルはああゆうのが好みなのか？（だそつだぞ？アスナ）

L

「（ワかつた。今後ノ方針はコレで行こウ）」

（最初は喧嘩ばかりだったが、最大の敵はリゲル自身であることに気が付いた二人は、協力体制を取るようになつていていた。）

「（ゾクツ！何故か寒気が？）それはまた別ですよ。」

「お前ら大丈夫か？俺ああんなおつかねえ女見たコトねえぞ。」

「その内分かりますよ？」

「リゲルの言う通りだな。グハハハハハハ！」

「何だよー意味わかんねえよ。」

「（仲いーな b y詠春）」

そして、アリカ殿下の協力も得た我々は「完全なる世界」^{ワズモエントレケイア}の正体を探り始めるのでした。

数日後・・・

「「気安く声をかけるな（ナ）、下衆が（ガ）」」

二人の少女に暴言を吐かれてうな垂れている黒猫がいましたとさ。

第17話 よひじこ、なむむ協力者だ（後書き）

（猫達の反逆）

「諸君 私はマタタビが好きにゃ 諸君 私はマタタビが大好きにゃ
猫じやらしが好きにゃ

刺身が好きにゃ

ササミが好きにゃ

猫缶が好きにゃ

アスナ様が好きにゃ

御主人が好きにゃ

平原で 街道で 割壕で 草原で 凍土で 砂漠で 海上で 空中
で 泥中で 濡原で

この地上でありますとあらゆるマタタビが大好きにゃ

更なるマタタビを望むにゃ？ 最高のマタタビ酒を望むにゃ？

怠惰の限りを極めし猫の本能がみやみやにマタタビを望むにゃ？

『——ヤ——！ —ヤ——！ —ヤ——！

よひじこ じひま反逆にゃ

我々は渾身の力をこめて今みやとに振り降りせんとするネコジャラ
シにゃ

だがこの暗い闇の底で半世紀みよの間堪え続けてきた我々にただの
マタタビではもはや足りにゃい——

マタタビ酒を——！ 勝つて最高のマタタビを手に入れるの——！

『——ヤ——！ —ヤ——！ —ヤ——！

「…………（ペハペハペハシ一）」

「三四九〇六 - 三四九〇六 ~~~~~ - - - 」

一
フ
ヤ
シ
ス
ル
!..!

「勝手にアスナちゃんに色々教えた罰です。フハハハハ~~~~~」

『新編 金瓶梅』卷之三

数分後、寝そべってピクピクしている猫達が大量に発見された。

第1-8話 ようじい、なりまあえて黙じ黙り（前書き）

ヒロインのアーティファクト募集中です！！！！

エヴァ、マナ、このか、茶々丸、アスナ、刹那、テオドラ、千雨の
8人です。

今回も前回、前々回に続いて会話中心ですから少し読みにくくなつ
ています。

お気を付けください。

感想に対する対処の仕方がわかりません。返事をした方がいいので
しょうか？

よくわからないので此処でお礼を・・・

感想をくれた方、ありがとうございます。それを励みに毎日投稿を
続けることができています。今後ともこの作品をお願いします。

第18話 ようじい、なりばあえて罠に嵌り

前回、アリカ殿下の協力を得て、『紅き翼』は『完全なる世界』の正体を探り始めた。

その頃のリゲルは・・・

「一人の中での私は下衆げすだつたんですね・・・〇」

予想以上に「氣安く声をかけるな（ナ）、下衆が（ガ）」の一言が効いたため寝込んでしまっていた。

そして一人の少女は自分達の間違いに気づき反省した後、嬉々としてリゲルの看病に当たつた。その見返りとして後日一人に『ご褒美』をあげることになったリゲルは、本人は気づいていないが傍から見ればとても不憫である。

そしてリゲルは数日間全く使い物にならなかつた為、リゲル達（エヴァ）とバカ2人を除いた5人で『完全なる世界』の調査を始めた。

ウェスペルタティア王国の王女アリカ・アナルキア・エンテオフュ
シアじや。

数日前、此度の戦の黒幕である「完全なる世界」について調べる
為に『紅き翼』^{アラルフラ}に協力することになったのじやが、その関係上今は
『紅き翼』^{アラルフラ}の者達と行動を共にしておる。

行動を共にしておると言つたが今は実際に何か協力できるわけでも
ないのじやから、なぜか気になるあの者と買い物にと思つたのじや
が・・・・。

「買い物に付き合え？何で俺がッ！」

バチーン

しかしあヤツはせっかく誘つてやつたところにあらうことか断わ
りおつた！！

つい頭にきた私は、魔力を込めた右手で思いつきビンタしてやつ
たのじや！

「5分じゃ、それまでに準備しておくれのじやだ。」

* * * * *

そして今はナギと一緒に買い物をしておる。

「何せなんじや?」

「ひねーむ。」

「あいか・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・

「あればなんじや?」

「知るか。」

バチー——ン —!

別にこの程度のこと國務である『古狸共とのと驕し合い』と比べれば何という事は無いといつに、なぜかナギにこの様な態度を取られると頭にくるのじゃ……自分でも訳がわからぬ！？

トクン

この時すでに気づいておったのかもしだぬ。

だが、私の名はアリカ・アナルキア・エンテオフュシア

それ故にこの気持ちを無意識に心の奥底に閉じ込めたのかもしだぬ
な・・・・・・

本人以外には隠しきれてはおらなかつたと思うがの

リゲルSHIDE

やつと立ち直ることができた私は、今滞在している拠点のリビングに向かっています。なにやら遠くから詠春の怒鳴り声が聞こえるので、またナギがやらかしたのでしょうか。

「どうしたんだ、リゲル？（ナガナガ）」

「いえ、詠春の怒鳴り声が聞こえたのでまたナギがラカンが何かやらかしたんでしょう。」

「あいつはよく懲りずにああも問題を起こしせるものだな？（スリスリ）」

おや、アリカ様がタカミチ君に話しかけてますね。それにゼクトも一緒にですか？珍しいですね、どうかしたのでしょうか？

「ヤーの少年。」

「ひゃ、ひゃい！！」

「ナギに昨日は楽しかつたと礼を伝えてくれぬか?」(一ノ口芝)

二〇一〇年

ほつ、いい笑顔ですね。いつもは無表情ですから普段とのギャップで威力は倍増です。この笑顔にナギもやられたのでしょうか？

「ムウ・・・（リゲルの奴、あんな小娘に見惚れよつて！－あんなよりも私の方が・・・・・ブツブツ・・・）」

ワシャワシャワシャ！－！－！（無意識に力が増していく－－－）

「おや、ヒヅア殿ではないか。リゲル殿がぐつたりしておるがよいのか？（何度見てもリゲル殿の毛並みは素晴らしいのう。いつか触らせてもらひえぬじやろつか？）」

「大丈夫だ、問題ない。（コイツツ・・・もしやリゲルのことを！

！……いや、無いな。それにここはもう売約済みだから。」

グテ~~~~ン（頭+足+尻尾に力がはいつておらず、エヴァに抱かれたままピクリともしないリゲル）

「やうは見えぬがのう（リゲル殿……不憫じやな）」

なんだかんだで最近エヴァ（達）に色々やられて全く役に立つていなリゲルだった。

* * * * *

そして、アリカ様は自分にできることをするために帝国へ向かつた
(後書き参照)

その頃
・
・
・
・
・

〔あの執政官がテロに關心!/? 確かなんだね・・・・・・・・〕

「八、確かな証拠が・・・・・・・・」

〔よべやつた……………では今夜にでも〕

「了解しました。」

その日の夜・・・ナギ、ラカン、ガトウ、私の四人でマクギル元老院議員に会いに行つた。そして、本当の黒幕の1人が姿を現した。

「マクギル元老院議員。」

「『苦労、証拠品は『ちよつと待てください』……なんだね、リ
ゲル君。」

「いえ、ただ偽者には早々に退場してもいるつと思いましてね？」

魔神具顯現『ハーディス』リロード！　『超電磁砲』『レールガン』

ズガガガガガガガ――ン！

「「な・・・・」」

「ちよ―――――つ！？ つげるおまつ・・・何やつてんだよ――も
しかして、マクギル元老院議員死んでんじゃねえか――？」

「ナギ・・・・ 気づいてますよね？」

「 もうひるんだ――お前ら・・おっさんをよく見てみな。」

「何つ・・・・」

「・・・・・よくわかったね。流石は『黒の抹殺者』ダークバイレイザだね。でもこ
んなに簡単に見破られるなんてね・・・・もつ少し研究が必要なよ
うだね。」

「その様子だと、マクギル元老院議員は既に・・・」

「」想像通り、既にメガロ湾のそばだよ。」

「てめえつーーー。」

ナギが飛び出して行きますが、両側から二つの気配が来ていています。

「通しませんよ。」

「へりへ」

「ーーー？」

ナギを挟むようにして二人の男が現れます。ですがつー

「もう止むませんよ。」

「ドンッ！ーーー！」

「あとはあなた一人ですよ、創物主の玩具？」

アーウェンブルックス

ナギに襲い掛かつていた二人を無力化し、改めて彼を睨みます。

「ふつ、もしかしたら知られているかも知れないと思つていたけどまさかそこまで知つていてるなんてね・・・・・お前、どこまで知つていい?」

「本当にいいと思つてますか?」

「いや、まあいいよ…………わ、わしだ！マクギル元老院議員だ・・・・・うむ、反逆者だッ！ああ、うむ、確かだ。奴らに暗殺されかけたつ・・・・・は、早く救援を頼むッ。スプリングフィールド、ラカン、マクダウェル、ヴォンデンバーグ。奴らは帝国のスパイだった！奴らの仲間もだ！軍に連絡を・・・・・」

「げ！」

「やられたな。」

「では退散と行きましょう。魔神具発動『転送鏡』…………それで

はまた会こまじょひ?』

「……本当にキミは何処まで知ってるんだい?『黒の抹殺者』ダークレイヤー……」

連合からも追われる身となつたのでとつあえず安全であるオリン
ポス山の隠れ家に転移しました。

「ふう、世せん無事ですか?……ちゃんとタカミチ君たちも拾え
ましたね?やつたこと無かつたので心配でした。それで……」

「……話、聞かせてもらおうか(くれねえか)(じやねえか)?」

「

「まあ、いいなつますよね~。」

こうして私は自分の秘密の一部を仲間に明かすのでした。

第18話 よりしー、なりまあべて黙じ黙り（後書き）

魔神具説明

ハーディス……そのまんまアレです。とは言つても色々と魔改造されてます。

転送鏡……予め登録した場所に登録してある人物を転送させる魔神具

とある王女様の苛立ち

「あの証拠があれば、戦を終わらせられるのじやな？」

「ま、多分な。」

「では、主に任す。」

「あなたもよくやるぜ。戦火の中になんかボロ舟で帝国第三皇女と接

触しいじつってんだからな。』

「なんじゃ、心配しておるのか？（トクン／＼／＼）』

「へ？ 心配？ 何の？」

ブチィ！！

バチバチーーーン　！！！！！！

そうして王女様は舟に乗つて去つていきました。

「フン、私がいれば問題ないわ！ハーハッハッハ！！』

一人の少女と共に

第19話 より少し、なりばん説明しよう（前書き）

総合 PV307・019アクセス・・・・監さんありがとうございます！
30万アクセス記念に何かしようかな？

感想ですが、これからは更新が遅れない程度に返信します。

アーティファクト募集中です。

エヴァ、マナ、このか、茶々丸、アスナ、刹那、テオドラ、千雨
お願いします。

あと、イヴを出してはどうつか？と言つ感想をくれた方（ありがとうございます！）がいたのですが、チャチャゼロを改造してどうできなか考えております。

どうでしょ？皆さんの意見が欲しいです。

第19話 よりしい、なりば説明しよ!

リゲルが本国首都を脱出する直前・・・

Hヴァンジエリン SIDE

「ちつ！数が多く過ぎる…！」

私はリゲルに頼まれて小娘（私から見れば大抵はガキか小娘だが）の護衛とすることで帝国第三皇女との接触に同行していた。どうにか接触に成功し、情報交換等を済ませこれから本格的に会談を始めようとしたとき

キィイイン

「つーーーこの魔力は・・・・・転移魔法だと！小娘共！直ぐに逃げる準備をしろーー！」

周囲に幾つモノ転移魔方陣が広がり、それと同時に複数の悪魔が召

喚されるのを感じる・・・事態は最悪だつ！

非公式な接触であるために碌な戦力になる者は少ない上に何処からか情報が漏れていたためであらうか相手は数百を超えるほどの十分な戦力を準備してきている。

私一人ならば逃げることも容易い・・・・だが小娘一人を護りながらとなると話は変わる。

一人がどれだけ大きな力を持つていようと、護る人がいる状態ではその力は十分に生かすことは不可能、それに加えて相手はその一人を数に物を言わせて躊躇しようとしてくる。

「クッ！（遠すぎてリゲルとも連絡はつかんつ・・・魔法を使おうにも手数が多くすぎて護りながらでは手が出せん・・・手詰まりか・・・）・・・せめて小娘共だけでも！」

護りながらの戦いに慣れていないエヴァはどうにか一人を逃がそうとするが

〔準備完了しました！〕

「チャンスは一度きりだ！外すんじゃないぞ！・・・総員・・・撃て――！」

襲撃者達の大魔法が完成し、絶体絶命の事態に陥つてしまつ。

「なんじゃあれはつ！」

「これはつ・・もう駄目かの・・・」

「対軍勢用魔法『千の雷』の複数同時攻撃だつ！ 小娘共！ そこを動くなよ！ ！ 『氷櫃』×50！ ！」

私は小娘共に覆いかぶさりながら、自分が扱える魔法中で最速で展開が可能な防御魔法『氷櫃』^{レフレクシオン}を50重に重ね掛けした。

一枚ずつ割れていくと共にその威力は確かに落ちている・・・が
幾重にも重なつて襲い掛かつてくる雷を止めることはかなわず、
最後の一枚が破られた。

その全ての雷を受けたエヴァンジエリンは傷だらけになりながらも一人の少女を護りきつた・・・だが真祖の身体を持つてしてもその身に受けたダメージは大きく、彼女達は連合に拘束されてしまった。

リゲルSHIDE

「　「　「話、聞かせてもらおうか（くれねえか）（じゃねえか）？」」

「

「まあ、いらっしゃりますよね～。」

私たちはオリンポス山の掘つ立て小屋に転移したのですが、すぐさまナギたちに尋問されています。それにゼクトやアルも加わって（タカミチ君は少し離れた場所にいます）体感圧力が倍になりました。

「リゲル、あいつらは何モンなんだ？んで『創物主の玩具』^{アーチェンルクス}で言うのはなんなんだ？」

「そうですね・・・ならば話しましょつか。まずアルの『イノチノシヘン』が私に効かないのは私の名前が特別だからです。」

「それはとても興味深いことですが、質問の答えではないですよ?」

「まあ最後まで聞いてください。正直に言いますと、私、神様と知り合にな上に私自身も神みたいなものなんですよ？」

「「「「は？」」」

「私の名前は神様の贈り物ですから色々と『抵抗^{レジスト}』しちゃうみたいなんですよ。私が猫になれるのも、さっき武器も、転移したのも神である私の能力です。あとなな私が此処にいるのは少し気に入らないことをしようとしている奴がいたのでサクッとヤつてしまおうと思つたからなんですよ。その標的が『完全なる世界^{コスモコンタレケイア}』です。だからその情報を持つてもおかしくないでしょ？？今まで言わなかつたのはあまり手を出しすぎると歴史に干渉し過ぎるかもと思つていたからですが、ここまでやっても問題ないようですからもういいですね。あ、あとこのこと工ヴァは既に知つてますよ。何か質問はありますか？」

すこし嘘を加えながら、私のことを話します。そして彼らの反応は私の予想通りだつたようすで

「「「「ポカーン」」」

全員が突然のことに対する反応し切れていません。コレが本当の狙いで、深く聞かれてボロを出す前回の話をして終わらせようと畳み掛けます。

「無いよ!ですからコレでこの話は終わりです。今後質問は受け付けまじ!」ちょっとまた!「ナギ、何か質問ですか?でもコレで最後ですから慎重に質問内容を考えてくださいね?」

もう少しだったんだですが・・・

「あいつらの・・・『完全なる世界』^{ワズモエンテレケイア}の本当の目的は何だ?」

コレなら答えられますね。もっと無茶なことを聞かれたらいとヒヤヒヤしました。

「魔法世界の救済です・・・ただし、とても愚かな方法での救済ですけどね。これ以上は言いません。今一番やるべきことを見失つてしまいそうですからね。でも、コレだけはいえます。彼らのやり方は間違っている。」

「そりが・・・ならこの話はここまでだ!それだけわかれば十分だ!』『完全なる世界』^{ワズモエンテレケイア}は俺達がぶつ潰す!・・・俺は難しいことはわからんねえし、お前が神様みたいなモンだとしても態度を変えつもりなんか全くねえ、俺は俺の好きなようにするし、あいつ等をこの手でぶん殴る!いいよナリゲル!!--

「はい、勿論です。じゃあまずはこれから的事ですが、アリカ様と

エヴァと帝国の第三皇女様は捕らえられてしまつたようです。エヴァは何らかの方法で封印されているようですから今は動けません。ですから私たちで迎えにいってあげましょう。」

「よしつ！ 行くぞ野郎共！ ……仲間を助けに行くぞ！ ……」

真つ先に駆け出すナギでしたがアルの

「ナギはアリカ様のいる場所はわかつてゐんですか？」

と言つ発言によつてひとまらない訳にはいかず、私にアリカ姫の場所を聞いてから

「行くぞ野郎共！ ……仲間を助けに『夜の迷宮』^{ノクティス・ラビリントウス}に突入だ！ ……」

そつこつてまた駆け出していきましたが詠春の

「作戦もなしに突つ込んでいつたらアリカ様たちが危ないだろ！」

と言つ発言によりまたもや止められ、ナギは作戦会議が終わるまで不貞寝していました。

それを見てすこし笑ってしまったのは秘密です。

第19話 よろしい、ならば説明しよう（後書き）

明日、更新休むかも知れません。知人が入院するので……

第20話 めひじこ、なりば救出だ（前書き）

この小説も20話となりました、振り返ればあつとこいつ間でした。ここまで続けられているのは皆さんのおかげです。ありがとうございます。これからもよろしくお願ひします。

今日はリゲルがキレます。少しグロ注意！

今回はアスナは出ません。次回こわは出したい！！

何時にも増して駄文に仕上がってしまいました。『めんなさこ。

第20話 ようじい、なれば救出だ

数日後の『夜の迷宮』にて。・・・
ノクティス・ラビリントウス

「交代の時間だ。何かあつたか？」

「何も問題ありませんでしたよ。後は頼みます。」（チリン）

「・・・ん？あんな奴いた（チリン）・・・あれ？今か聞
こえたよつこ（ザシユ――ゴトン――ブシユ - - - ! ! ! ）・・・

「・・・まずはエヴァを探しましょうか。」

(チリン)

その男が通った道に残っているのは人の形をした膨大な数の肉塊だけだった。

ただ今我々『紅き翼』^{アラルブ}は『夜の迷宮』^{ノクティス・ラビリントウス}に囚われの身となつてゐるアリカ様、帝国第三皇女様、エヴァの三人の救出作戦の実行中です。

「ん、何してんだ？まだ交代の時間じゃないだろ（ザシユ…ゴトン・プシャアアーーー）・・・・・」

今回の作戦は、まず『紅き翼』^{アラルブ}の中で一番隠密活動にむいている私（変装済み）がエヴァの救出に向かい、エヴァの救出後『夜の迷宮』^{ノクティス・ラビリントウス}内部を破壊し始めます。ナギたちは私が侵入してから5分後に混乱に乗じてアリカ様たちの救出に向かい、私たちもきりが良い所で合流し脱出という流れです。

「（エヴァとアリカ姫の救出を）同時にやればいいんじゃないか？」

とラカソに言われましたがコレには理由があります。

私がエヴァに持たせている魔神具の一つによつてエヴァの大まかな現在地と状態を把握することができます。

その情報から考えるにエヴァは瀕死の状態で強力な魔法か何かで拘束されているはずです。

エヴァは真祖の吸血鬼ですから体力や魔力は直ぐに回復するはずなのですが、今のエヴァの状態は『重体』です。真祖だからこそ生きながらえているという危険な状態です。一刻も早く回復を阻害している原因を破壊し、治療する必要があります。

この状況で同時に救出しようとした場合エヴァの命に関わるかも知れない為、同時に救出するのは不可能なのです。

「おいお前！ここから先は吸血鬼が封印されている場所だ！
許可が無ければ入！」「五月蠅いです。死んでください（グサッ！）」
ゴフツ！・・・・き、きそ？・・・（ズボツ！ブシャーーーー！）

〔〕

ここで「エヴァはなぜ重体のままなんだ？普通なら殺されているはずだろ？」と思う方もいると思いますが、真祖の吸血鬼ということを考えれば自ずとわかるはずです。

少し考えればいくらでも利用する手段があるエヴァを『腐った豚共』がそう簡単に殺すはずがありません。

確実に反抗できない状態で何らかの強力な魔法で拘束されているでしょう。そして、もしもの時のために軍を駐留させているようです。今頃上層部の豚共は、エヴァをどう利用するかを考えていることでしょう。

「今迎えにいきます、ヒュア・・・・・

私は自分の感情を抑えながらヒュアの元へ急ぎますが、抑えきれなかつた感情は周りを傷つけていきます。

私の通つた道は全て血まみれです。

私が今まで生きてきた中でこれほど怒りを感じたことはありません。

彼女達を救出したあかつきには・・・・・ヒュアを地図上から消滅してやります。

ここにいる人には確実に死んでもらいます。そして、今回の首犯であらう上層部の豚共は、いつか必ず生きてきたことを後悔させてやりますよ・・・・

「ヒィイー！止めてくれー！命だぞ（ザシューー）・・・
わ・・・・・」

特殊な魔法がかけられている扉を超濃度の魔力と氣と神力を纏わせた手刀でそこにいた衛兵」と切り裂き、消滅させます。その先にはボロボロな状態で魔方陣に囚われて氣絶しているエヴァがいました。

「やつと見つけました。今助けますからね？」

神力を込めた目で魔方陣を睨み粉々に破壊した後、私が使える回復魔法でもっとも強力なものをかけ、ボロボロな服の変わりに様々な防御魔法を組み込んである外套を着せます。

ここまで侵入してから三分です。アリカ様のいる場所も把握しますから直ぐにそちらに向かいます。ナギたちに『来なくていいです。姫様たちは直接そつちに転移させるから離れていてください』と一方的に伝え、念話終えます。

幸い、壁を24・5枚壊したらその先にアリカ様たちはいましたから、何か言われる前に直ぐに転移させることを伝え転移させようとした時、急に奥の壁が破壊され、その先にナギがいました。

「よお来たぜ姫さん。あとリゲル！俺の仕事とつてんじゃねえよ！」

「！」

「遅いぞ我が騎士。リゲル殿が来た後に来るとは何事だ！！一番先に助けに来ぬか、馬鹿者！！」

「なつ！仕方ねえーじゃねえーか！！そういう作戦だつたんだよ！」

「！」

「痴話喧嘩は後にしてください、エヴァが起きてしまいます。皆さ

ん一緒にオリンポス山に転移させますから

「ちよ、痴話喧嘩つてどうゆー」『転移開始』・・・・・

後で色々言われそうですね?言い訳を考えておきましょ。

さて、一人たりとも逃がしませんよ?

数日後、どれだけ呼びかけても応答しない『夜の迷宮』の軍隊の様子を調査するために送られた部隊が発見したのは、あちこちが血に染められた迷宮だった。だが何故か死体は存在せず、おびただしい量の血痕のみが残されていたと言つ。

これは後に『真紅の迷宮事件』^{ブラックディアビリントウス}と名づけられ、その存在は上層部によつてもみ消された。その為この事件はほとんどのものに知られることは無かつた・・・・・

私は皆を転移させた後、天井を突き破り上空へ飛翔し半透明の純粹な神力を両手に収束させ圧縮します。

痛々しいエヴァの傷が田に浮かびます。そのたびに神力の収束圧縮速度は上昇していき、悲鳴のような表現できない音が鳴り始めます。そして私はゆっくりと両手を『夜の迷宮』に向けます。

「『我が手に集え終焉の焰！我が命に応え敵を滅せよ！』其は全てを無に誘う者！全てを殺せ！…」
虚空炎

両掌の神力球は黒く染まり、二つが合わさり『夜の迷宮』に光速で飛んで行き一瞬だけ直径1kmほどに膨らんだ後、揺らめきながら消えていました。

虚空炎
虚空炎は莫大な量の神力を圧縮し、それを高濃度の消滅の概念を付与した黒い焰に変換し球状に圧縮して発射する『広域選別消滅技』です。これは標的に当たると同時に球状に膨らみその内部にいる複数の標的のみを選別し塵一つ残さず消滅させる技です。でも技というのは少しおかしい気がするので今後名前を変えるかもしれません。

『夜の迷宮』の内部にいた人間だけ 虚空炎 によって全て焼く尽くされ、消滅しました。魂ごと消滅させたので輪廻の輪に戻ることも叶いません。

気が狂つての激痛を『え続けるのも良いですけど、そんなことをしても時間の無駄ですし、証拠を残したくは無いですし、早くエヴァの元へ行きたいので一瞬で終わらせることにしました。

エヴァが起きる頃には近くにいてあげましょ。そして

「よく頑張りましたね。」

と言ひながら頭を撫でてあげるのです。そりすればエヴァは笑ってくれますからね。

第20話 よりしき、なりば救出だ（後書き）

ほとんど進んでません……次回こそはしっかりと進めたい……
けど……無理そうです。

とても時間がかかりそうです。

感想に返信しますけど……間違えてませんよね？

あと……評価と感想とレビューが欲しいです。
どうかお願いします！！！本当に励みになりますから！！！

第21話 ようしい、ならば杖と翼を預けよう（前書き）

ふと、はがないを書きたくなりました。
一人才り主入れて幼なじみ設定で・・・
性別は男？にしたいですね・・・
更新が遅くなりそうですからまだ検討中ですけどね・・・
どうでしょうか？

第21話 よひじい、なりば杖と翼を預けよ

? ? ? SHIDE

安心できるにおいがある。

れいつ今までの痛みも無くなつて、暖かい何かに包まれている。

思わずそれにギュッと抱きついて私はいついつつて、また意識を手放した・・・

「ありがとりゲル。大好きだよ。」

リゲルSHIDE

少し遅れて私はオリンポス山の隠れ家に合流しました。

「何やつてたんだ？」

と詠春に聞かれましたが

「証拠隠滅してただけですよ？」

と言つて誤魔化しました。

今は、エヴァを抱きかかえながら田を見ますのを待っています。

「何だ、これが噂の『紅き翼』^{アラカルフリ}の秘密基地か…どんな感じかと思えば…掘つ立て小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に向期待してんだこのジャリはよ。」

「何だ貴様無礼であるつー！」

「へつへん！生憎ヘラスの皇族にゃ貸しはあつても借りはないんでコ「ヤシまでですよっ」ゲツ・リゲルもう来てたのかよー！」

「子供相手に何やつてるんですか？わざわざ面つ争つてになるような事をしなくていいでしょ？またO・H A・N A・S I が必要いや！だいじょうぶだ！次から気いつけるから、なつ？なつ？」

・・次は問答むよつですかからね?」

(リゲルの圧倒的な戦闘能力をフル活用したO・H A・N A・S I
はラカンにも有効でした。)

「さて・・・私は『紅き翼^{アラカルブ}』のリゲル・マクダウェルと申します。
ヘアス帝国の第三皇女様とお見受けしますがお名前を伺っても宜し
いですか? (ニロッ)
」

「おおっ! 御主は私の王子様ではないか! ! ! (// /)」

「ええと・・・何故私が王子様なのか伺つても良いでしょうか、
皇女様?」

「そんな堅苦しいしゃべり方をするでない! ! ! あと私のことはテオ
と呼ぶのじゃ! ! !」

「では、テオ! 「テオじゃ! 」・・・テオ! 「テオと呼ぶのじゃ
! ! ! あと敬語は要らん! 妻も御主のことをリゲルと呼ばせてもらつ
からの! 」・・・わかりましたよ、テオ。で、何故私が王子様
なのですか? 別に王様の息子という訳ではないのですが?」

「一田見たときから御主は妻の王子様じゃ! ! ! (// /)」

「アル……これは……そういうことなのか？」

「フフフ・・・多分その通りですよ、詠春?」

「どうゆーことだ？ 説明しろよ！ アル！」

「それなですね……か、かーぐーとあります、か。」

「オホツ！リゲルの奴モテモテじやねえか！これは面白くなりそつだぜ！」

「タカミチ君、こちに来なさい。（これはタカミチ君の教育に悪いな）」

「（？？）わかりました、師匠。」

「エヴァ殿も大変じやのう。」

「へ、よくわかりませんけど、私はテオの王子様になつた覚えはないのですが？」（コトン）

訳が分からなくて思わず首を傾げてしまいます。

「（～～～～～！／＼＼＼＼） リゲルは妾の王子様なのじゃー誰がなんと言おうがこれは絶対なのじゃー！異論なんてモノは存在しないのじゃ～～～～～！～！」

ピクリッ！

「リゲルが誰の王子様だと――――――」

「おや、田が覚めましたか？身体の具合はどうですか？どこか痛い所はありませんか？」

「ああ、大丈夫だ。心配かけてゴメンなリゲル？（はんっーーーお前なんかとは親密度が違うんだよーーー ドヤツーーー）」

「グヌウーーー（いやつはーーーーーーー敵じゃーーーーーーー）」

* * * * *

その二るとある理想郷にて・・・・・

ピキーンー！

「敵力増えた気がスル！ー！」

「いきなりどうしたんですか、アスニヤ様？」

「何故力わからないケドそう思つたノ。」

「？？？ですか？・・・・・ 続けましょうか、では次に二ンジン
を切りましょう。これは・・・・・・・・・・」

* * * * *

遠くでテオとエヴァが言い争いが次第にヒートアップして、リゲル
がその仲介をしている頃・・・・

「じゃが・・主と主の『紅き翼』^{アラルブ}は無敵なのじゃろ?」

いつの間にか話は進んでいました。

「ならば我等^{われら}が世界を救おう。我が騎士ナギよ、我が盾となり剣と
なれ。」

「・・・・く。やれやれ、相変わらずおつかねえ姫さんだぜ。・・・・
・いいせ、俺の杖と翼。あんたに預けよう。」

その頃リゲルは

「今私はあの有名な光景を見ることができて感激します。」

言い争いを一人を撫でる」とで治め、その様子を見て感激していました。

その後、ナギと痴話喧嘩についてのことで一悶着ありましたが、結果は想像にお任せします。

そして、『紅き翼^{アラルブ}』の反撃が開始しました。

私たちはあらゆる国にいる敵を倒し、徐々に味方を増やしていくました。

ですがそれは『完全なる世界^{ワカルノワタレケイ}』の中の末端に属する者達で本当の敵は創物主です。

そして戦い続けること約半年、ついに奴らの本拠地に追い詰めまし

た。

世界最古の都、王都オステイア【空中王宮最奥部『墓守り人の宮殿】

我々は今までに最後の戦いを始めようとしています。

まあ、既に敵の計画は失敗しているのですけどね？主にアスナちゃん的に・・・

あ、あとどうでも良いですけどゼクトの髪がテオによつて切られました。

私も今度切つてもらいましょうかね？

第21話 よりじい、なりばえと翼を預けよ! (後書き)

はがないの件・・・・・じう思こますか?

by・最近執筆時間が短くなってきてるのが嬉しい作者

第22話 よりしい、なりば・・・・・ 爆破から始まる最終決戦(?)だ!

今回は作者の悪ふざけ分が大量に含まれております。

"JAP承ぐださい。

第22話 よりしき、なりば・・・・・・・・爆破から始まる最終決戦（？）だ！

リゲルSHIDE

「不気味なくらい静かだな、奴ら。」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ。」

「私が思つに」「」は何かの計画のうちだと思いますよ？何かはわかりませんけど・・・」

「ナギ殿！帝国・連合アリアードネー混成部隊、準備完了しました。」

「おう、なら外を抑えてくれ。そつしりや俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ。」

「ハツ。それで、あの・・・ナギ殿とリゲル殿・・・」

「ん？」

「はい、なんですか？」

「ササ、サインをお願いできないしょつか？」

「ああ？ ああ、いいぜそれくらい。」

「別に良いですよ。お名前を伺つても良いですか？」

「セ、セラスです。お一人ともそ、尊敬してました。」

手早くサインを終え、決戦前の最後の話し合いをします。

「連合の正規軍は間に合わん。帝国のエヴァと皇女も同じだりつ。決戦を遅らせることはできないか？」

何故かあの後仲良くなつた一人は、最近一緒に行動しています。今回も護衛としてテオにエヴァが付いて行っています。

例の「」とく最初は喧嘩ばかりだったが、最大の敵はリゲル自身であることに気が付き、協力するようになつていた。テオには既にも

う一人いることは伝えてあるが、それが姫御子アスナだといつことは知らない。

「無理ですね。私たちでやるしか無いでしょ？」

「既にタイムリミットだ。」

「ええ、彼らはもう始めています……『世界を無に帰す儀式』たそがれのひめみを……世界の鍵『黄昏の姫御子』は今彼等の手にあるのです。」

「あの……」

「ああ、（待つてろよ……姫子ちゃん……）よおしつ野郎ども！
行く」「だからちょ——と待つてください——！」「何だよりゲ
ル！ 今から決戦つて時に——！」

「非常に言つにくいんですけど……この決戦……既に私た
ちの勝ちですよ？」

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

「だからですね・・・ナギの姫子ちゃん『黄昏の姫御子』こと
アスナちゃんは既に私が保護しているのであちらのアスナちゃんは
私の造ったダミーで、なおかつ高性能爆弾です。」

「じょ、[冗談ですよね?]リゲル。」

「アル、私の言つことが信じられませんか?・・・仕方ないです,
ならば証拠を見せましょ。』アスナちゃん、少し出てきてください。』(チリン)」

(フオン)

「リゲル、何か用?」

「おや、最近会つていませんでしたけどだいぶ発音が良くなりました。
たね。よく頑張りました。(ナイトナイト)」

「他の」とも頑張ってる。すぐにエヴァを追い越してみせる。「

「焦つて身体を壊さないでくださいね？…………」これが証拠です。

Γ Γ Γ Γ Γ • • • • •

「ではまずは『99%』を爆破しましょう。そうしたらまずは私が
広域殲滅技を使いますから離れていてくださいね？・・・・んん
？皆さんどうかしたんですか？」

「 あ て が 」

「なんですか、言いたい事があるならしつかり言つてくれないと分かりませんよ?」

「あ？・・・・何でしょうか？あ、あ、あ・・・・・ああ、アスナちゃんですか？すごいんですよアスナちゃんは！！前なんて料理を作ってくれたんです！！美味しかったですね・・あのオムライス・・

「　「　「　「ある」に決まつてんだろ——が（でしょ——が）（ゐのじ

や（――――――）「」

「こきなり怒鳴らないでください。アスナちゃんがビックリするでしょう……。さてアスナちゃん、本当はもう少し話していいのですが、ここにいると危ないので家に戻りましょう。今日は行きますから何か料理を作ってくれると嬉しいのですけど……。黙田ですか？（口ухン）」

「大丈夫、頑張つて作るから楽しみにしてて。（――）またね。」

「はい、またねです。」

（フオーン）

「…………では、聞きもしうつか…………」

「…………あたつまえだ（じゅ）…………」

「…………まあまあはあ…………」

「 もういいですね？ それじゃあ始めましょうか？」

その時、『紅き翼』^{アラルフラ}の5人（ナギ、アル、ゼクト、ラカン、ガトウ）はこう思った・・・・・

コレだけ文句を言われ続けるのにまったく堪えてないコイツはこの中で一番のバグだ

と・・・・・

その後決戦は予定より30分ほど遅れて始まりました。結果は既に見えていますが・・・・・

さて、気を取り直して決戦を始めましょう。

「 んならリゲル。任したぜ。」

「分かりました。少し此方から力を送つて爆弾の強化をしてから爆破しますから離れてください。」

「どの位離れねばいいのじゃ？」

「そうですね・・・・」（）から後方へ1kmほど離れないと巻き込まれますね。」

「爆風ぐらこなうひうにかなつから突つ込めばいいじゃねえか？」

「？巻き込まれるのは爆風じゃなくて爆発ですよ？爆風が無い爆弾ですからね、純粹に巻き込まれて大ダメージをくらつてしまいますが？」

「・・・・フウ。私はもう諦めました。」

「おいこりーアルーお前だけ逃げんじゃねえー！」

「？？？よくわかりませんけどあと一分で発動しますよっ早く離れてください。」

＊＊＊＊＊ 1 分後＊＊＊＊＊

宮殿を中心に黒い球体が広がり、外にいた自動人形、召喚魔、召喚師は全滅、内部にいた『完全なる世界』幹部も大ダメージを受けたようです。数人死んでいるようですね。

そして、偽アスナちゃんがいなくなつたことで儀式は失敗したはずです。

これは・・・・・もしかしなくても詰んでますよね。

あれえ？こんなつもりじゃ無かつたんですけど・・・

戦闘せずに制圧しちゃいましたか？

『ははははははは！私を倒すか人間、それもよからうッ－－－！』

・・・・・遠くにラスボスが見えるのは気のせいですか？

『氣のせいなはずです！－－－！』

第22話 よりっこ、なりば・・・・・・・・ 爆破から始める最終決戦(?)だ! -

はい、作者はヤツテシマヤマシタ!!-----

まさかの最終決戦で戦闘描写が無いといつ衝撃の結果!-----.

だつて・・・上の方のめうがスッキリしませんか? いつ仮説的に?

第23話 よりしき、なむか終戦だ（前書き）

イヴの出し方をまだ迷っている今日この頃・・・・エヴァのアーティファクトで・・・・もしくは猫の魂で・・・・ハッ！イヴ猫耳フラグが立った気がする！！

妄想が止まらないwww

そしてエヴァのアーティファクトが決まらない（涙）

第23話 よりしき、なりば終戦だ

前回・・・

『ははははははは！私を倒すか人間、それもよからうつツー……』

先制攻撃のつもりが一撃で相手を敗北させてしまい、目の前（といつても大分離れてますから私ぐらいしか見えていませんが）にボロボロのラスボスが現れました。

安心してくれ。第二形態、第三形態は無い！・・・・はず

リゲルSIDE

「少し様子を見てくるので、合図をするまで待機していくください。

」

「それじゃあ、俺も一緒に待機していくください。・・・・一緒

にい k 「待機していくください。」・・・・・わあつたよ！だけビー
0分で帰つて来いよ！それ以上は待たねえからな！！」

「「」めんなさいね、コレだけは譲れないんですよ。」

「わあつたから、さつさと行つて帰つて来い！」

「じゃあ、行つてきますね？」

「なんかあつたらすぐに行くかんな！－！」

ナギには悪いですけど、ここは私一人でケリをつけさせてもらいま
す。この中でナギを除けば彼女と対等に戦えるのは私しかいません
からね。

数秒後にはラスボスの前についていました。無論他の人はこんなこ
とできませんよ？

「お待たせしました、では、最後の戦いを始めましょう。」

ゴウ！

私は気と魔力を解放し、全力で『咸卦法』を発動します。ですが
今日は神力も混ぜることで効果を増幅しています。

『ほり？・・・（ウオガツ・・・ジジジジジジジジジシ――）』

創物主は強力な攻撃を放ってきます。満身創痍なはずなのにここま
でできるとは思いませんでした。

「軽すぎますね。」

究極技法を完全に使いこなし、更に神力で効果を増幅している私の敵ではありません。

素の状態でも傷ひとつ付かない自信がありますけどね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ピキーーン（某作品の傷ひとつ付かない人が乗り移る！）

ん？「ならばなんでそんなことをしたのか？」だと……その答えは簡単だ！

『何故なら、その方がカッコイイから……（キラーン……）』

・・・・・ハツ！どこのブラボーな戦士長の魂^{キャラブテン}が乗り移っていた
よつです。

* * * * *

話がだいぶ逸れましたね。一応戦闘中なんですけどね？

さて、タイムリミット時間制限は残り5分。

今頃私の魔力に反応したナギ達が此方に向かってきているでしょうから、彼らが到着するまで・・・・・それまでに決着をつけます。

ゴッガガガガガガアー！！

『ははははははは・・・・・そうか、お前も私と同じ存在か！だが、ゆめゆめ忘れるな！全てを満たす解はない、いずれ彼等にも絶望の帳が下りる。貴様も例外ではない！！』

ボツ・・・・ドガガガガガホ――――――！

「私はあなたと同じではありません！！それに今は全てを満たす解がなくともこれから創れば良いだけです！絶望なんてものは私がこの手でぶん殴つてやります！！！」

『くつぐく・・・・だが貴様もいづれ私の語る「永遠」こそが「全て」の「魂」を救い得る唯一の次善解だと知るだろ。』

キュンツズガー――ン――！

「私がいなければそうなつていたかも知れませんね・・・・でも今ここに私は存在しています！！この世界が幻想であるうとも、いつか崩壊するものであるうとも、今は無理でもいつか救つて見せます！！未来を諦めている者に民を幸福に導く権利などありません！！！出直してきなさい！！！』神具 最高神の魔槍ケンケートル』――！

ボツ・・・・ズガガガガガガガ――ン――！――！

『フツハハハハハハ・・・そこまで知つてまだそんな戯言を・・・
だが既に・・・私はいつか・・・・・・』

そう言つて創物主は消えていきました・・・

完全に消えたわけでは無さそうですが、一先ずコレでオステイアの
崩落をとm「ズツ・・・・」

「何故・・・・止まつてないのですかっ！！」

何故かはわかりませんが既に広域魔力衰退現象が発生しています！
それも世界呑み込むほどの規模です！既に『99%（ダミー）』を
破壊したので儀式は失敗したと思っていたのですが、甘かったよう
です！！

「オノン」「オノン」「オノン

連合、帝国、オステイアの艦隊が遠くに見えます。既に大規模反転
封印術式を展開しているようです。
ですがコレでは出力が足りません！！

「（ギリッ！）魔力、気、神力開放。収束、術式作成・・・・・
完成。」

ならば足りない部分は私が補うまでです！！

「なんなんだこれは・・・・・」

「オイオイ何だよこの光球は！？ドンドンでかくなってるぞーー！」

「世界の始まりと終わりの魔法・・・・・この力場が全地上を覆つた時世界は無に帰します。・・・いくら我々が最強を誇るうど、ナギが自らを無敵と嘘うそこいつと、こうなつてしまつては我々にできることは何も・・・・・っ！」

「おいリゲル……どうなつてんだよーーー！」

ナギ達が到着しました。ですが今は・・・

「少し黙つていてください！アリカ様が大規模反転封印術式の展開を命じました。今からその足りない部分を私が補います！でなければ世界が崩壊することになりますよ！」

「な・・待つてください」リゲルはそんなことまでできるのですか
「？」

「いいから黙つててください！！失敗するわけにはいかないんです
！！・・・・『私は祈りをささげる、其は隠された太陽。我が祈
りに応え冥界の門を開き、顯現せよ！』 秘^{アメン}されし太陽神」

『墓守り人の宮殿』の後方の空間にビビが入り、そこからナニカ（・・）によって抉じ開けられます。

!

その見えないナーフは反転封印術式を包み込み、一瞬の後に空間のビビゴと霧のように消えていきました。

そうしてそこに残っていたのは見えないナーラに補強された大規模
反転封印術式でした。

コレにより広域魔力減衰現象を押さえ込むコトに成功し魔法世界の
消滅は回避されました。

こうして決戦は終局を向かえ、世界は救われたのです。
オステイアの崩落という代償によつて・・・

第23話 よりしき、なりば終戦だ（後書き）

そう簡単に作者はオステイアの民を殺したりしませんよ？

作者は原作を完璧に崩壊させない程度にハッピーエンドを用意します！！

少しストックできただけ・・・見たい？

あと、アリカ様がヒロイン化できるんだけれど・・・したい？

第24話 よりしい、今度こそ決戦だ（前書き）

先に皆さんに書いておかなれば成らない」とあります。

先に謝つておきます。

本つひつひに申し訳ありません！！！！！！！！！！

意味がわからないと思いますが、読んでいただければわかると思います。

本当に申し訳ありませんでした。

第24話 よりしき、今度こそ決戦だ

『……さて……お……』

誰かが呼んでいる気がします。

『起きた……がないと……ス……ぞ……』

『エ……それ……!! わた……キス……』

『黙……私……先に……スするんだ……!!』

『抜……駆けは許……い……』

枕元が騒がしいようで、徐々に意識がはつきりしてきます。それと同時に今言い争っているのが誰であるのかも分かりました。

「・・・・おはよつゝぞこます、エヴァ、アスナちゃん。起じて
くれるのせいですけど喧嘩しながらは止めて欲しいです。」

「ムツ、悪かつたな。／＼（お前のせいで失敗したではないか！
ー。）」

「いめんなさい。／＼（エヴァが抜け駆けしようとしてせこ）」

「今度から気をつけでもらえればそれでいいですよ。それに起こして
てくれてありがとうございます。今日は大事な日ですから遅れるわ
けには行かないんです。」

「やうだな、では私はテオの元へ行かないといかんから先に行く。
そつちは任せせるべ？（しょうがない。今度からは平等に行こう。）」

「こつてらつしゃい。（わかつた。でも一番は譲らない。）」

「ええ、『完全なるセカイ（コズモエンタレケイア）』の好きにほ
れませんよ。」

「じゃあ、行って来る。（フンッ小娘）（ときどき負かせよ。）

そう言つてヒヅアは転移札でテオの元に転移していきました。

「リゲルも頑張ってね。」

「勿論です、アスナちゃん。これが終わったら三人で美味しいものでも食べましょう。今日の『ご飯は腕によりをかけて作りますね。』

「楽しみにしてる。行ってらっしゃい。」

「はい、行つてきます。」

そつとつて私は『全て猫だらけの理想郷（ヤバロ）』を出ます。さて、コレからが本番です。

そつとして私は最終決戦地である世界最古の都、王都オステイア空中王宮最奥部『墓守り人の宮殿』に向かつたのでした。

・・・・え？「もう既に終わつたじゃないか？」ですか？

いえ、そんなこと無いです。多分それは私の見ていた夢のことでしょう。今は最終決戦の朝ですよ？

け、決して作者が『このままだとやべえええ！！！』なんて焦つてこんなことした訳ではないですよ？（詳しくは活動報告「コレを見ている方へ」を御覧ください）

時系列的には「第21話よろしい、ならば杖と翼を預けよつ」の後です。

「さて、行きますか・・・」

そして我々『紅き翼』アラルブラの大戦最後の戦いが始まったのです。

そして・・・

第22話のごとく爆破したところまではだいたい同じです。（違
うのはアスナが今日料理を作らないという点）

宮殿を中心に黒い球体が広がり、中にいた『完全なるセカイ（コズモエンテレケイア）』の幹部たち、外にいた自動人形、召喚魔、召喚師を呑み込もうとしました。

しかし、その球体を覆うように何者かが強力な魔方陣を展開し、それを抑えきつたのです。

「夢のようこはございませんか・・・流石は創物主ですね。」

本当は夢のようになつてくれればと思つていましたけど、やつはくはなかつたようですね？

ですが偽アスナちゃんがいなくなつたことで儀式は失敗したはずです。

「ナギ！ 偽アスナちゃんはいなくなつたので（夢のようないかなけれども）儀式は失敗したはずです！ 外の敵は私がどうにかしますから

突入してください！――

「ああ、んじゃ野郎ども――行くぜつ――！」

「――ウオオオオオオオオ――」

そういうてナギ達は『墓守り人の宮殿』へ突っ込んでいました。
そして私は外にいる敵を倒し始めました・・・・・・

予想以上にうじやうじやと幾らでも増えていくので手間取りました
がようやくナギ達に追いつくことができました。

「――いかんツ『クラディステー・アイギス
最強防護』――」

ドッ――！

クッ！少し遅かつたようです。

「ぐつ・・・バカな・・・」

「まさか・・・アレは・・・」

フツ

「待て! リラでめえーーー!」

「任せなジャック。」

「い・・・いけません! ナギ! その身体では。」

「私は誰さんに忘れられているのでしょうか? .. . 頑張つて追いついてきたのに悲しいです。『治療』」

もう魔力や気が残っている人は少ないですから私が『治療』を使います。

「『治療』を使つたといえどもにか戦えそなのはナギとゼクトだけですね。流石に今はラカンなくなつた腕の再生もできませんし、詠春とアルはもともと負つた傷が深すぎますから戦闘では足手まいになりますかねません。」

「リゲルは『治療』が得意ですがそんな無茶な治療ではツー!」

「ナギは言つても聞かないですし、ゼクトも「ジヤ」と書ひ時は頑固ですかうらね。」

「そのとうつじやな。」

「流石リゲル、わかつてんじやねえか！それに俺は無敵の千の呪文サウザンドバイドスターの男だぜ？俺は勝つ！！任せとけ！！！」

「では行つてきます。」

「たとえ！明日世界が滅ぶと知ろうとも！…あきらめねえのが人間つてモンだらうがッ！」

「くづくづ・・・貴様もいづれ私の語る「永遠」こそが「全て」の「魂」を救い得る唯一の次善解だと知るだらう。」

「人間をなめんじやねえええ――ッ――！」

「ドンッ！――！」

とまあこんな風にナギが創物主を倒してしまいました・・・
私は少し別のことをしながらでしたから、そこまで役には経つてしま
せんよ？

こうして大戦は終わりを迎えました。

・・・・・しかし残念ながらオステイア崩落は避けられず、
夢の通りになってしましました。

第24話 よりしき、今度こそ決戦だ（後書き）

・・・・・「ムシかなかつたんです。

活動報告を読めばどうしていつなつたのかわかると思います。
本当に申し訳ない。

第25話 よりっこ、なりばん奇跡を起しやがつ（前書き）

ちゅうと無理やつな感じがあつますね？

多少、書かれてない部分がありますけど問題ないよつこじたつも
りです。

では、どひわーー！

PS - もう少ししたら更新を一時停止せざるおえないかもしだせ
ん。

理由は原作の進行具合です。進んでくれないと対処できません！！
一部原作と離れてますから、修正していくのですが眞実が明
かされないと無理なんです。

第25話 よろじに、ならば奇跡を起しやう

「・・・・人間は度し難い。英雄よ、貴様も我が2600年の絶望を知れ。さらばだ・・・・」

フォッ・・・・

「ぬつ・・グ・・お、お鑪匠・・鑪匠・・シ鑪匠才おおおお
おおお――シ――!」

・・・・・ハハ、ハレドーいで

すね・・・では次ですね。

「陛下……これは罷ではないのですか！？おそれ
く元老院……」

「よいクルト……全艦艇、光球を取り囮み押さえ込め
！魔道兵团、大規模反転封印術式展開！！全魔法世界の荒廃はこ
の一線にあり……各員全力を尽くせ！後はないぞ！？」

「ようじこのですね……？女王陛下。」

「（ギシギシッ）ようじこハズが……ないつ！（ブ
ツンッ）」

（フオーンッ！）

転移術式発動直後、何者かが此処に転移してきた。

「その通りです、いい筈がありません。ですから手伝わせていただ
きますよ？女王陛下。」

「……何故お主が此処にいる？——？」

終戦から18時間後

ウォンウォンウォン

W
A
R

I
S

O
V
E
R!

W
A
R
I
S
O
V
E
R
!

飛行艇が街の上空を飛び交い、空中には WAR IS OVER ! と書かれている魔法投影ディスプレイが幾つも設置してあり、オステイアは終戦記念の式典でにぎわっていた・・・

ギイ

その一角の酒場のドアが開き、一人の少年が入つて來た・・・

少年は歓声で皆に迎えられ、そして仲間の下へ向かつていった。

- ፳፻፲፭ -

「ナギちゃん！」

「リーダーの登場だあ！！」

「来たかナギ！」

「てめえ傷はもういいのかよ！？（ドスドスドスッ）」

「とにかくリゲルに治してもうたつーの！お前こそさつきまで両腕なかつたくせに偉そうなこと言いやがつてッ！（ガガガツ）」

「傷をド突き合ひつな貴様らあ——ツ！—！」

「詠春てめーが一番の怪我ひでえのによく式典とか出るぜ?ワハハ

— ! ! —

「だから傷をド突くな！開いたら死ぬぞ！…」

「つーかアル！てめえは何で受勲式出ねえんだよつー…？」

「私、上がり症なもので・・・」

「嘘つけ―――つ―――」

「ですがナギ。私以外にも2人ほど出ていない人がいたでしょう？
むしろそちらの方が問題ではないですか？今回の決戦も彼がいなければ勝てたかどうかわかりませんよ？」

「そーだけどよおーー！今あいつらいねえーじやん！」

「まさかあのゼクト殿が逝つてしまわるとは・・・」

「いやお師匠は・・・」

「ナギ（言つては駄目です。）」

「アルさん、僕は諸悪の根源を倒した翌日に停戦合意、即記念式典

なんてすいぶん手際が良過ぎる奴がしするんですナビ?」

「タカミチ君、それは本格的な講和はまだ先でしょ? ナビ、まずは全世界へのアピールがしたいからではないのでしょ?」

「……でもアルさん、式典をこんな王都から遠い離西でやるなんて……何かおかしいと思いませんか?」

「…………」

「おひ、どひした英雄さんよ。暗えなーもしかして女か?」

「ちげーよバーカ!」

・・・・あの冷血王女があんなコト・・・・よつぱりだぜ・・・・・

「ちょっと約束したの思い出しだけだよ。」

少し飛んでいる部分はネギまー29巻参照

「…………彼に話を聞く必要があるかもしませんね。」

「…………からが、本番です……エヴァ、アスナ、行きますよ。」

「フン……」褒美は期待しておくれからなー！」

「私は要らない。リゲルが手伝つて欲しいならいくらでも助ける。」

「なつ…ずるいぞアスナー！」

「欲張ったエヴァが悪い。」

私は迷い無く「ハハハ」と笑う彼女達の姿を見て嬉しくて頬を緩めます。

「（ハハ）……では、始めましょう。オステイアの人々を護りましょ♪。では保護は任せましたよ、皆さん。」

「……………」

「陸下……時間です。おそらく崩落の第一段階が」「進行状況は？」

「封印直後から全艦艇全力で当たつており、現在37%」

「陸下のお考えどおつ式典と称しこの離島に全市民を誘導しておつます。情報統制により混乱もこれまでの所ありませんが・

・・・・・崩落が始まればその限りでは・・・・・全市民の救出は困難を極めるかと!—】

「・・・・・ッわかった。」

「妾も直接指揮にあたる!—・・・】

「うひと待つてください。その必要はあつません。」

「コ、リゲル!—今まで何をしていたんだ!—?崩落まで時間がないんだぞ!—】

「・・・・必要がなことませいひことじつせへ・・・】

「63%・・・・残りは我々が引き受けます。」

「なつやんなことは無理に決まつてます!—・・・JRの1~3時間でやつと37%なんですよ!—・・・】

「少し冷静になれ、クルト。・・・・壊つかれてはだめだあれのか?・・・】

「はい、既に準備はできています。今すぐにでも可能です。」

「……わかった。直ぐに実行してくれ。」

ズズズズンッ！！！

「もう始まりましたか。では始めます……魔神具発動『猫は全てを停止させる・改』クロノス・カイ！」（チリン）

『金色の鈴』が鳴り、セカイは色を失い、全てが停止します。

ただ前と違うのは、動いている存在が1人ではないということです。

『猫は全てを停止させる』の『このセカイでは自分以外の時は止まる』という概念を

『このセカイで自分を含めた複数人以外の時間は止まる』という概念に書き換えたものが『猫は全てを停止させる・改』クロノス・カイです。ただし今回のものは触れたものの時間は止まつたままでし、前回同様長時間の発動はできません。そして動ける人の人数によって発動時間が左右されます。

今回は私が制御に徹しても、10分ほどが限界です。

ですがこれだけあれば充分です。

「後は任せましたよ、みんな？報酬は一人につきマタタビ酒5本です。」

「……………」
「……………」

私には頼れる仲間達がいますからね？

ですがナギ達には今回の件には関わつてもらえません。だつて主役の一人がいなう今、その代わりがいるでしょうからね？

「じゃあ始めてください！！誰一人として見逃さないでください！」

こうしてかつて千塔の都と称えられた空中王都オステイアは地図から消滅した。

だがその崩落による犠牲者は一人もおらず、崩落したはずの場所にいた人々からは

「いつの間にか違う場所にいた！！」

という証言が寄せられ、『神の奇跡』と呼ばれることになった。だが、その証言の中には

「猫に助けられた！！」

という証言や、猫アレルギーの人たちが苦しむということもあり「これは猫が関係しているのでは？」

とも言われたが、真相は一部の人以外には知られていない。

この奇跡は今回の大戦の英雄達の一人とその仲間達が起こした奇跡だということを・・・・・

第25話 ようじい、なりば奇跡を起しやつ（後書き）

そろそろアリカ様が捕縛されます。

だがしかし！…またリゲルがあの手を使ってやっちゃいますよ…！

そしてMM元老院の一斉駆除が始まります…！

「うひー」期待…！

第26話 よりしき、ならば処刑だ（一）（前書き）

処刑されるのはアリカ様に在りす！！

エヴァの件でも借りがあるあいつらですよーー。

第26話 ようじい、ならば処刑だ（1）

「今回の崩落では犠牲者は出なかつたよつです。普通ならありえませんが……」

「確実にアイツが絡んでんだけつな？ だけどよお、マジで大変なのはこれからだらうしな……」

「…………姫さん」

リゲル SIDE

オステイア崩落から2ヶ月と少しが経ちました。

今の王国は災害復興支援の名目で派兵されたMM軍によって実効支配されています。そしてオステイアの民は金も、家も、仕事も失い数百万人の人々が難民となり周辺各国に流出しました。

そしてアリカ女王はその現状を解決しようと奔走し各国に難民受け入れを承諾させ、難民が生き続けられるように『奴隸公認法』を可決させ、今は彼らをいち早く解放できるように尽力していました。

そしてMM元老院に直談判し支援を要請した際に元老院の脣達によつて冤罪を着せられ逮捕拘束され、ケルベラス無限監獄に収容され今に至るわけです・・・

「お久しづりです、アリカ姫。」

「・・・何故お主が此処にあるのかは知らんが・・・妾が多くの憎しみを引き受けて処刑されることで世にある不幸を少しでも減らせるなら本望じや。このまま・・・捨ておいてくれ・・・リゲル殿。」

「嫌です。」

「いいか」「嫌です。アスナちゃんもそう言つてますし。」何を言つてある、アスナは今『墓守り人の宮殿』に封印されているはず「そんなところにアスナちゃんはいませんよ?私が何年か前から保護してますし。」じゃがアスナは『完全なるセカイ(コズモエンテレケイア)』に没われるまでは「それは偽者ですよ?とはいっても本物同然の人形なので分かるはずありませんけどね。」
・・・全てリゲル殿の手の平の上で転がされておったという訳か。

「

「ですから最後まで付き合つてくださいね?(ボフンッ!)これがアリカ様の身代わり人形です。」この人形が処刑される一年後までにMM元老院の不正の証拠を集めますから、それまではアスナちゃん

と一緒に場所にいらっしゃりますけど……いいですか？

「だが妾が皆の不満と懲しみを受けねば……誰かが犠牲にならねば
いけないのじゃ……その義務が妾には「甘つたれるな小娘……」
(ビクウ……)」

少々言葉が荒くなつてしましました。ですがそれほどにまでアリカ
様の言つてこいることが氣に食わなかつたのです。

「何を勘違いしているのか分かりませんけど、あなたにはこれから
しなければいけないことが山ほどあります。そしてあなたが義務と
言つたことを受けなければならぬのはMM元老院の一部の議員共
です。あなたがやるべき義務は少しでも多くのこの戦争による被害
者を救済することでしょう？だから死んで詫びて逃げようだなんて
ことは許しません。それに私の手の平で起きたことなんですから全
てどうにかして見せますよ。あなたにはちゃんと幸せになつてもら
います。私たちは仲間ですからね？」

「ナギに出来つておらなかつたら……今のでお主に惚れてしまつや
つじやな？」

「それは光榮ですね。さて、行きまじょうか？」

そして、その部屋には人形のみが残された。危険物や記録装置、通信装置などがつけられた人形が……

2年後・・・・・

ケルベラス無限監獄にて

「刑の執行は10日後と決まりました。――その前に今一度お尋ねしましょう。『黄昏の姫御子』と共に封印された墓所の最奥部。そこに到る方法をあなたは知っているはずだ。」

「・・・・・」

「言つのです！――これは世界を滅びから救うためでもあり、最愛のアスナ姫をお救いする為でもあるのですぞ！？」

「・・・・・」

「フン・・・・・・使えぬ女だ・・・いや、失礼。これは言い過ぎました。貴女は10日後の死によって充分に世の役に立つことになるのでしたな。そう――世界平和の礎として。」

カツンッカツンッカツ・・・・・・

そうして今まで唯一元老院の中で「コレと言つた証拠がなかつた議員は去つていつた。

「（ニヤリ）リゲル、最後の証拠みつけたぞ。」

偽者からいつもとは違う声が発せられる。その目は爛々と紅く輝き獰猛な捕食者の瞳をしていた。そしてその首には昨日までは見られなかつた擬態の能力を持つネックレスがかかっていた。

そう、彼は最後の最後で致命的なミスを犯してしまつたのだつた・・

シチリス亞大陸 紛争地域

「う・・・」

「もう大丈夫だ。すぐに治療してやる。」

「ア・・・アリガトウ・・・立派な魔法使い・・ナギ・・」

・・」

「ん～～あんまりそう呼ばれんのは好きじゃねえんだがな・・・」

「

「ナギ！詠春さん！」

そうして彼等にもアリカ様の件について知らされたのだった。

だがそれが既に解決していること彼らは知らない・・・

そして、紛争地帯での被害が何者かによって最小限に抑えられていることも彼らは知らない・・・

「今日もまた一人の命を救えたぜ・・・姫さん・・・」

何も知らない彼らだが、彼らは紛れもなく英雄である。なぜなら今日もたくさんの命を救うことができたのだから・・・・・・

アリカ・アナルキア・エントエフュシア（本当はMMの豚共の）処刑執行日当日

「魔獸づじめくケルベラス渓谷。魔法の一切使えぬその谷底は魔法使いにとつてまさに「死の谷」」

「古き残酷な処刑法ですが……この残酷さをもつてようやく魔法世界全土の民の溜飲を下げることとなりましよう。」

「歩け――！」

「触れるな下郎。言われずとも歩く。」

そういうて紅い瞳をしたアリカ女王は歩いていく。そしてそれを内心でニヤニヤと見つめている豚共がいる。
すぐに自分が同じ目にあうとも知らずに・・・
此処にいない豚共も時計を見ながらニヤニヤしているだらう。何故か一瞬でその場所にいて、自分が同じ日に呑わされるとも知らずに・・・

「（・・・・・アリカ様・・・・・）」

そして自分の無力さかみ締めている少年は、気づかない

その背後に完璧に気配を消して、獰猛な笑みを浮かべている男に・・・

「（クルト君・・・早く離れていてください。危ないですよ？）」

小声で話しかけられ一瞬身体を強張らせるが、それ聞きなれた声であることに気づき安心する。

彼ならば彼女を助けてくれるだろうと・・・・・

「あ、借りを返させてもうりますよ？エヴァのことも、戦争のことも、アリカ様のことも、アスナちゃんのことも全て利子つきでね・・・・」

そう言って大戦の英雄は戦の後片付けを始めたのだった。

第26話 ょうじい、ならば処刑だ（1）（後書き）

次回

ヒヤー——ハ———！汚物は消毒だ———！

「期待——！——（こんなタイトルではありますん）

闇話 むいじこ、なります誕生だ（前書き）

無理やりな感じですが例のあの子を登場させました。

今後は本編にも参加させる予定です。

闇話 よいじい、ならば誕生だ

この闇話の時系列は、終戦の数日後頃です。

ピッ・・・ピッ・・・ピッ・・・

ウォンウォンウォンウォンウォン

シユニー・・シユニー・・シユニー

ここは『全て猫だらけの理想郷』^{ニヤバロン}の住居地区・・・最末端のブロ
ックを丸ごと一区使用して作られた施設の中。

現代では考えられないような高性能の機材があちこちに設置されて
おり、数名の白衣を着た猫人たちが忙しく動き回っている。

オーバーテクノロジーが溢れているそこに、私はいた。

皆さんには覚えているでしょうか？

随分前の話になりますが、私が『超電磁砲』を撃つたことを・・・

しかし、普通の人が『超電磁砲』なんてものを撃つことは魔法を使わない限りは不可能です。ですが私はあの時魔法を使用せずに『超電磁砲』^{レールガン}を撃つていたのです。

そしてあの時使用した魔神具『ハーディス』の能力は無限の銃弾と他の追随を許さないほどの速射性能だけです。未知の金属オリハルコンを使用して作られていますから他にも能力はあります、『ハーディス』でただ銃弾を撃つただけでは絶対に『超電磁砲』^{レールガン}なんてものは撃てません。

なら、どうやって『超電磁砲』を撃つたのか

それはこの研究施設で行われている「魔法を併用することによる劇的な科学の進歩」の成果なのです。

通常ならば製作するのに10年かかるものでも魔法と私を含む猫人達の優秀な頭脳が合わされば一週間で完成させることなんて造作も

無いことです。

魔力で補えないものは神力を使ってますから不可能はほとんどありません。

だってオリハルコン作れちゃったんですよ？作ることのできないものの方が少ないと思います。

そして、私が使った物の中には『超電磁砲レールガン』を撃つために使用したナノマシンもあります。

コレを製作するのに半年もかかり、私の最高傑作といつても差し支えないものです。

ナノマシンとは極小の機械のことです。これを体内に投与して馴染ませると体内で自動的に増殖していきます。生き物みたいな機械ですね？

そしてこれは予めプログラムした動作を行ったり、宿主のイメージに合わせて宿主の肉体を変化させることができます。コレを使えば魔法に頼らなくても簡単確実に治療ができます。

とはいっても使用するエネルギーは宿主の魔力、気、生体エネルギーを使用するのでその分疲労が溜まつたり、魔力切れ、気切れ起こす可能性が大きいですし、並みの人間では身体組織の崩壊を招き

かねませんから改良が必要です。

そして『コレを使用して体内の微弱な電気を増幅し、『ハーデイス』に充填させることで私は『超電磁砲』レールガンを撃つことができたのです。そのころはまだ試作品段階で色々と不便でしたが、今体内に入っているものは私専用にカスタマイズした完成系です。

具体的には『超高エネルギー』を必要とする代わりに大抵のことはできちゃうよ? 雷速なんて『魔法使わなくても超えられるし、亞光速もいけちゃうよ?』って感じです。

身体をあらゆる形状、物質に変えることができますし、元からこの身体はスペックが高いので幾ら使っても副作用等は出ません。

・・・・・『ハーデイス』使わなくとも、某ビリビリ娘の『じとく』『超電磁砲』レールガンを撃てたときには感動しましたね。無論、弾にはコインを使用しました。

形式美って大切ですよね?

ですがナノマシンがなくても十分に戦えますし困ることもほとんどありません。魔法や神力で同じことできますからあれば便利という程度です。

なら、何故こんなものを作ったのか？

それは最近私を悩ませている問題を解決しようとしたからです。

その問題とは・・・・・猫人が女性しかいない」とです！――！一見「そんなものは問題じゃないだろう」と思うかも知れませんがこれは大問題なのです。

私の魂創造ではなぜか女性しか産み出せなくて、『^{ニヤバ}全て猫だらけの理想郷』のなかにいる男性は私一人です。

そこで問題が起ります。ヒントは

- 1 女性多数
- 2 男性一人
- 3 猫
- 4 本能
- 5 無駄に廢スペックな上、変なところですごい団結力を發揮する
- 6 襲ってきた皆に「外の世界にもいい男はいますよ?」といつても「目の前の男のほうが好み」と言われたと同時に襲われたあの瞬間の恐怖

の6つです。ここから導き出されることは……わかりますよね？

最近、寝ていると真操の危機を感じるんです。いつの間にか囮まれていたなんて事は日常茶飯事ですし、奴らは結界を張つても私に気づかれることが無く突破してきます。

最後はいつも絶好のタイミングでアスナちゃんかエヴァが助けてくれますから逃げ切ることができてきました。あの頃はナノマシンをまだ体内にいれていなかつたので、魔法や神力を使う前に一気に攻め込んでくる奴らには対処仕切れなかつたんです。

そんな時ふとエヴァとアスナちゃんがいつもタイミング良く助けてくれるのが気になつて何故かと聞いてみたら

「リゲルの（真操の）危機は何処にいてもわかる（わかるぞ）。」

「

だそうです。全く理屈はわかりませんでしたけど、そこはもうどうでもいいです。毎回助けてくれて本当に感謝しています。お礼に今度ケーキを作りたいと思います。

昔はみんな小さくてそんなことも無かったのですが、女性は早熟で
すし最高齢の猫人はほとんど大人と変わらないぐらいに成長してま
すから、このままでは本当に喰われます。

・・・・あの事件以来トラウマなんです・・・・突然女性に襲
われると身体が硬直して動けなくなる時があるのです。

それに男の猫人の友達も欲しいのです。女数百人の中に男一人とい
うのは疲れます。そして何より男の猫人がいれば私も襲われること
がなくなる筈です！！

男の猫人がいても襲われ続ける可能性があることにリゲルは気づ
いていません

だから今回はナノマシンなどを使用して男性体を産み出したいと思
っています。具体的には魂が身体を作り出すときに男性のイメージ
を込めたナノマシンによって性別を男に変えるつもりです。

使用するものは

2 , 魔力、気、神力の結晶

3 , 魂（猫人）

の3つです。魔力、気、神力の結晶を入れたのは強い男性体になつてもううためです。理由はわかりますよね？

「ではいきます・・・・・フツ！－！－！」

それら全てを徐々に融合させていきます。それと同時に私のこと、一般常識、あらゆる分野の学力、戦闘経験、ナノマシンの使い方等の情報を学んでいきます。こうすることにより肉体的にも精神的にも成長を促進することができます。

コレで、やつらの包囲網からも抜け出せる廢スペックのさらに上を行く兆廃スペック（誤字にあらず）な存在が生まれるはずです！！

（パアアアアアアア！－！－！）

いつもより神々しい感じの光があたりを埋め尽くします。神力を込め過ぎたかもしれませんのが多少スペックが上昇してくれても構いませんし、奴らから逃げるためにスペックが上がるのは喜ばしいことです。

光の奔流が收まり、待ちに待つた猫人初の男友達（予定）が今日の前に－－！

「…………」

目の前にいたのは中学校に入るかは入らないかぐらいの年齢の、見惚れるような金髪に黒猫耳がすごく似合っている美少女でした

ええ、少年ではなく少女でした。

一瞬で夢が碎けちり、膝から崩れ落ちそうになりますがまずは彼女に服を着せます。勿論見てませんよ~これは当然のことです。

「大丈夫?どこか痛い?」

渡した服を着終わった彼女が優しい言葉をかけてくれます。こんなに優しい子が生まれてくれてすごく嬉しいです。嬉しいのですが・・・・男じゃないんですよ。

ここまでして男性体が生まれないのなら、もう無理です。ナノマシンも効きませんでした。これは呪いですね?そうに違いありません。もしくはあの駄神が何かしでかしたのでしょうか。

「・・・ハア」

「？」

何時までも落ち込んでいても仕方ないですし、「あなた」とか「キミ」とか呼ぶのはいけませんからまずは彼女に名前を付けたいのですが

元々男性が生まれるつもりだったので……どうしよう?

考え中……

生まれてきた男性には、男猫人の一人目ということで『アダム』と名づけようと考えていたのですが……なら、『アダム』ではなく『イヴ』なんてどうでしょうか？
我ながらなかなか良いと思いますし、彼女のイメージと名前も合っていると思います。

「あなたの名前は『イヴ』なんてどうでしょう？」

「……うん、気に入った。ありがとう。」

こうして『全て猫だらけの理想郷』^{イヤバロン}に新しい仲間が加わったのでした。

彼女はとても純粹で、私の疲れた（猫達の襲撃で）心を癒してくれました。彼女を見ていると本当に癒されます。マイナスイオンでも出しているのでしょうか？

数日後の深夜、秘密の会合にて・・・

「最近の御主人は私たちに対して冷たいと思わニヤいか？」

「確かにそうだにこや！一緒に寝よつと思つても、最近はいつも逃げられるニヤー！」

襲ひからです。

「やうだニヤー！最近ウチらに対する愛が足りんこやー！」

自業自得です。

「最近は新しく入ってきたイヴって子ばっかりがまつてゐニヤー！」

普通に考えれば当たり前のことです。

「愛情がほしい——ヤ——！」

「」「」「」「」「」「」「」「」

こんなときばかり無駄に団結力のいい猫達は、すぐさま準備にとりかつかった。

そんなことをしても逆効果である」といふべきなれど。

翌日、『全て猫だらけの理想郷』^{ニヤバロン}の猫達（参加率は100%）はリゲルに一斉襲撃を行つた。

だがそんなものに捕まる訳がないリゲルは逃げ続けるが、一向に終わる気配のない襲撃に嫌気が差してついつい

「私を捕まえた最初の一人の命令を無理なことでなければ一回だけ聞いてあげます。」

といつてしまふ。だがそれは火にガソリンを入れるようなもので、襲撃は激化し、猫達は見方同士で潰し合いを始める始末であった。

そしてその隙に近づいていたイヴの

「リゲル、抱っこして？」

という一言で結果は決まった。その時は何の気なしにイヴを抱っこしたリゲルだったが

「捕まえた。私の命令一回聞いてね？／／／」

という一言を聞いて、自分の失敗に気が付き、彼女が兆廃スペックであつたことを思い出した。イヴはリゲルの心理を読みきり、油断したところに普段からよくやっている抱っこをせがむことで何の違和感も感じさることなくリゲルを捕まえることに成功したのだった。純粹だと思っていたが彼女も他の猫人と同じようにやる時はずつとうだ。

無論、猫達からは反発があつたが、次の口にはイヴによつて完全に鎮圧されており（金色の綺麗な髪が血に染まつたらしい）、リゲルは隠れてこの件をうやむやにしようとした試みるも即座に捕縛され、その後イヴが

『リゲルはずつと私と一緒にいて／／／』

という命令（告白？）をしてリゲルを困らせ、それを聞いたエヴァとアスナとの喧嘩が始まり、それを止める為にリゲルがイヴを抱きかかえたことでさりに激化し・・・・

最後にはイヴは正当な権利を持っているのだから今後はエヴァと同じようにリゲルと一緒に行動するということで決着がつきました。

それに伴ってイヴ・エヴァ＆アスナの抗争も始まり、数日間の戦いの末、終結した。

そしてエヴァ、アスナ、テオ、イヴによる協力体制が確立された。協力体制を取ることになった理由はやはり「リゲル自身が一番強敵」
という共通認識だったらしい。

闇話 よいじい、ならぬ誕生だ（後書き）

イヴの姿は、black cat のイヴ、もしくはTOTOV
eのヤリを想像してください。

今後はイヴを色々と原作に絡ませていきたいです。

感想、評価等お待ちしています。

第27話 よりしき、ならば処刑だ（2）（前書き）

今日は長いです。その為クオリティが下がっていないか心配です。
この作品の感想、指摘点、評価をもらえると助かります。

第27話 よりじい、なまは死刑だ（2）

たんつたんつたんつ

一歩ずつ確実に歩を進めていく。田の前には何もなく、もひ一歩進めば谷底に落ちるだろひ。それでも彼女は歩を進める。その下に見える魔獣も死の恐怖も最初から感じていなかのよひ。

そひ、彼女は恐れていないのだ。魔獣も、この高さから落下するといひとも全く自分が恐れる要因にならない。

だつて彼女は『真祖の吸血鬼』で、神の従者なのだから・・・

そして彼女は最後の一歩を踏み出した。

数日前の理想郷にて・・・・・

私が木陰で本を読んでいると、エヴァとアスナちゃんとイヴの三人がこちらに向かってきました。

近くまで来たのを確認して、私は本を閉じてそちらを見ます。するとエヴァが

「り、リゲル！ わ、わ私と契約しろ！ ／／／

「ええ、仮契約ならいいですよ？」

「じゃあ私も仮契約パクティオしてくれない？」

「勿論いいですよ。」

「私も駄目？」

「イヴだけ駄目なんて事は言いません、いいですよ。」

仮契約は、簡易型仮契約魔具を使用して行いました。どちらがマスターかを選んで、球体の形をした魔具に手を触れさせるだけです。とても簡単に仮契約できるので、マホネットで売り出したのですがなかなかの売り上げを誇っています。

仮契約をする際、三人から「（ジト――――）」という視線を向けられました。何故なんでしょう？

・・・もしかして私が最近作った試作ケーキ（ミルフィーコ）を一人で食べてしまったことがばれてしまったんでしょうか？三人とも甘いものは大好きですからね。

「「「・・・はあ（絶対勘違いしてる（な）。）」」

今度は三人そろってため息をつかれました。その上「ジト――」という視線は向けられたままなのですごく居心地が悪いです。

「あの・・・一人で食べてしまったことは謝ります。でも、もともと一人分しか作ってませんでしたし、三人のうち誰か一人だけとうのは・・・ごめんなさい、完成したら皆の分も作りますからその目を止めてくださいお願ひします。」

「「「はあああああ――――」」

「・・・ならそれに追加で、エヴァにはワイン、アスナちゃんにはフルーツタルト、イヴにはたい焼きつけますからこれで勘弁してください。」

「「「はああああああ――――」」

――――――

「な、なら…………」

こんな感じで三人はリゲルと無事に仮契約^{パクティオ}したのでした。

その日の食後のデザートにはケーキ、ワイン、ジュース、タルト、たい焼き、パフェ、プリン、アイス、クッキー、ゼリーなどのたくさんデザートがテーブルに並び、ようやく視線から開放されたりゲルはぐつたりしていたらしい。

ああ、言い忘れていましたけど最近のアスナちゃんは言葉遣いも改善され、もう普通に話すことができます。不老の魔法薬の効果はまだ抜け切っていませんので今はまだ身体が成長することはありますん。

ナノマシンを投与して治すという方法もあつたのですが、アスナちゃんは「このままでいい。」と言ったので自然に効果がなくなるのを待とうと思っています。

それでは三人の仮契約カードを紹介します。

名前	ATHANASIA ECATERINA MACDOV ELL EVANGELINA(アタナシア・エカテリーナ・マク ダウェル・エヴァンジエリン)
称号	神に守護されし真祖
色調	堇色(viola)
徳性	信仰(fides)
方位	北(n septentrio)
星辰性	月(luna)
アーティファクト	?????????
称号	神の加護を受けし亡国の姫
名前	アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア
徳性	
色調	
赤色(Rubor)	
勇氣(audacia)	

方位	東 (oriente n s)
星辰性	月 (luna)
アーティファクト	?????????
名前	イヴ
称号	神造魔猫
色調	金色 (aurum)
徳性	知恵 (sapientia)
方位	中央 (centrum)
星辰性	月 (luna)
アーティファクト	?????????

三人とも星辰性が月になつてますね？これは私と仮契約したからだと思います。一応私は月の女神の後継神（？）という立場の神にな

つているはずですからそれが関係しているんでしょうね。

アーティファクトはまだ秘密です。でもすぐにわかると思いますよ。

こうして三人は神の従者になつたのでした

クルトSHIDE

フワッ

「アリカ様ツ！」

アリカ様が落ちていつてしまつ。彼を信用していないわけではないけど声が出てしまつ。自分が仕えている人が今まさに処刑されるのだから。

「お願いします、リゲルさん。今の僕の力じゃどうすることもでき

ません。だから・・・アリカ様を助けてください！――！」

今僕がどれほど頑張ったとしてもアリカ様を救うことは不可能だ。だから僕は彼に頼ることしかできない。それが悔しくて、ついつい彼の服を強く掴んでしまう。

「勿論です。では、はじめましょう。イヴ、エヴァ、行きますよ！」

彼は僕の手を優しく服から離させた後、僕も良く知っている人と知らない人を呼ぶと同時に、僕の目の前から消えていた。

「クックツ・・・王家の血肉はさぞや美味でしょうな。
この処刑方法の長所は復活がほぼ不可能な点です。魔法の使えぬ谷
底で幾百の肉片となつて魔獣の腹に収まってしまえば、たとえ吸血ハイ・デ
ライトウーカー鬼の真祖といえども復活は困難でしょう。」

MM元老院議員の一人がその顔を愉快そうに歪めながらドヤ顔で説明しています。

「よろしく。それは本当ですか？」……当たり前でしょ。吸血鬼の^{ハイ・デイライトウォーカー}真祖といえどもこの谷から生き残るのは不可能です。それと、私の話を遮るなんて君は少し礼儀といつもの学びなおしだほうが良いですね。名を名乗りなさい。」

「私の名前ですか？すぐにわかると思いますよ。だつて……」

ピキンッ！！

谷底で強力な氷魔法が使われます。

「吸血鬼の^{ハイ・デイライトウォーカー}真祖といつも行動を共にしている人なんて私だけしかいないでしょ？」

私は目深にかぶっていたローブを脱ぎ、最近愛用している『ハーディス』を議員に向けます。

〔さう貴様は……〕

「あなた達に不吉を届けにきました。」

〔『死を運ぶ黒猫』……リゲル・マクダウェル！〕

？」

「おこりゲル、俺のセリフ盗んなー。」

「十の刃の・・・ジヤック・ラカン！・・・それに青山詠春とアルビレオ・イマ！・・・『アラルフラ紅き翼』だとッ！・・・では谷底の女王は・・・」

「てめえ！・・・離せ！の野郎！・・・なんでアリカじやなくてお前が落ちて来るんだよ！・・・てかなんであそこで魔法使えてんだ？！」

「うるさいぞ鳥頭。あと私は野郎ではない！・・・魔法はリゲルにござりにかしてもらつたわ！・・・」

「真祖の吸血鬼・・・エヴァンジエリン・A・K・マクダウエルと千の呪文の男・・ナギ・スプリングフィールドだと！・・ならばあの女王は・・・お前が擬態していたのか！・・吸血鬼！・・」

やつと事態が飲み込めたようで憤慨している馬鹿がいますが気にしません。

「早かつたですね？イヴはびつきましたか？」

「下で凍つた魔獣どもをチャチャゼロと一緒に掃除中だ。そもそも他の奴らも集めるか?」

「そうですね、この放送は我々が生中継してますから一気にやらないと逃げるかもせんから……『捕縛転送』

掃除するなら一気にやつてしまつたほうが気持ちが良いですからね?」

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン

次々と汚職していた元老院議員がここに転送されちゃいます。少し前からマーカーをつけて一気に転送できるようになっておいたのです。

「ムツ? これは何処だ?」

「そんなものは殺してしまえり……それまで執務室にいたはずなのだが……何故私はここにいる?」

「はあはあん……はあああ……（ハイツは裕ヒツヒツ・ニ・タ・ヒだつたようです。女装趣味している中の年おつさんを思いつかひ・・オヒヒ）」

「お前が助けを呼んだところで誰も来るわけ……」

あれ？」

最後の奴は少女を誘拐してたらしく、その後リゲルによつて保護され両親の元へ帰されました。

大体集まつたよつですね？全部で数十名ほどでしょ？。

「では、世界中のこの放送を見ている皆さんに重大発表があります。此度の戦争によつてこのたび処刑されるはずだつたアリカ様が多くの非難を受けていますがそれは間違ひです。ここにいるMM元老院議員たちこそが今回の戦争の黒幕と結託し多くの死者を生んだ重罪人なのです！－この一年間の捜査で証拠は全て集まつています。それでは読み上げます。まず

「氏の罪状は……」

こうしてここにいる元老院議員全員の罪状とその証拠を読み上げていき、とりあえず逃げないよう拘束してケルベラスに投獄。そしてアリカ様の無罪を証明するために自作の大戦映画（アリカVER）を上映し、その後にアリカ様が捕まつた時の映像を見せて、元老院議員の醜悪さをアピールしておきました。

あとは各国各地に証拠の複製品をばら撒き、一週間後にでも各國に問い合わせれば終わりです。ついでに集めた他国重役の犯罪歴をまとめたものも公開しておきましょ？。

こうしてアリカ様の無実は証明され、MM元老院の信用は地に落ちたのでした。

私は、エヴァの時の仕返しができても満足です。

「アル、俺ら来た意味あつたのか？」

「詠春、それいつては駄目ですよ。」

「リゲル！俺のアリカはどこいったんだよ！？」

「俺のとは・・妻は何時のお主のものになつたのじゃ？教えてくれぬかのう、ナギ？」（ニヤニヤ）

「お、おまえ！いたなさいたつて言えよ……／＼／＼

「そんなことは別にいいのじゃ。でも、誰が誰のものなのじゃ？」
「言つてみよ。（グリグリ）」

「ち、チクショ――!!」

これが後に女王様モードと呼ばれるサドなアリカが誕生した瞬間だつた。

その頃の谷底

「ケケケケケ・・・コノ、コロ出番ガナイカラ忘レラレタカトオ思ッタゼ。ストレス解消サセテモラウゼ！－（ヒュンヒュンヒュン）」

「・・・チャチャゼロ怖いよ？私も後片付けしないと・・・（ガガガガガガガガ！－！）」

こうして、ケルベラス渓谷の魔獣は一匹残らず駆逐されたのだった。

第27話 ようじい、ならば処刑だ（2）（後書き）

一週間後にMM元老院議員はオコジヨ刑にされ投獄された。

後日、各国の重役が一斉に捕まりオコジヨ刑にされたらしい。

最近ナギがアリカの尻に敷かれている光景がよく目撃されているそうだ。その時の二人の顔は満面の笑顔で、とても幸せそうだったそうだ。

だが、アリカとリゲルの一人が一緒に歩いていたといつ証言も・・・

闇話 金色の少女の気持ち（前書き）

駄文過ぎる・・・・・

多々読み辛い部分があります。「」容赦ください。

「…………」

目が覚めて最初に見た光景は真っ白な部屋と目の前に佇む真っ黒な男の人だった。

最初はわからなかつたけど、徐々に自分の状況がわかつてきた。私は彼が産み出した命だということ、そしてこの身体のことと使い方、ありとあらゆる分野の知識、一般常識などが少しづつ身体に馴染んでいくのがわかる。

そして彼は私に服を与えた後、少し顔をしかめた。それを見た私は

「大丈夫?どこか痛い?」

自然にこの言葉を発していた。自分でも何故こんなことをいったのかわからなかつた。

その後、彼は私に衣服を渡してきた。自分の姿を確認した私は黙つてそれを着る。なぜか頬が熱い気がする。

彼は私が服を着たことを確認した後、

「あなたの名前は『イヴ』なんてどうでしょうか。」

私に名前をつけてくれた。何故かわからないが胸が少し温かくなつた気がする。

「……うん、気に入った。ありがとう。」

これが私と彼の出会い。ファーストコントラクト

そして、私という存在の始まりだつた。

episode 金と黒の生活

翌朝、目が覚めるとドアの向こう側から良い香りがした。彼に『えられた部屋で寝ていた私は、ベットを出てキッチンに向かう。自分が空腹だということはなんとなくわかつていて。初めて感じることだからよくわからぬい。

「おはよう、イヴ。朝ごはんを食べる前に顔を洗つてきてください。ああ、朝ごはんはパンとお米どちらが良いですか？」

「…………どちらでもいい。御主人に任せる。」

私はそう言つて洗面所に向かう。私は彼のことを御主人と呼んでいる。理由は特にない。猫人の皆がそう呼んでいたから私もそうしてだけだ。

私が顔を洗つて戻つてくると、アスナとエヴァが起きてきた。

「おはよー。ふあ～、まだ寝足りんなあ。」

「リゲル、おはよー。今日の朝ごはんなに～？」

「はい、おはようございます。エヴァとアスナちゃんは顔を洗つてきてください。朝ごはんはそれからですよ？あと、パンとお米ならどちらが良いですか？」

エヴァはパン、アスナはご飯と答えた後、二人は洗面所に向かった。

一人のことは昨日紹介された。これから一緒に住むから仲良くしてねと言われた。私は自分の知識の一般常識、対人関係の項目からどうすればいいのかを調べて、常識的な行動を取った。

全員が揃つてから、朝ごはんを食べた。初めて食事と言ひつものをしたけれど、これが美味しいということはわかつた。

食後はみんな自由に過ごしているようだ。私は特にすることがないから御主人についていった。

* * * * *

御主人が掃除している。

アスナがやつてきて「私のパンツは洗濯しないで！…自分でやるから…（バチーン！）」というやり取りをしている。

アスナがエヴァに「一緒に洗濯されて恥ずかしくないの？」と聞いて、エヴァが「何年一緒に生活してると思ってるんだ？お前とは重ねてきた年月が違うんだよ？（ちょっと得意げ）」と答えているの御主人は微笑みながら見てている。

それにアスナが「そんなに長い年月をかけてるのに全く進展していないんだね？（クスクス）」と言い返した。

エヴァとアスナが喧嘩しだすの見て「これは止めないといけませんね?」とこっちを見ながら笑いかけてくれる御主人。

そして喧嘩を止めようとする御主人。

ずっと御主人を見ている。特にやる事が無かつたからせいなのかもしれないけど、いつも御主人を見ていた。なぜか目が離せなかつた。

数日間が経つた。

そして私は気づいた。いつも御主人の周りには誰か女の人がいる。

大抵エヴァやアスナが御主人のそばにいる。一人が忙しいときは、数人の猫人が絶対に傍にいる。

それに気づいたとき何か違和感を感じた。

アスナの話を微笑みながら聞いている御主人を見た時。

エヴァが御主人に抱きついている時。

御主人が一人を見て、優しい笑みを浮かべているのを見た時。

それらを見たときと同じように胸が鈍く痛む・・・・

他の猫人に相談したら「それは心が成長した印だニヤ。」と言われた。

私は心が成長すると言つ意味が最初はわからなかつた、自分の知識と照らし合わせてその時初めて自分の気持ちに気が付いた。私は

『御主人と一緒にいたい。離れたくない。』

心の底からそう願つていた。

この気持ちを何時から感じていたのかは私自身わからない。少し前からだつたのかもしれないし、生まれたときからかもしれない。気が付いた時には私の心の中にこの気持ちはあつた。

それが思慕の念かそれとも俗に言つ家族愛なのか私には判らない。

この感情の答えが知りたかつた。

それから数日間、私はいつも御主人の傍にいた。

アスナみたいに甘えてみたり、エヴァみたいに抱きついてみたり、御主人の呼び方をリゲルに変えてみたり、一緒に料理をしたり・・・

色々なことをした、私はリゲルと一緒にいると自然に笑顔になつた。
これが幸せといつものなのだと解つた気がした。

でもまだこの気持ちが異性に対するものなのか、家族に対するもの
なのか・・・・私には判断し切れなかつた。

次の日、リゲルが皆に襲われた。

これは皆にとって遊びの延長なのだとわかつていても少し嫌な気持ちになる。そんな時リゲルがこんな事を言つた。

「私を捕まえた最初の一人の命令を無理なことになれば一回だけ
聞いてあげます。」

コレを聞いた私は、必死に作戦を考えて自分の知識と照らし合わせて最良だと思う案を導き出していた。

ただ『他のみんなにリゲルを盗られたくない。』という気持ちが心の中に溢れていた。

「リゲル、抱っこして？」

その作戦は見事に成功した。私は嬉しくて、リゲルに力いっぱい抱きついた。リゲルも抱きしめ返してくれる。その時私は自分の気持ちが異性に対するもの・・・『恋』だと気づいた。

今思い返してみれば何で初めて彼と出会ったとき彼のことがみんなにも気になつたのかわかる。多分私は最初から、彼を一目見たときからこの気持ちを抱いていた、一目惚れだつたんだ。

「捕まえた。私の命令一回聞いてね？／＼／＼

だから私は、彼は絶対に誰にも渡したくない。心の底からそう思つた。

その日の夜は頭の中の知識から、何をお願いしようか決めるのに時間がかかるって、やっと決めたのは朝日が昇った後で全く眠ることできなかつた。

自室から出た私は、あの後どこかに行つてしまつたりゲルを探すために家から出る。すると外では問題が発生していた。

昨日の結果が気に入らなかつた人たちが、『直談判だニヤー！』と言つてリゲルを襲おうために仲間を集めていた。

当然私は気に入らない。自然と「リゲルは私のものなの……」と言ひながら皆に向かつて走つっていた・・・・・・

その後のことはあまり覚えていない。気が付いたら髪の毛が血だらけになつていた。

猫人にとってこの程度の流血は、怪我の内に入らないから気にしない。今はみんな氣絶してるけど2、3時間もすれば怪我も治つてるだろうし目を覚ますだろう。

だからみんなが起きて邪魔をしてくる前にリゲルにお願いを聞いてもらわないといけない。

リゲルは隠れて逃げようとすると思つたから昨日の内に隠れやすい場所には罠を仕掛けた。

ペー・ペー・ペー・ペー・

・・・・ちょうど引つかかつたらしい。こうも簡単に引っ掛かつてくれるとは思つてなかつたから拍子抜けした。気を取り直して、彼に逃げられる前に捕獲するためにはいでのこに向かう。

* * * * 移動中 * * * *

どうとか間に合つた。脱出寸前だつた彼に抱きついて、逃げられなによつてから私が一晩中悩んで決めたお願ひをする

「リゲルは私とずっと一緒にいて？／＼／＼

昨日、いろんな知識を集めていたらある雑誌に『好きなら人に告白するならこの言葉！』と言つ見出しの記事の中にこの言葉が載つ

ていた。

このお願いを聞いても「やればやれ」と一緒にいることができるし、
いっぱい甘えることができるひっこ。

あの一人よりリゲルの近くにいることができると喜びがわかつた私は、お願い候補の一つとして採用した。

リゲルは無理なこと以外と言つてはいけないことは無理なことなのだろうか？

もしこのお願いが駄目なら他のものにすればいい。たくさん考えてあるからこっちは良いといつてくれるお願いもあると感づ。

（あまりに過激な表現）とか

（ノクターン的な表現）も良いかも知れない。

（女性の読む一部の雑誌には、たくさんの過激な用語が飛び交っている物もあります。）

「これは困りましたね。叶えてあげたいのですけど、いつも一緒にるのは少し無理があつますし、いろいろ問題もありますから・・・」

私のお願いはリゲルにとって『無理なこと』らしい。でもリゲルは私のお願いを叶えてあげたいと思つてこら困つてこる。

そんな優しい彼を見ていると、私はとても嬉しくなる。

私のために頑張って悩んでくれることがとっても嬉しい。

私は彼とのこんな日々がずっと続いて欲しいこと心から願つた。

「ん？ リゲルビうしたんだ？」

「いや、それがですね・・・・・・」

その為には、目の前にいる鬼を倒さないと・・・

でもその前に

「誰にもリゲルは渡さない、リゲルは私のもの！（チユツ）」

エヴァの目の前でリゲルに抱きついて頬にキスをした。これは私からエヴァへの宣戦布告。

これが私達の絶対に譲れないものを賭けた戦いの始まりだった。

閑話 金色の少女の気持ち（後書き）

次回は、閑話『じゅじゅ馬姫の気持ち』を予定しています。
早く原作に突入したい・・・

けどここから一週間ほど忙しいので、更新は無理かもです。

少しお休みをいただきますけど1~2月に入つたら再開します。

闇話 じゅじゅ 馬鹿の気持ち（前書き）

この一週間忙しかった。orz

まだまだ多忙な日々が続くけれど・・・

多分不定期になるけどこれからも更新はしてきますからーー。

闇話 じゅじゅ馬鹿の気持ち

ヘラス帝国第三皇女の自室にて

「はあ・・・・」

この部屋の主である少女は本田39回田のため息をついた。

最近の彼女は様子がおかしい。以前はとても活発でお付の侍女たちはいつも彼女に振り回されていた。

それが今や騒ぐこともなく窓の向こう側を見ながら儂げな表情をしている。

その光景は一種の神聖を帯びてさえいるようさえ見える。
そんな彼女の様子を見た彼女の両親である国王夫妻もとても心配しており、

「もしかして病気ではないのか?...」

と国王は國中の名医が集めよつとしたほどだ。

その計画は女王の手によつて阻止されました。その翌日、傷だらけの国王が目撃されたらしい。

その一方、心配をかけている姫君の様子はとこづひ

「うう～～うう～～王子様に会いたいのじゃ～～～。（ギュウウ
ウ）」

恋する乙女状態で自室の天蓋付きベットの上で枕を抱きしめていた。

症状は既に末期であり、国務も満足に行えなくなるほどだった。

「こんなことになっている理由は

1 大戦が終了してから既に3年ほど経つているが、リゲルと話せた回数、会った回数は数回ほどだけである。

2 「1によるリゲル分（同盟内では有名な必須栄養素の一つ。幾つかの部類に分けられている。）の不足

3 「自分が一緒にいられないハンデ

4・四人目の加入

上記の4つの要因によるストレスや寂しさによつてもつ既にボロボロだつたテオに、数日前のあることによつて止めの一撃を刺されたからである。

* * * * *

数日前

ザザア・・・・・ザアア・・・・

「・・・・聞・・・るか?・・・こち・・・・聞こえたら返事をしろ~。」

「じゅうじゅうテオ、じゃ。聞こえておるだ。」

「よし、通じたな。それでは恒例の活動報告会を始めんや。」

これは同盟内で行われている活動報告解である。本當ならばテオは帝国にいるため参加できないのだが、リゲルに投影型通信魔神具を

造つてもらひこの問題を解決している。

「さて、妾は最近リゲルと会つことができておらぬから報告はないのじゃ。お主等は何かあつたのかの？」

「クツクツクツク・・・・そんなに私の報告を聞きたいのか？（意地悪そうな表情のエヴァ）」

「～～～（だらしなく顔を緩めているアスナ）」

「・・・・・（無表情だがどこか嬉しそうに見えるイヴ）」

あからさまな態度の三人の様子を見て、何かがあつたことを悟つたテオは

「ムウ…その様子から何かあつたのじゃな…なんじゃ！何があつたのじゃ…！妾にも教えるのじゃ…！」

その後三人によつて語られた内容によつてテオは大打撃を受けたのだった。

一言で説明すると仮契約を三人に自慢されたと言つことです。

「フフフ・・・これを見るが良いーーー。」

「仮契約カードじゃとおーーーエヴァに先を越されるとは・・・ーーー生の不覚じや・・・・・・妾の王子様は汚されてしまつたのじや・・・・・ハッ！もしゃも主張まで・・・」

「エヴァだけじゃなくて私たちもリゲルと仮契約したのよーフフフ
フフ」

「私ともじててくれた。（先ほどと表情は変わらず無表情だがどこか嬉しそうに見えるイ・ヴ）」

喜色満面の様子で残りの一人も仮契約カードをテオに見せる。
一方それを見せつけられたテオは

「妾の王子様が・・・王子様が・・・グスツ・・・そんなの信じない
のじやーーー！ーーーうわああーーーんーーー！（ブツンッ）」

泣きながら通信を切りそれを破壊した後、自分のベットに潜り込んでいった。

「」して現在元氣るのである。

* * * * *

「」

そんな状態の第三皇女の部屋に、一人の女王が訪れてようとしていた。

「」

「」

「」

「」

「んむ？何が本氣を出せばなのじや？」

「そんなこと決まつておるではないか？妾が本氣で王子様を誘わく。
・・・フニヤアアー？ だだだつ誰じや！！ 侵入者か！？」

「侵入者とは酷い言ひ草じやのつ？ 共に戦つた仲ではないか？」

「おおー？ アリカではないか！ 久しいのう、元氣にしておつたか？
・・・・・さて、それはともかく・・・先の話、どのあたりから聞
いておつたのじや？」

「ふむ、『妾じやつて本氣を出せば王子様なんて一瞬で骨抜きにし
て結つこ』 「そこまで！ ！ そこまでじやあ！ ！ ！ 全部言わはずとも良
いではないか！ ！ そんなに妾をこじめて樂しいか！ ？ （ウルウル）」
・・・・・これは新しい趣味に田覚めそうじやの・・・・・（ジユルリ）」

「

「変態じやー変態が！ こじてるのじやー（ガクブルガクブル）」

「抵抗しても無駄じやぞ？ 観念して妾に身を差し出すがいいのじや
？ （ニヤニヤ）」

「嫌じやーー妾のこの身体は頭の先から爪先まで王子様のものなの
じやー」

「ほほう？頭の先から爪先までと畜生のかのう？最近の女子はここまで大胆になったのじやのつ（一々一々）」

「つづつ……／＼ も、もしや妾を騙したのか？！ならばアレも演技じゃつたのか……。そういえばアリカは既に結婚していたのう？ならば妾を襲つ訳はないはずじゃな？」

「そのとつづじや、決して本氣で襲にそつになつたわけではないじや。(もう一ツ、もう一ツ……)」

「……何故やつべつといひに擦り寄つてゐるのぢや？」

「なんじゃ？妾がテオの近くに行つてはいけないのかのうへ、そんなに妾は嫌われておつたのか・・・・」

「手を不自然に動かしながら近寄おとくる奴が誰つヤリフジやないのじゃ……」うちに来るでないわ……」のつ・・・・変態……」「

「（ゾクゾクッ）またしても新しい扉が開いた気がするのじゃー！・・・
・・・テオーーー？もつとー・もつとのじやーー？？？」

* * * * * 少々お待ちください * * * * *

「嫌じゃ……嫌なのじゃ……妾はそんなもの着ないのじゃ……」

「仕方がないの、なれば妾が……（脱ぎ脱ぎ）」

「自分で着よ」とすんなじやなこのじや……」

どんな服かは」想像にお任せします。

* * * * * わりにお待ちください * * * * *

「シクシクシク・・・ここに妾まで汚されてしまふたのじゃ・・・

「まあ冗談はさておき、テオに知らせねばならぬとおもつたことが
あつての、・・・今回妾は公務でここを訪れたわけなのじゃが、テ
オも良く知っている男が今回の妾の護衛なのじゃ。最近元気がない
と聞いておつたから、少し無理を重つて付いて来てもうつたのじゃ。

」

「…………それは本当か？」

「お主が最近元気がない理由ぐらい分かつてあるからね。戦友があまりにも可哀想じやつたから少し手助けしてやうと思つてのう。」
「…………ここからは妾の独り言じやが、その護衛にはこの部屋来るよう妾が呼んでおいたのじや。あとその護衛は万能でのう、なんと本人そつくりの人形を作り出せるのじや。しかも本人と同じように考え、行動する上に本人ともリンクさせることができるものじや。こんな人形があれば自分の仕事を人形に任せて自分は好き勝手にできるのう？」

「なんじやと……そんなことが可能なのか！？それなり・・・・・・ブツブツ・・・」

「既にテオの両親とは話をつけてあるのじや。テオの父上は最後まで泣つておったのじやが、テオの母上の助力もあってどうにか〇・H A ・ N A ・ S I だけで解決できたのじや。その母上からの伝言で『しつかり幸せになりなさい。でも時々帰ってきてなさいね？』と言つておつたのじや。」

「母上・・・・・ありがとうなのじや……妾は王子様と幸せになるのじや……。」

「そろそろかのう・・・・・ふむ、急に散歩がしたくなつたのじや。約分30分ぐらいは帰つてこぬからのう・・・・・上手くやる

のじゅせん?

ガチャギイ・・・・・コツコツコツコツ・・・・

テオによるリゲル説得ダイジェスト

全て描画すると、とても長くなるので簡潔にまとめました。

「わらわも連れて行つて欲しいのじや！！

「姫様だからあきらめなさい、国務があるでしょう?」

「嫌じゃ！ 絶対についてこくのじやーー（上田 + 淀田）」

たじろぐリゲル

「それに親御さんが許可するはずないでしょう。（コレでテオも諦めてくれるでしょう）」

「許可があればいいのじゃな？」

「でも許可なんて出るわけないでしょ？それにテオにしかできな
い仕事もたくさんあるでしょ？もし許可が出たなら話は別ですが
ね。」

「フフフ・・・言質を取つたのじゃ！－許可なら既に取つてあるの
じゃ！－コレで障害は無くなつたのじゃ！－あとは王子様がアリカ
の言つすごい人形を出してくれれば万事解決じゃ！－これからよろ
しく頼むのう？王子様？」

こうしてテオは帝国を離れてリゲルと一緒に過ごすことになった。
コレにより四人の抗争が激化したのは簡単に想像できることだらう。

閑話 じゅじゅ 馬姫の気持ち（後書き）

いつの間にかアリカが変態になつてゐ――――

何故こうなつた――――・・・・・・・・俺のせいだつた――――

第28話 ようしい、なりば京都に行けり + 第??話 とある人形のあつたか

短い・・・時間がなくて長文は書けなかつたので2話を1つにまとめてみました。長さはいつもと同じくらいです。

自動車学校やらなにやらで更新が遅くなっています。お待たせして申し訳ないです。

全部片付いたら一日一話に戻したいな・・・・。

一話一話のクオリティも向上させたいです。

注意

クオリティが低いです。どうか許してください。

第28話 よりしき、なれば京都に行ひ + 第??話 とある人形のあつたか

リゲル SIDE

大戦が終結して5年経ちました。その間私は、依然お世話になつた村を回つたり、アリカ姫の護衛をしたり（ナギが嫉妬していました）、戦争孤児を見つけてはアリアドネーに送つたりと色々していました。

私が昔住んでいた村を中心に近隣の村を合併させて色々改造していたら首都規模にまで大きくなってしまった時は流石に怒られましたね。

難民を受け入れてくれていたのでいろいろしゃつたのですよ。

戦争で居場所を失つてしまつた人たちや幼い戦争孤児の皆を保護するには多くの設備や家が必要ですし、食べ物も、医療機関や移動手段も・・・とやつていただけの間にかといつ訳です。

今では村の総人口は故国ウェスペルタニア王国の全国民の25%に迫るほどです。もはや村とは呼べない代物になつてしましました。

あと『全て猫だらけの理想郷』^(ニヤバロ) との村^(ニヤバロ) を繋いで多くの問題も解決させました。『全て猫だらけの理想郷』^(ニヤバロ) 中の研究所の技術力で大抵のことは解決できますからね。

食料や働き口の問題が解決した時も嬉しかったのですが、一番私が嬉しかったのが『襲われなくなつた事』ですね。猫人の女性達は村^(ニヤバロ) の男性を品定めするのに忙しいらしいです。

矛先が変わってくれてホッとしています。

あとMM元老院は一時解体されました。アレだけのことを起こしたのですから解体は当たり前でしょう。ですが、またいつか別の形で復活する可能性が大きいですがね・・・

それと、他の国も多数の有力議員が汚職していたのですから最近まで人事入れ替えが激しかったみたいです。

最近になつてやつと以前の落ち着きを取り戻してきた様に見えます。

おっと、話が逸れてしましましたね？気を取り直して、村の話の続きです。

この『J』は以前は忙しさからは想像できないほどに、村の仕事も安

定してきたので正直やることがないです。これならもう私がいなくても十分やっていけると思います。なのでそろそろここを離れようかと思っています。

幸い『紅き翼』^{アラルブワ}の世と別れるときに詠春が

「二つでも来ていいぞ? だが先に連絡しよ?」

と言つてくれていたのでそろそろ京都に行つてみましょうか。

数十年ぶりの日本です、全力で堪能したいと思います。

温泉に入つて、上がつたら牛乳を飲んで、和食を食べて、コタツの中で丸くなる、そして火照つた身体に染み渡る甘い蜜柑・・・・いですね、最高です。

では、荷物の準備を始めましょ! -!

私は関東呪術協会の長、近衛詠春と申すものだ。

一週間前に私の友人であるリゲルから「一週間後にそちらに行きますね。」と言う連絡を受けて、我が関東呪術協会では私の友人達の歓迎の宴会の準備の真っ最中だ。巫女達は忙しなく動き回り、料理や部屋の掃除の最終確認をしている。

普段から綺麗にしているのだから急ぐこともないとと思うのだが、巫女達のが言つには

「手を抜く訳にはいけません。私たちができる最高のおもてなしでお迎えしたいのです！！」

だそうだ。

つい先日知ったのだが、我が家の中の巫女達の殆どがリゲルのファンらしい。そのファンクラブも今では一つの世界の中で1・2を争うほどの規模らしい・・・本人はこの事を知っているのだろうか？

リゲルファンクラブこと『黒猫』の全てはエヴァの管理の下で運営されています。そのおかげで西洋魔術師に対する反感はリゲル達（エヴァ、アスナ、テオ）には向けられません。勿論リゲルはこのことを知りません。

そういえば最近、木乃音さんが巫女達とよく一緒に話している所を見かけるな?

近衛木乃音 :詠春の愛妻 陰陽術の達人 体が弱い 妖怪ぬり

ひよんの娘 大和撫子

・・・・・大丈夫だ、木乃音さんまでそうなつたと決まったわけではないはずだ。偶然だ、決してファンクラブの会員になつたと決まつて「詠春はん、クロ様は・・・」ほんつ、リゲル様は何時いらつしゃりはるんじす?」

クロ様とは、リゲルファンクラブ内のリゲルの呼び方です。

「木乃音さん、あなたまで・・・・・〇ーン」

背中に哀愁を漂わせ「自分の妻が友人のファンクラブ会員・・・しかも『様』を付けで愛称を・・・妻を取られたみたいで複雑な気分です。」と呟いていた呪術協会の長が巫女達によつて目撃された。

この情報はしつかり木乃音さんにも伝わり、しつかり慰めてもらつたそつだ。

第??話 とある人形のあつたかもしれない話

時系列は完全無視です。お氣を付けください。

? ? ? SHIDE

「・・・・・あの村は・・・」

「オオオオオオオ

炎の燃え盛る村の一角に着地した少年は以前助けられた女性のこと
を思う。

彼には主に対する忠誠や目的意識が設定されていない。そし彼は人
形であるがその思考は人とほぼ同じものである。

だが彼は自分の中に生まっていたその女性に対する特別な感情に気
づけなかつた。

それに気づかぬまま、彼はその女性を見つける

「・・・・・息はある・・・」

表情は無表情だが心なしか安堵しているように見える。そうでなけ

れば懲々彼女がまだ生きているかなど確認するわけがない。

「…………あ…………れ、あな…………たは…………」

意識が戻ったのかその女性は彼に気が付き話しかける。

「スミマ……セン……今日は……珈琲は……ちよつ……と……」

「いや……」

自分の身体の心配をするよりも先に彼に珈琲を作つて上げられないことを謝る女性。

彼女はこの先の自分の運命がわかつてゐるようだつた……

「コード・オブ・ザ・ライフメーカー
「創物主の掟」

ボツ・・・ザアアアアアア・・・・・

彼女の身体は無情にも新たに現れた者によつて消滅させられた。

「遅かつたなテルティウム。おつと、誤解するなよ？その女の傷は私じやない。そんな優雅さにかける殺しを私はしないさ。」

醜く顔を歪ませながら笑う男はそう言った。

それを無表情に聞くテルティウムはそこで初めてその男の方へ顔を向けた。

「襲撃者は人間だよ。もつとも、既にその人間どももサックリまとめて美味しくいただかせてもらつたがね？・・・・くつくつく・・・なぜつて顔だな？聞きたいか？聞かせてやろつ。」

その男はテルティウムの極微妙な変化に気づかぬまま喋り続ける

「ここの村の住人達は肌接触による強力な読心術の持ち主だったのだ。古来、読心術者は疎まれ、あるいは利用されてきたが・・・深部記憶まで読み取る彼女たちの力となると話しのレベルが違う！その力を必要とする後ろ盾がある内は良いがひとたび邪魔ともなれば・・まあ、彼女達に生き残りの選択肢はなかつただろうけどね！」

ガサツ

「んん?」

彼の背後から物音がし、それに気づいた彼は振り返る

「あ・・・あ・・・」

「ふん、まだ一匹生きていたか。ハハハハハ！小娘、逃げるな逃げるな！姉のもとへ苦しまずに送つてやるのうといつのだ！！ハハハハハツ・・・ハ？」

狂った笑みを浮かべながらその少女の方へ歩いていく男は・・・

真後ろにいた者よつて首を落とされた。

「きつ・・・貴様テルティウム！？何故、こんな・・・壊れたか！？彼女達に生きる道はなかつた！！他の全ての魂達の為に！！我らの計画しか道はないのだぞ！？」

「わかっている。」

「ならばな『ボキユツ！』『ゼビツ！』

「役目は果すさ、君の分まで……けど……あの珈琲はもう飲めないね……」

自分が壊した人形のことを全く気にせず、テルティウムは彼女の妹を保護して去つていった。

彼の後ろで燃え盛つてゐる炎の中で一人の男がその様子を見ていたことも知らずに・・

「とりあえず彼女を保護したのは良いんですけど・・・実体化させて怪我を治してから老化を抑える魔法をかけて隠居してもらいましょうか?・・・次に彼に会えそなのは十数年後になりますから、コールドスリープでもいいですね?・・・とりあえず彼女が起きてから相談しましょ。」

テルティウムは何気に彼のことを気に入つてゐたとある神様によつて、好きだつた人を救つてもらえたのだった。

それを彼が知るのはずっと先のこと・・・

これはもしかしたらあつたかもしないお話

第28話 よろしい、ならば京都に行けり + 第??話

とある人形のあつたか

木乃香の母親の名前を考えるのが大変でした・・・・
でもコ lena まだ誰も使ってないだろー！
・・・と信じたいです。

必死で考えて出てきた名前が木乃音さんです。
木乃音さんは死にませんよ？

次回リゲル一行が京都を訪れます。

第29話 よりじい、なりば総本山だ（一）（前書き）

若いときの詠春の口調は案外荒いんですね～

年をとつて変わったのは額の瓜ただけじゃなかつたんですね？

次回は少々キンクリします。軽く数年ほど・・・

原作に無い期間は書きにくくて、完成度も低いですし、何気にこの小説はもひつ5部目なのに原作突入してないとかドンだけなんでしょうね？

あと、今回は短いです。申し訳ない。

第29話 みじこ、なまはね総本山だ（1）

s.i.d.e

ザザザッピーーーザザザザ・・・・・

「…………聞こえ……・・・会長、心答願います。」

「聞こえていい。早速だがそちらの進行状況を報告します。」

「こちの準備は整っています。完璧です。」

「せうか、よくやつてくれた。報酬は特A級の物を準備してある。」

「ハイッ！…ありがとうございます会長…！」

「何も聞かずに協力してくれたことに感謝する。」

「このへりお安い御用です。では合図をお待ちしてます。」

「準備は整つたな。今夜こそ・・・・・」

リゲル SIDE

詠春に連絡してから一週間・・・・・
やっと京都に到着しました。

転移すればすぐに来れたのですけど魔法世界から出るのに必要な手
続きもありますし、テオの実体化も必要でしたからそれらの準備す
るのに時間が掛かってしまいました。

さて、後はこの長い階段を登れば関西呪術協会の総本山こと詠春の
家に着きます。

はやく露天風呂に入りたいです。

フラグが立ちました。

「ふむ? なにやら彼方此方から視線を感じるのじゃが?」

「・・・・全部で十一人いる。でも敵意は無いみたい。」

「監視がいるようですね。素性を確認したら勝手にいなくなってくれるでしょうから大丈夫ですよ。」

「詠春も先に連絡しておいてくれればいいのに。」

「そういう訳にもいかんだつ。ここは一応関西呪術協会の本部だからな？・・・それにしても粗末な守護結界だな？この程度なら一瞬で破れるぞ？」

「準最強級の実力者が襲撃してきたら危ないですね。詠春に強化しておくよろしく進言しておきましょ。」

この後、結界の弱点を話しながら数分かけて階段を登り終えました。

先には桜の木々に包まれた屋敷と、綺麗に並んだ巫女さん達と共に戦場を駆け抜けた盟友がいました。

「「「「「皆様、よひーそ御出で下さりました。関西呪術協会一同、心より歓迎いたします。」「「「」」」

「久しぶりだな。元気にしていたか？」

「ええ、そちらも健康そつで何よりです。長の仕事にはなれましたか？」

「まだまだ分からぬ事だらけ。木乃音さんに支えてもらひながらどうにかと言つ感じだよ。」

「新婚なのにゆづくりできないのは考え方ですね。多少のことならお手伝いしてもいいですよ？」

「いや、今は仕事に慣れないといけないから遠慮しておこう。もしもの時は助けてもらひつからな？」

「ええ、任せ下さい。」

〔詠春はへん。お食事の準備ができてますえ～～？〕

「おつと、話し込んでしまいましたね。立ち話もここまでこじましょづ。」

「そうですね。みんな行きますよ・・・四人ともこつの中に先に行つたのでしょうか？まったく気づきませんでしたよ・・・」

「リゲル・・・テオドラ様は準最強級ぐらいの強さになつてないか?
仮にお姫様だつたはずだと記憶しているんだが?」

「・・・ウチには悪ノリしまくつて見境無く魔改造する猫達が
いますからね・・・一年も一緒に生活すれば準最強級にもなり
ますよ・・・」

「・・・すまない。・・・デリカシーに欠けていたな・・・
・・・その、なんだ?・・・いつでも相談に乗るぞ?」

「・・・っ!・・・止めて下さい。優しい言葉が一番つら
いんですね。」

「・・・そうか・・・」

男は辛いです。

* * * * *

総本山に到着した昼過ぎ頃から始まつた宴は夜中まで続きました。

アスナちゃんとトオはウトウトし始めた頃に部屋に連れて行きました。

残りの二人はと言つと

「ハツハツハツハ！…もつと酒を持って来い！…！」

「ケケケケケ！…何デ俺ノ出番ハコンナニ少ナインダヨ…飲マナキヤヤツテラレネーヨ！…」

片方は一升瓶片手に酒をどんどん飲んでおり周りには数十本の酒瓶が散乱しており、もう片方は

「（ムシャムシャムシャムシャムシャムシャシャシャシャ…）・
・・・・・・お代わり。」「

ひたすらお変わりし続けています。食べ始めてから『お代わり』以外の言葉を発していません。

この光景を見ていると巫女さん達が可哀想になつてきます。

一方は「酒持つて来い！」と言い続ける幼女。

もう一方は猛スピード食べ続けて「・・・・お代わり。」としか言わない幼女。

私達は長の客人であるから手を抜くわけにいかないよつで、私がそ

の様子を眺めていたら倒れてしまう人もいたほどです。

「想像通りの鈍感主人公です。倒れた巫女さんはファンクラブ会員ナンバー43526番の未婚の20代前半の女性です。座右の銘は『クロ様万歳!!』

心配になつて駆け寄るのも思ったのですが他の巫女さん達に止められました。

木乃音さんに

「止めを刺すつもりですか？」

と言わされましたがどうこう意味だったのでしょうか？

続く

第29話 ようじい、なまは総本山だ（一）（後書き）

中途半端で申し訳ないです。

駄文になつてていることは理解しています。終盤になつてやつと以前の
ようにサクサク書けるようになりました。できるだけ早く調子を取り戻したいです。

テオの実体化手順説明

- 1 テオの頭の上に手を軽く乗せる
- 2 自分の体の中に流れている氣や魔力やらを手に収束させる
- 3 後は「実体化しろ~~~~~」と念を込めながらテオに色々混ざったナーフを流し込んでいく
- 4 軽く体が光つたら成功

第30話 よりしき、なりば総本山だ（2）（前書き）

多分今年最後の投稿です。

皆さん良きお年を～

第30話 ようじい、なまは総本山だ（2）

リゲルSHIDE

私はイヴとエヴァにそろそろ止めるよつに言つて、詠春に巫女さん達を休ませてあげるようによつてから露天風呂に向かいました。

ちょいと温泉に向かおつとしていたとき

「クロセゴホンツ・・・・・リゲル様お一人では露天風呂の場所がわからないと思いますので僭越ながら私がご案内させていただきます。」

と言つて巫女さん達の内の一人が案内してくれることになりました。
・・・・なぜか彼女の
笑顔の裏に『ニヤリッ』という文字が浮かんだ気がしたのですが気のせいでしょうか？

「こちらの暖簾の先が露天風呂で、ござります。どうぞ御緩りとお楽しみ下さいませ。」

「はい、態々案内してもらつてありがとうございました。」

軽く頭を下げながら去つて行く巫女さんを見送つた後、私は温泉へ

と向かいました。

* * * * *

おおっ！…今は誰も入っていないよひですねー…これだけ広い浴槽を貸切状態なんですか？」く贅沢です！…！

・・・・・あまつ褒められたことではないですが、温泉で貸切状態なりばやむことはたった一つ…！…！

それは・・・・・泳べ」とです…！…！

「温泉で背泳ぎをするとふちがどの辺りにあるか分からなくて頭をぶつけてしまひのは誰しもが経験することです！…あれはとっても痛かったです…！」

温泉で泳ぐのは周りの方々の迷惑になつますので止めましょう。

その後満足した私はゆっくつと温泉に浸かりました。

「余暦、コリギトモー、2時間ほどです。それまでは誰も中に入れませんが、どうぞ、田舎に来て下さい。」

「例の物は3日後に郵送される予定になつてゐるから楽しみにしていろ。では、後は任せた。」

「はい。」

「トントン」

【ただ今掃除中です。1~2時間お待ち下さい。】

は看板です

「~~~~~ ～~~~~」

温泉の中を思う存分泳ぎきつた私は岩に身体をもたれさせ、入る際に持ってきておいた日本酒を堪能しています。そして私はお猪口を片手に頭上に広がる星空に目を向けてます。

魔法世界でも同じように星を眺めていたこともあるのに、ここでは見る夜空は懐かしい感じがします・・・・

やはり故郷は良いですね。日本に移住してしまいましたか？

そうして数分経ったところで、ふと違和感に気が付きます。

「魔力ですか・・・・・」これは転移魔法・・・・・

的確に後頭部を狙つて飛んできた氷の礫を『なかなか良いたらいい（ひのき）』を使って叩き落します。

「チツ……」

「誰ですか？私が良い気分で温泉に、つてエヴァ？…………色々言いたいことはありますか先ずは……さつき舌打ちしませんでしたか？そして何かを投げた後みたいな姿勢でいる事も気になりますね。ですが、今私が一番言いたいことは…………何故男湯に貴女が堂々と入ってきて居るのです！？」

「今はリゲルと私だけだから別にかまわんだろう？」

「…………まあいいでしょ。では、なぜ私に氷を投げたんですか？」

「お前が辛氣臭い顔をしていたからな…………つて私の裸を見ていながらそんな反応とはどうこうことだ？！もつといつ慌てるとか顔を紅くするとかないのか？！」

「顔に出でこましたか、氣を使わせてしましたね。

「コレでも結構慌てているんですよ？微妙に顔が熱い気がしますし…………」

「本人でさえよくわからない変化に気づくはずがないだろ？が！…
…でも、無反応という訳ではないんだな？さっきから視線が顔
以外のところに向いていないしな？」

「それはどうでしょう？流石に自分の恋人でもない女性の裸をジロ
ジロ見るつもりなんてありませんよ？」

何十年も一緒にいるエヴァにそんなことはできません。本当に大切
な私の家族ですから・・・・・

「（カチンッ）・・・・私の前でそんなことを言うか？・・・・・
・・・・・・・・・そろそろ小娘共にも格の違いと言つ物を見せ付け
なければならんしな・・・・」これは強硬手段で既成事実を・・・・

「何か言いましたか？」

「いや、なんでもないぞ？・・・・・来たれ（アデアット）^{ボソッ}」

「ならないですけど・・・いい加減温泉に入らないと風邪を引いて
しまいますよ？」

「やうだな・・・・・（ニヤリ）」

०८८५४३२१

第30話 よりしき、なりば総本山だ（2）（後書き）

次回エヴァのアーティファクトが明らかになりますーー！

ではまた、やよいらへ

第31話 よりっこ、なりば総本山だ（3）（前書き）

明けましておめでとう御座ります。

今回は前回のH'GABA SHIDEからです。

第31話 ようじい、なまは総本山だ（3）

エヴァンジルンSIDE

私は今回の計画の協力者である巫女Aと別れた後、影を使った転移魔法で岩の影に転移した。

「~~~~~」

声が岩の向こう側から聞こえる。完全に油断しているようだな？口になら気づかれる前に今回の『リゲルと一緒に風呂計画』も成功しそうだな？問題はリゲルが風呂から出て行ってしまうかもしれないというところだが、そこは力技で押さえつけばいいだろう。このアーティファクトを使えばそのくらいできるだろう。

私はリゲルに気づかないように慎重に向こう側を覗き込む。

「ツ！／＼」

少し寂しげな表情で夜空を眺めるリゲルの様子は、『千の雷』数十発分の威力だった。

「魔力ですか……」レは転移魔法

動搖したせいで隠蔽していた魔力残滓が漏れてしまい、リゲルに気取られてしまった。

リゲルがこちらに気づくのも時間の問題だろう。

そう考えた私は魔法で作り出した氷の礫を……自分が出せる全
力の速さでリゲルの後頭部へ向けて放った！！

コレでリゲルを氣絶させることができれば、介抱と称して……
／＼なんてことは断じて考えてないんだからな！！

「…………」

だが氷の礫はリゲルの持っていた『なかなか良いたらい（ひのき）』
によつて叩き落された！！

「チツ……」

触れた物を凍結させる術式を組みこんだのに何故あのたらいには効
かないのだ！？コレで確実に隙ができると思つていたのに……！

「誰ですか？私が良い気分で温泉に、つてエヴァ？…………

色々言いたいことはありますがあさずは……さつき舌打ちしませんでしたか？そして何かを投げた後みたいな姿勢でいる事も気になりますね。ですが、今私が一番言いたいことは……何故男湯に貴女が堂々と入ってきているのです！？」

「今はリゲルと私だけだから別にかまわんだろう？」

今まで一度も一緒に入ったことなんてないけどな……入るうとして毎回腰が仕掛けられていて失敗したけどな……

「……まあいいでしょう。では、なぜ私に氷を投げたんですか？」

「お前が辛氣臭い顔をしていたからな（／＼）……って私の裸を見ていながらそんな反応とはどういうことだ？！もつといひ流れてるとか顔を紅くするとかないのか？！」

まだ一度たりともリゲルに見せたことない私の裸を真正面から見ている癖に眉一つ動かすこともしないとは……
寛大（？）な私も流石に腹が立つぞ！！

「コレでも結構慌てているんですよ？微妙に顔が熱い気がしますし……」

「本人でさえよくわからない変化に気づくはずがないだろ？が！…
…でも、無反応という訳ではないんだな？さっきから視線が顔
以外のところに向いていないしな？」

「これは一応異性として認識されていると言つていいのだな？全
くチャンスがないわけではないと言つてだな…！」

「それはそうでしょう？流石に自分の恋人でもない女性の裸をジロ
ジロ見るつもりなんてありませんよ？」

「（カチンッ）…私の前でそんなことを言うか？…
…そろそろ小娘共にも格の違いと言つ物を見せ付け
なければならんしな…」これは強硬手段で既成事実を…
」

コレまで何度もアピールしているのにこの男は全く気づいていない
のだな？！いや、もしかしたらあえて気づかぬことにしているの
ではないか？

それならこいつにも考え方があるぞ？

「何か言いましたか？」

「いや、なんでもないぞ？…来たれ（アーティスト）」

「ならいいですナビ……いい加減温泉に入らないと風邪を引いてしまいますよっ。」

「やうだな…………（ニヤツ）」

リゲルがこちらに顔を向けてこちらに向かって口元後に忍び寄つて抱きつぐ。

「つな……何するんです！？／＼／＼

「少しからだが冷えてしまったみたいでな？ 暖かい物に抱きついているだけだが？／＼／＼

とても恥ずかしいがここまで反応してくれるのならやつた甲斐があるな？ こんなに顔を真っ赤にさせたりゲルを見ていると……ムラムラげふんつ！

「いいから離れて下せ……色々当たつてますから……」

「フンシ……当たっているのではなく、当てるのだ……そんなに嫌なら力尽くで離れればいいだろ？（ニヤニヤ）（ニヤニヤ）」

「・・・・・なら周りの「」を解いてくれませんか?」

「そう言われて解くはずがないだろ?私のアーティファクト『歪ワープワールド』からお前でも逃れることはできない。諦めて私の思うがままになれ!」

私のアーティファクト『歪世界』^{ワープワールド}の能力は私が支配する世界を造りだし、この世界では私のイメージが現実として実体化する能力を持つている。

似たようなアーティファクトもあるが私の物とは比べるまでもない。無限に広がる結界空間を展開して相手を閉じ込めるアーティファクトではなく、新しく自分が全て支配している世界を造りだすアーティファクトだからな!!

今までにこの露天風呂の内部は私の『歪世界』^{ワープワールド}の管理下に置かれたのだ!!

そしてリゲルは私が造りだした魔法、気、神力おも無効化する鎖で身体を四方から繋ぎとめられている。

これは・・・・・詰んだ!!私の勝ちだ!!

「ふう、仕方ないですね？（ボフンツー！）＝ヤ～～！（スルリ）」

「つなー！それはズルいぞー！・・・・・なんて言ひとでも思つたか？猫に変化する事なんか想定済みだー！（ガシイー！）」

「フギヤツー！」

温泉に潜られる前に空中でリゲルを捕獲した私はそのままの勢いで

「！」の毛ざわりは久しづりだな・・・・・もふもふもふもふもふもふ・・・・・

「フニーヤ・・・フギヤ・・・・・ガクツ・・・・

「もふもふもふ・・・・・もふ？・・・・・わ、私の勝ちのようだな？フハハハハハハハハハ！」

その後、エヴァンジエリンが喜々とした様子で腕の中で手と足をぐつたりと垂れさせている黒猫リゲルを抱きかかえて自分へ部屋に去つた様子が巫女達によつて目撃された。

第31話 よりじこ、なりばん総本山だ（3）（後書き）

／＼＼＼＼ 異朝／＼＼＼＼

「・・・・・・・・・・」

「わいやわいやわいやわいや」

「（ナニナニナニナニ）」

「ムフフフ・・・・パクツ」

「（ビクツー・ジタバタジタバタ）」

ピロコーン

「猫に悪戯をされている裸幼女の写真が撮れました・・・至急ファンクラブのホームページにアップしないと・・・・・」

とある巫女が撮影した写真は後に一枚数万円で取引される一枚とな
つたらしい・・・

第32話 ようしい、ならば妖怪を見に行こう（前書き）

感想で『更新期待します』と言つてくれる人がいて、ついつい浮かれて更新してしまうのがミケなのです。

第32話 よろしい、ならば妖怪を見に行こ

「詠春、ちょっとお願ひがあるんですけど……」

「ん? 何だリゲル。私ができることならかまわないぞ。」

「ちょっと紹介して欲しい人がいるのです。」

「それは俺の知り合いなのか? その紹介して欲しい人ってのはだれなんだ?」

「それは

「

「リゲル～？今暇か？暇なら一緒に『竜の探求？』やらな……
……い的な……ん？これはなんだ？」

~~~~~

ちょっとぬりひょんに会つてきます。

そろそろアスナちゃんも学校に行かないといけませんからね？

四人一緒に学校に通えるように頑張つてきます。

おやつはエヴァの大好きな桃のタルトを冷蔵庫に入れておきました  
から仲良く分けて食べてくださいね？

リゲルより

~~~~~

「そういえばアスナは学校とやらに通っていたかつたな？だが・・・
・四人一緒に言うのはどういうことだ！？もしかして私も頭数に入
つてないか？それに学校とぬらりひょんはどんな関係があるんだ！
？全く訳がわからないぞ！…どうしたことなんだ？！」

「む？どうしたのじゃエヴァ？リゲルは朝早くに元気に行つてしまつたぞ？」

「そんなことはどうでもいい！！問題は何百年の時を生きている真
祖の吸血鬼たる私がお前ら小娘と一緒に学校などに通わなければな
らなくなるかもしれないと言うことだ！！リゲルはああ見えて一度
やると言つたことは絶対にやり遂げるからな・・・この今まで
は私とリゲルの時間が・・・」

「（ガラッシュ）朝からひるさいわよ？で、どうかしたの？」

「おお、アスナ。エヴァが妾たちと一緒に学校には行きたくないと
ごねておるのじゃ。四人の中で一番年上のくせにのう」

「お前達は年齢そのままだが私はお前らと違つて大人なのだぞっ！
？どうして大人の私がガキと席を並べて勉強せねばならんのだ！！
お前ら三人だけ行けばいいだろつ！？その間私はリゲルとイチャイ
チヤするのだ！..」

「（ガシイ！）そんなことはさせぬぞ？」

「（ガシイ！）全力で阻止するわー！」

「（ガシイ！）・・・抜け駆けは許さない・・・」

「離せ！..は、な、せ、..今からでも遅くない！..今からでもリゲルを探し出して説得すればって、イヴお前いつの間に？..や、止める！..お前らどこを触つヒヤンツ！..」、口うそこねイヤンツ！..お前ら・..もう怒つたぞ！..今日といつ今日は手加減なぞせずに全力で叩き潰してくれるわ！..リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！『来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹雪け常夜の氷雪　闇の吹雪』

「妾も負けてはおれぬ！..ヘス・ラス・マジック・プリンセス！』契約に従い、我に従え、炎の霸王。来たれ、淨化の炎、燃え盛る大剣。ほどばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄。罪ありし者を、死の塵に　燃える天空』

「あんたなんか返り討ちにしてあげる！..咸卦法　ーー（ゴウツー！ーー）」

「・・・絶対・・・負けない・・・トランプ変身」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「リゲル……早く帰つてきてくれ……俺じゃ止められない。
・
・
・」

たつた数時間で京都が軽く更地になりかけたらしい……

「（ズズズズズ）フォツフォツフォツフォ。茶が旨いのう？（コン
コン）ムツ！（探知魔法に掛からずにここまで来る者がいるとはの
う。しかも完璧に魔力を隠蔽しておるとは……）……入つて
よいぞ？」

「（ギイ）失礼します。ぬらー・・・学園長殿。」

「こま、ぬらりひょんと言わなんだく「近衛詠春殿からの紹介状を持つてきていますからお確かめ下さい」・・・・まあええがのう?不審者かと思うたが婿殿の関係者であつたか、フムフムフム・・・・ム!?ほつ、お主があの大戦の英雄、リゲル殿であつたか、これは失礼したのう。」

「それで今回の用件は麻帆良に住む予定だと言つことを伝えに來たのです。今は詠春宅に厄介になつてますけど、子供も生まれるようですしこの機会にどこかへ定住したいと思いまして、同じ魔法関係者ですからお伝えしておこうということです。あと数年したら・・・いえ、具体的に7年ほどしたら私の家族を麻帆良学園に通わせるつもりですから」

「フォツフォツフォ、英雄の家族が我が学園に入学してくれると喜ばしい限りじやのう。勿論大歓迎じやよ」

「そこで学園長殿お願いがあるのです。」

「フォ?かの有名な英雄からお願いとは・・・なんじやのう?」

「いえ、簡単なことですよ?・・・・・・『私達を怒らせないでください』ただそれだけのことです。」

「それがお願いなのかのう?てっきり住む家を見繕つてくれないか

?といつお願いかと思つたのじゃが?」

「それはもう手配が済んでもますから大丈夫です。それにそんな貸しを作るようなお願いをするわけがないじゃないですか?どうせお願ひの代価に麻帆良の警備でもやらせようとしたのでしょうか?私達を利用しようと思わないでください、これはお願いです。^{けいいく}守つて貰わなくとも構いませんが、その時には私が全力で報復しますから覚悟して下れ。」

「…………これは手厳しいの? ジャガ流石にその態度はどうかと思うが?」

「いやくらこしないと一家の主として自分の家族を守れないのですよ。英雄の肩書きは今となつては重い足枷です。自分の為に私達を利用しようとする人たちは幾らでもいますからね。」

「なにやら意外に批難されて居る気がするのじゃが……氣のせいかの?」

「学園長殿に心苦しいことなればそんなことはないと思いますよ?ああ、警備のことは等価交換ということになりお受けしてもいいです。それでは失礼しますね。(ヒュンッ)」

「…………」の部屋では転移魔法は使えぬようになつてあるはず

なのじやがのうへ・わしも苦くないのじやからもつと労わって欲しい
もんじゅわい。」

このときから今後ぬりつひよんを齒ませる事になる胃痛が着々と
進行していくのだが、それはどうでもここことだらう・・・・・・

第32話 ようじい、ながむ妖怪を見に行ひ（後書き）

数日前から新作を書いてみました・・・

ハヤテなんですが予想以上にアクセス数が伸びませんね・・・

やはりリリカルやエレやFATEもあるのほうが良かったのだろうか・・・

でも原作はISしか持っていないし・・・はあ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0406y/>

にゃんこ(?)に転生ですか？ よろしい、ならばネギま！に転生だ
2012年1月5日20時53分発行